令和６年度文部科学省
新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)
実施報告書

GO BEYOND

超えてゆけ！

滋賀県立伊香高等学校

巻頭言

滋賀県立伊香高等学校　校長　大森　文子

本校では「Go Beyond～超えてゆけ～」を合言葉にして、伊香高校と地域がともに未来を創ることを活動目標に設定し、令和４年度から高校魅力化「伊香高 Go Beyond プロジェクト～超えてゆけ～」に取り組んでまいりました。今年度（令和６年度）は、プロジェクト３年目、文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受けて 2 年目となり、これまでの計画を具体化させるべく事業を推進しています。

令和７年度の新学科「森の探究科」開設に向けて取り組んだ先行授業においては、地域の専門家の方だけでなく、地元長浜市の北部政策局、環境保全課をはじめ滋賀県内外の森林・環境系の関係の方々に大変お世話になりました。現在の普通科自然環境類型２、３年生の学校設定科目「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」の授業において主に先行授業を実施しましたが、生徒たちは積極的にアクティブに取り組み、また試行的な要素のある授業内容に素直な反応を示してくれたことで、新学科のカリキュラムがより具体的なものとなり、無事に完成させることができました。授業実施にご協力いただいた方々はもちろんのこと、新たな取組に一緒にチャレンジしてくれた生徒の皆さんに感謝しています。

今年度から地域連携コーディネーターの一員として、「やまのこ」（滋賀県の小学４年生を対象にした森林環境学習）スタッフ経験者の方を新たにお迎えしたことも、森をフィールドにした先行授業やカリキュラム作成において広がりを生みました。「森の探究科」という名称から林業科と捉えられることが多いですが、「森の探究科」の学習内容は森の多面的機能を学びのベースにして多岐にわたっています。森をフィールドにしながら地域の専門家と連携し、森・川・里・湖が水系でつながる滋賀県北部ならではの学びを創出していくために、今後も多方面の方々とつながりながら研究を続けていきたいと考えています。

滋賀県には小学生の自然環境体験学習として「やまのこ」「うみのこ」「たんぼのこ」があります。琵琶湖を有する滋賀県のすべての小学生が体験的に自然環境を学ぶプログラムがありながら、その学習が次へつながることがなく途絶えてしまっていることがひとつの課題となっています。本校では、環境県である滋賀の子どもたちが学んできた内容を踏まえて系統性をもたせ、また長浜市が現在構想されている子どもから大人までつながる環境教育プログラムに共に取り組み、環境未来人材を育成していく所存です。

頻発する自然災害、気候変動がもたらす異常気象、また国家間の争いによって人々の生活や命が脅かされる一方で、社会ではグローバル化やデジタル化が進んでいます。そのような現代社会の中で「森で学ぶ　森がキミの力になる」のキャッチコピーにあるように、生徒たちがしなやかに「生きる力」を育んでいけるよう、更なる努力を重ねてまいります。

最後になりましたが、本事業推進にあたりご支援とご指導をいただいております関係各位をはじめ多くの皆様方に心より感謝を申し上げ、巻頭の言葉といたします。

令和６年度　文部科学省
「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」実施報告書

目次

〇巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
〇目次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第１章　本校の概要
　１－１　所在地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　１－２　設置学科および在籍生徒数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　１－３　スクール・ミッション ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　１－４　スクール・ポリシー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第２章　令和６年度研究開発の概要
　２－１　事業の実施計画の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　２－２　事業の実施日程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　２－３　事業の実施概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　（１）　カリキュラムの検討内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　（２）　管理機関による事業の実施体制や管理方法 ・・・・・・・・・・・・・・32
　　（３）　高等学校における事業の実施体制や管理方法 ・・・・・・・・・・・・・34
　　（４）　運営指導委員会の体制および取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
　　（５）　コンソーシアムの体制および取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
　　（６）　コーディネーターの配置および活動内容 ・・・・・・・・・・・・・・・38
　　（７）　新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況 ・・・・41
　　（８）　管理機関における事業全体の成果検証、評価 ・・・・・・・・・・・・・47
　　（９）　管理機関による支援体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
　　（10）　成果普及のための取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
　　（11）　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組 ・・・・・・・49
　　（12）　他の事業との関係 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

第３章　研究開発の内容
　３－１　運営指導委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　３－２　地域と伊香高のミライ創造コンソーシアムの会議 ・・・・・・・・・・・・56
　３－３　教育活動改善に向けた先進校視察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
　３－４　新学科設置に向けた先行実施授業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
　３－５　地域をフィールドにした探究的な学び ・・・・・・・・・・・・・・・・・102
　３－６　伊香高校魅力化シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123

第４章　参考資料
　４－１　広報チラシ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125

第１章　本校の概要

１－１　所在地

〒529-0425　滋賀県長浜市木之本町木之本 251

１－２　設置学科および在籍生徒数（令和６年５月１日現在）

	１年	２年	３年	計
普通科	91	82	99	272

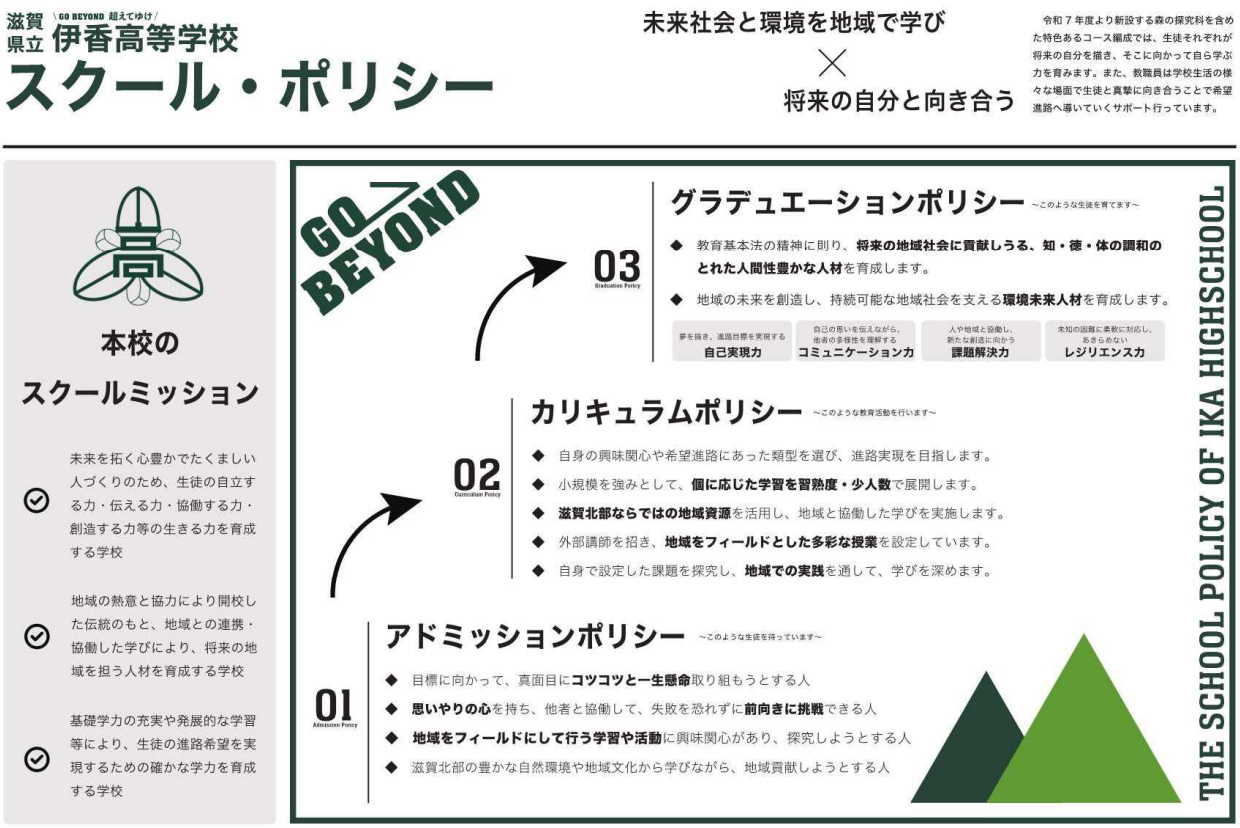
１－３　スクール・ミッション

① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校

② 地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校

③ 基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校

１－４　スクール・ポリシー



第２章　令和６年度研究開発の概要

２－１　事業の実施計画の概要（事業申請時のもの）

■実施計画書（所属等は令和６年５月現在）

２－１―１　事業の概要

（１）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 （ふりがな）	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	滋賀県立伊香高等学校 （いか）	地域社会学科	令和７年度	○

（２）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	４０人	学年制	森の探究科

（３）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

令和４年度滋賀県教育研究事業「県立高等学校魅力化推進事業」では、地域連携のためのコーディネーターを伊香高等学校に配置し、炭づくり、薪割り体験や地域住民とのふれあい対談など、地域を教育資源とした地域連携活動に取り組み、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICT による学校間連携授業に取り組んだ。また「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定も受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を目指す主権者教育の充実の研究を行った。さらに「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定により、自己を振り返り変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、またインターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性等を育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

これらの取組や学校を取り巻く環境を受け、かつて学校林を保有した歴史と豊かな地域資源を活かし、地域の専門家や地元長浜市と協働して、「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀ならではの学びに取り組むべく、令和７年度には「森の探究科」の設置を予定している。「森の探究科」の学びのベースは滋賀県の提唱する MLGs（マザーレイクゴールズ・琵琶湖を切り口とした滋賀県版 SDGs）をおき、持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会の構築を考える人材育成を図る＜ゼロ・カーボン・ハイスクール＞を目指す。また地域の森林資源を活かした仕事やまちづくりにつなげ、地域活性化と地域創生を目指す。教育内容は、次の２本柱とし、主な内容は次のとおりである。

①地元長浜市との協働による環境未来人材の育成：「カーボンニュートラル」

学校が立地する長浜市では 2022 年３月「ゼロカーボンシティ宣言」がなされ、それに先だって「湖北環境経済協議会」も設立され、行政、民間ともに、2050 年までに市全体の温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す脱炭素社会実現への機運が高まりつつある。この脱炭素社会を構築していくうえで、今後、環境・エネルギー分野をはじめ専門性を有する人材へのニーズが高まることが予想される。さらに脱炭素社会を地域主導で進め、エネルギーの地産地消を達成していくためには、その知識やスキル、ノウハウを持つ人材を地域の中で育成していくことが必要である。

地域の未来を見据えて子どもへの環境・エネルギー教育を進め、地域で育ち、地域で活躍する人材づくりを推進する長浜市と協働し、地域振興に資する長浜の脱炭素社会を実行する環境未来人材の育成に取り組む。

②新たな森林空間の総合利用に関する学び：「森林サービス」

地元の森林資源の整備と活用を実践的に学ぶ中で、特に森林空間を利用するサービスについて、フィールドワークや地域の専門家との対話を通して探究的に学ぶ。既存のサービスの充実だけでなく新たなサービスの創出を図り、そこで展開される活動をビジネスとして展開できるか、地域主導で持続可能なものであるか等を高校生の瑞々しい感性で探究し提案していく。このことは、人口減少や流出が激しい地域の活性化と地域創生につながる取組となる。これは林野庁が提唱する「新たな森と人とのかかわり」＝「Forest Style」の創造につながる学びであり、人生 100 年時代のあらゆるステージにおいて、森林とのふれあいや森の恵みをいただきながら、健康的、文化的で心豊かな暮らしを目指す資質を涵養することにもつながる。その結果、地球環境の保全や地域社会の活性化、持続性の向上にも貢献することができると考えている。

２－１―２　事業の目的等

（１）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

滋賀県全体の中学校卒業予定者数は、令和４年度 13,781 人に対し、令和 16 年度は 12,152 人となり、令和４年度から比較して 1,629 人（11.8%）減少する見込みである。このような人口減少や急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者からなる滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し議論を積み重ねてきた。ここでの答申は、令和３年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和４年度からの概ね 10 から 15 年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのための「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」（以下「基本方針」とする。）として令和４年３月にまとめた。

「基本方針」では、県立全日制高等学校 44 校中の 29 校を占める普通科について、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科等の設置を、高校の魅力化・教育改革の取組の方向性の一つとして示し、行政機関や地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためのコーディネーターの配置やコンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等を検討することが重要であるとした。

令和４年８月には各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、伊香高等学校については、①地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校②基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校とした。さらに教職員による主体的な具体化策の検討や、中学校や地域との意見交換（地域別協議会）、先進事例の研究等を経て、令和５年３月には、県教育委員会として、先に示した「基本方針」に基づき、学びの多様な選択肢や特徴的な学科等の配置を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」（以下「魅力化プラン」とする。）を提示した。伊香高等学校は、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」をかけ合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、新学科設置に向けた取組を推進する。

伊香高等学校が立地する長浜市の中学校卒業予定者数は、令和４年度 1,173 人に対し、令和 16 年度は 910 人となる見込みで、令和４年度から比較して 263 人（22.4%）減少となり、県全体の 11.8%を大きく上回る人口減少地域で、特に学校がある木之本地域は過疎地域にも指定されている。そのような中、令和４年３月に長浜市はゼロカーボンシティ宣言を行った。脱炭素社会の実

現に向け、市民一人ひとり、事業者、行政などのすべての主体が気候変動に関する危機感を自らの課題ととらえ、地域資源に由来する再生可能エネルギーの更なる活用、市民活動における省エネ行動、森林整備による二酸化炭素の吸収や市産材の活用を積極的に進めることを力強く宣言している。また本県では「琵琶湖」を切り口とした 2030 年の持続可能社会へ向けた目標（マザーレークゴールズ）（MLGs）を定めている。これは琵琶湖版の SDGs として、2030 年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、独自に 13 のゴールを設定している。その１つ「恵み豊かな水源の森を守ろう」では、水源涵養や生態系保全、木材生産、レクリエーションなどの多面的機能が持続的に発揮される森林づくりが進み、人々が地元の森林の恵みを持続的に享受することとしている。さらに令和５年度から「北の近江振興プロジェクト」として、県内で先行する課題への対応、地域事情を踏まえた振興、北部における様々な機会を生かした振興を進めるとともに、地域特性や魅力を生かした地域振興に取り組んでいる。

高校教育改革、長浜市の現状、滋賀県の施策から、地域の発展・成長に寄与する人材の育成を図る必要から、伊香高等学校に「森の探究科」を設置するものである。

（２）学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

伊香高等学校は、地域住民の熱意と協力（「三萬一心」）により開校した 127 年の歴史を持つ滋賀県最北の県立高校である。これまで、その歴史背景と豊富な地域資源をもとに、地元に密着した教育活動を展開し、知・徳・体の調和の取れた人間性が豊かで将来の地域社会を担う人材の育成を行ってきた。近年、人口減少と少子高齢化が進む中で、学校が位置する長浜市では地域に思いをもった人材育成が中長期目線で必要となっている。そこで学校は、かつて学校林を保有した歴史と豊かな地域資源を活かし、地域の専門家や地元長浜市と協働して「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀ならではの学びに取り組むべく、令和７年度に「森の探究科」の設置を予定している。

また、ゼロカーボンシティを目指す長浜市からは、地域実践をベースとした脱炭素に関連する教育内容について、専門的アドバイスの実施やコーディネートなどによる支援が提示され、また地域での持続可能な取組を支える人材育成を期待されている。本学科では「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」のバランスがとれた確かな学力を土台に、県北部地域の豊かな自然環境、森林資源等を活用し、「森で学ぶ」をコンセプトにして生徒の「生きる力」を地域とともに育みたい。そのために、地域を学びのフィールドとした探究活動に取り組み、主に次の４つの資質能力を培うことを目指している。

１．人や地域と協働し新たな創造に向かう「課題解決力」
２．自己の思いを伝えながら他者の多様性を理解する「コミュニケーション能力」
３．夢を描き進路目標を実現する「自己実現力」
４．未知の困難に柔軟に対応しあきらめない「レジリエンス力」

「課題解決力」については、単純に与えられた課題について解決するのではなく、探究的な姿勢を持ち自らあるべき姿を設定し、そこへ至るまでの道程を組み立て、目標達成に向かう力を育成する。また、複雑化する社会課題を解決するためには多様な主体と連携しながら物事を進める必要がある。そのような協働する力も実際の活動を通して身に付けることを目標とする。

次に、「コミュニケーション能力」について、多様な主体と協働するためには、自身の考えを相手の状況を踏まえ伝えること、またそれだけでなく相手の思いや考えをしっかりと汲み取るという、双方向型のコミュニケーション能力が必要となる。授業というある程度枠組みを与えられた状況での学びと、地域の人々との協働という不確実な状況での実践を通して、実用性のあるコミュニケーション能力を育成する。

次に、「自己実現力」について、伊香高等学校では進学と就職する生徒がそれぞれ半数程度で

あり、新学科についても同様になると考える。どのような進路をとるにせよ、自らの興味関心に基づいた自己決定とそれを実現する力が必要であると考える。多様な人と対話や実体験に基づいた興味関心の発見と、本課程を通して身につける課題解決力、コミュニケーション力を総体的に活かす自己実現力を育成する。

最後に、「レジリエンス力」について、これからの予測困難な時代を生きていく上で、逆境を跳ね返し回復するしなやかな力が必要である。３年間の一貫した探究学習を通して、自らの答を見い出しながら未来を切り拓く力を身に付け、困難や失敗があってもチャレンジし続ける力を育成する。

単に森林や環境に関する知識を得るだけでなく、「森で学ぶ」ことによって主に上記４つの能力を育むことが新学科の主眼となる。そのため、森林科学や木育、森林レクリエーション、ネイチャークラフトなど様々な分野における革新的な活動を行っている講師や、大学の教育系分野におけるアドバイザーを招き、カリキュラム開発に努める。

２－１―３　実施体制

（１）管理機関における実施体制や事業の管理方法

本県教育委員会事務局における実施体制については、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長１名、参事（校長級）１名、主担当として主査（副校長・教頭級）１名、主任主事１名をその任に充てる。

担当者と校長間で取組状況を共有するとともに、月１回以上は伊香高等学校に出向き、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行う。またコーディネーターの活動状況を、毎月活動報告書として提出してもらい、業務実態を把握・管理する。あわせて高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーターなどと協議を行いながら進め、事業管理を行う。

また県の「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を定期的に開催することを予定しており、この連絡会議において、各高校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認することとしている。この連絡会議の場で、伊香高等学校からの諸提案を行い、関係各組織に積極的な協働・協力を要請し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、地域連携にかかる課題の共有と成果の普及を行っていく。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は年１回開催（令和５年度は令和６年１月 23 日に開催）し、本県の地域連携重点校について、伊香高等学校からの提案等により、諸課題等の情報共有を行うとともに、他の高等学校の進捗状況を確認しながら、伊香高等学校の改善点等を把握することとしている。働き方改革の観点から、オンラインによる開催も積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は滋賀県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室長を事務局長に据え、参事（校長級）および業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、指導主事を配置する。

この「地域連携重点魅力化連絡会議」に加え、伊香高等学校では、年３回、運営指導委員会を開催することで、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。運営指導委員会は外部有識者で構成するものとし、事業の目的に鑑み、以下の構成で委員委嘱を行っている。

・委員 学識経験者（滋賀県立大学環境科学部）市民参加型持続可能な地域活動の研究
・委員 学識経験者（滋賀大学教育学部）環境教育・技術教育の研究者

・委員 民間企業（里山実験室 HareMori）元滋賀県林業専門職、森林総合監理士
・委員 民間企業（森の案内人）森ツアーガイド、森のサロン実施
・委員 民間企業（髙橋金属株式会社）湖北市民会議構成員、ゼロカーボン実践企業
・委員 民間企業（株式会社バイオマスアグリゲーション）木質バイオマスエネルギー
・委員 行政機関（長浜市未来創造部）ゼロカーボンシティ宣言、地域づくり・振興関係

運営指導委員会は、県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室参事（校長級）が事務局長となり、業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、主任主事をその任に充てる。

中学校等卒業予定者進路希望調査の結果にも注視し、長浜市内 10 中学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力づくりについて、長浜市教育委員会等の協力も得ながら、検証していく。

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、管理機関では、令和４年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICT を活用した、小規模の学校間での遠隔授業の日常的な導入に向けた研究に取り組んだ。伊香高等学校を研究校に指定した研究で、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

コーディネート人材に期待する、評価する考え方は３点ある。１点目として、高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、生徒を指導するというより、授業において地域との関わりや機会を作ったり、地域行事の情報提供や人の紹介をするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを求めたい。２点目は、県立学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を求める。高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することも期待する。３点目としては、地域連携の流れを持続可能なものにするため、属人的な活動で終わらせるのではなく、協働体制（コンソーシアム）を構築・充実させていき、事業指定終了後も持続可能な協働体制構築のコーディネート機能を期待し、評価を行う。

令和４年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高校 29 校のうち、地域連携重点により魅力化を図ることを推進する 13 校で「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和５年度から開催している。その中で、伊香高等学校による、地域社会に関する学科の設置に向けた具体的な提案を期待するほか、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果・検証をしていきたい。併せて、伊香高等学校では、年３回運営指導委員会を開催し、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てることとしている。

さらに、管理機関は、伊香高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、 SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業のその後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を４年後・７年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究し評価も行う。集計・分析した調査結果は、国の事業終了後も、伊香高等学校や県教育委員会において、本事業の成果の検証および「魅力化プラン」の地域連携重点の事業成果のための基礎資料として役立てることとしている。

スクール・ミッション、スクール・ポリシーの観点からも事業全体の成果検証を行い評価して

いく。特に高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としての観点で評価する。さらに県教育委員会で実施する中学校等卒業予定者進路希望調査の結果も注視し、長浜市内 10 中学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力、成果について、長浜市教育委員会とも協力し検証していく。

（３）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

校内では、令和４年度より教務課内に魅力化推進担当を置き、伊香高等学校の４類型（特進、地域文化、自然環境、スポーツ健康）から選出した委員と魅力化学校間連携担当者、県配置のコーディネーターで構成する「魅力化推進室」を設置、魅力化の方向性を模索し、新学科設置について検討してきた。令和５年度から「森の探究科推進室」と改称し、新たに長浜市が採用する地域おこし協力隊のコーディネーターを加えて、新学科設置に向けての取組を推進している。合わせて、令和４年度より検討してきた、伊香高等学校における３年間を通した「総合的な探究の時間」についての授業内容も本推進室で一体的に管理していくことで、新学科での学びと普通科全体の探究的な授業が相乗効果を発揮できるように留意する。また「総合的な探究の時間」、学校設定教科、公民や理科などのカリキュラムマネジメントに努め、「森の探究科」の学びの推進に努める。

〔森の探究科推進室　構成〕

管理職
- 教務課　①魅力化推進担当（主・専任）　②魅力化推進担当（副・兼任）
  ③県コーディネーター　２人　④長浜市コーディネーター
- 各類型代表委員
  - ・特進
  - ・地域文化
  - ・自然環境
  - ・スポーツ健康
- 学校間連携担当

推進室では、全体での検討会議を月１回程度開催するとともに、核となるメンバーについては、１）コンソーシアム運営、２）新学科カリキュラム、３）広報のそれぞれの分野を担当し、週１回以上の頻度でチーム会議を行い進捗確認や各種相談を行う。また、伊香高等学校ですでに活用している Microsoft Teams を活用することで、日頃のやり取りを可視化し、お互いの状況把握が常時可能な状況をつくる。

また、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者と校長で月１回以上は取組状況を共有するとともに、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行うほか、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長や森の探究科推進室メンバーなどと協議を行う。

県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理する運営指導委員会は年３回開催され、伊香高等学校としては、そこに向け、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。また管理機関が行う「地域連携重点魅力化連絡会議」において、からの提案等を行い、地域連携に対する諸課題等の情報共有を行うとともに、伊香高等学校の改善点等に関する助言も得たいと考えている。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

地域社会学科に関わる研究開発の実績としては、令和３年度からマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を彦根工業高校において実施している。彦根工業高等学校は、「ものづくりはひとづくり」をモットーとした創立 100 年以上の歴史ある学校である。高校がある彦根市には高等教育機関として、滋賀県立大学工学部・環境科学部や滋賀大学データサイエンス学部等がある。伝統技術等のビッグデータ分析など ICT・デジタル教育で連携を図りながら、社会的課題を新たなチャンスととらえ、高付加価値を持つ産業へと創出できる“人財”を多様な主体の共創により育成するシステムを構想し、研究推進に取り組んでいる。

絶えず革新し続ける最先端技術と滋賀の風土が培ってきた伝統産業等の技と心を生かし、地域産業界と彦根工業高校が一体・同期化し、郷土愛にあふれた人財育成によって地域を活性化させ、地域産業の未来像の実現を資するものである。

また、令和元年から実施された文部科学省事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に３校が申請を行ったが、令和元年度からグローカル型アソシエイト校に高島高等学校、令和２年度からプロフェッショナル型アソシエイト校に大津高等学校が認定された。

高島高等学校は、地域の特性に応じながら同時にグローバルな視点ももって社会課題の研究を行う、フィールドワークを含む「高島学」での探究的な学びを実施している。また大津高等学校は地域の課題を家庭科の視点から捉え、地域と連携・協働しながら、地域理解を深化させ、職業観を醸成しながら、地域をどのように活性化し、地域に貢献していくべきかを学んでいる。両校の事業指定は終了したが研究成果をいかし、地域連携を推進する取組を継続していくとともに、県内高等学校へも情報発信を行う。

さらに、滋賀県独自の研究開発事業として、３つの事業を実施している。

「県立高等学校魅力化推進事業」では、モデル校に伊香高等学校を指定し、地域連携のためのコーディネーターを配置、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICT による学校間連携授業に取り組んだ。

「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」では、研究推進校に伊香高等学校を指定し、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実に取り組んだ。

「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」では、伊香高等学校をはじめ、17 校を指定して、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

このように、本県では、県立高等学校と地域社会との連携は重要であるととらえ、伊香高等学校をはじめ複数の学校に対し、県独自の地域連携事業をはじめ、学校運営協議会設置を推進し、コミュニティ・スクールを拡大してきた。現在、伊香高等学校はコミュニティ・スクールの取組も進めているが、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受けることにより、学校と地域の関係性をさらに深め、学校と地域の連携・協働による教育活動の推進の先導性を高めることで、本県高校教育の更なる充実を図りたい。

（5）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
滋賀県立大学環境科学部 准教授	平岡　俊一	環境科学部環境政策・計画学科
滋賀大学教育学部 教授	岳野　公人	環境教育・技術教育
里山実験室 HareMori 森づくりコーディネーター	山本　綾美	森林総合監理士 滋賀もりづくりアカデミー講師
森の案内人 合同会社 NiwaMori 代表社員	三浦　豊	森ツアーガイド、森のサロン実施 著書『木のみかた 街を歩こう、森へ行こう』(ミシマ社)出版
高橋金属株式会社 代表取締役社長	高橋　康之	長浜市で脱炭素社会に向けて取り組む企業
株式会社バイオマスアグリゲーション　代表取締役	久木　裕	長浜市で脱炭素社会に向けて取り組む企業
長浜市未来創造部　部長	中嶋　克之	ゼロカーボンシティ宣言・地方創生担当

（6）運営指導委員会が取り組む内容

新学科「森の探究科」で学ぶ内容は、「森林サービス産業」と「脱炭素に資する森林のエネルギー利活用」に関するものの大きく２つに分けられる。それぞれの視点が上手く統合され相乗効果が発揮されるよう、運営指導委員会では、新学科カリキュラム内容や運営体制構築に関して専門的立場から助言を行う。また、高校教員やコンソーシアムの参加主体の当該テーマ理解向上に向けた講習などの実施も検討する。また、外部専門家のみならず、地域内で関連した活動を実際に計画し推進している実践者にも委員会にご参画いただくことで、高校と地域のスムーズな連携実現を目指す。

２－１―４　学際領域学科又は地域社会学科等における取組

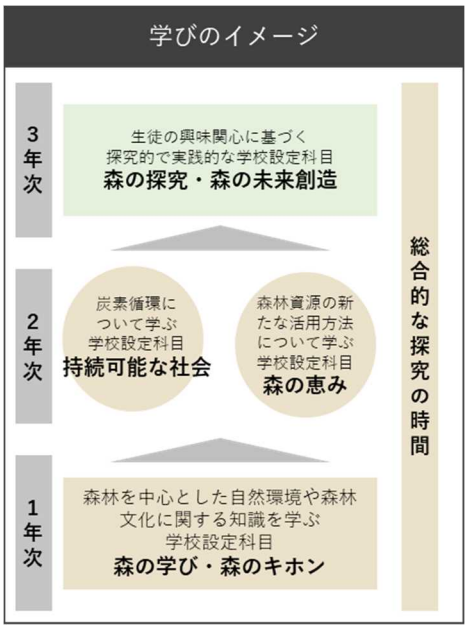
（1）学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

「森の探究科」の学びのベースには県の提唱する MLGs（マザーレイクゴールズ・琵琶湖を切り口とした滋賀県版 SDGs）をおき、持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会の構築を考える人材育成を図る。また地域の森林資源を活かした仕事やまちづくりにつなげ、地域活性化と地域創生を目指す。教育内容は、次の２本柱とし、主な内容は次のとおりである。

①地元長浜市との協働による環境未来人材の育成：「カーボンニュートラル」

学校が立地する地元長浜市では 2022 年３月「ゼロカーボンシティ宣言」がなされ、それに先だって「湖北環境経済協議会」が設立されており、行政、民間ともに、2050 年までに市全体の温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す脱炭素社会実現への機運が高まりつつある。この脱炭素社会を構築していくうえで、今後、環境・エネルギー分野をはじめ専門性を有する人材へのニーズが高まることが予想される。さらに脱炭素社会を地域主導で進め、エネルギーの地産地消を達成していくためには、その知識やスキル、ノウハウを持つ人材を地域の中で育成していくことが必要である。地域の未来を見据えて子どもへの環境・エネルギー教育を進め、地域で育ち、地域で活躍する人材づくりを推進する長浜市と協働し、地域振興に資する長浜の脱炭素社会を実行する

環境未来人材の育成に取り組む。
②新たな森林空間の総合利用に関する学び：「森林サービス」
　地元の森林資源の整備と活用を実践的に学ぶ中で、特に森林空間を利用するサービスについて、例えばキャンプやトレッキング等のアウトドア活動、森林浴等のリラクゼーション活動、森のようちえん等自然を活かした教育活動などをフィールドワークや地域の専門家との対話を通して探究的に学ぶ。既存のサービスの充実だけでなく新たなサービスの創出を図り、そこで展開される活動をビジネスとして展開できるか、地域主導で持続可能なものであるか等を高校生の瑞々しい感性で探究し提案していく。このことは、人口減少や流出が激しい地域の活性化と地域創生につながる取組となる。これは林野庁が提唱する「新たな森と人とのかかわり」＝「Forest Style」の創造につながる学びであり、人生 100 年時代のあらゆるステージにおいて、森林とのふれあいや森の恵みをいただきながら、健康的、文化的で心豊かな暮らしを目指す資質を涵養することにもつながる。その結果、地球環境の保全や地域社会の活性化、持続性の向上にも貢献することができると考えている。
　学校設定科目としては、1 年次に森林を中心とした自然環境や森林文化に関する基礎的な知識の習得を目的とする「森のキホン」科目を、２年次には「持続可能な社会」と「森の恵み」という地域と連携した専門的な科目をそれぞれ設定。３年次にはそれまでの授業を踏まえながら、生徒の興味関心に基づく探究的で実践的なマイプロジェクトを実施しその内容をまとめる「森の未来創造」を設定し、新学科における教育の集大成とする。また、新学科での学びと普通科全体の探究的な授業が相乗効果を発揮できるように留意するとともに、学校設定科目や総合的な探究の時間、公民や理科などのカリキュラムマネジメントに努め、「森の探究科」の学びの推進に努める。さらに修学旅行・文化祭などの学校行事や部活動、地域活動への参加など、学校生活の様々な機会を活用して、当該分野の知識や興味関心を深める内容とする。

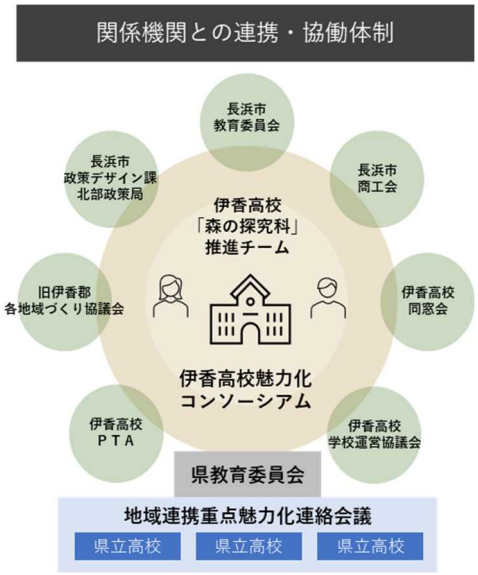


（2）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法
　すでに連携・協力をいただいている関係機関もあり、今後正式にコンソーシアムの委員委嘱等をしながら体制作りを行う。ややもすれば、地域や関係機関は依頼があれば協力するという受動的なかかわりになる傾向にあるが、そうではなく、それぞれができることや意見を出し合う場としてコンソーシアムは構築したいと考えている。
　伊香高等学校側では、前述の「森の探究科推進室」が中心となり、コンソーシアムとのやり取りを行う。本事業に関連し県が採用するコーディネーターには、主にコンソーシアムマネージャーとして、コンソーシアム構成員との関係性構築やコンソーシアムが実際に動くものになるような働きかけや仕組みづくりを期待する。
　コンソーシアム構成員は、本事業で重点を置く「１．カーボンニュートラル」「２．森林サービス」「３．地域連携」という大きく３つの視点を持って構成する。カーボンニュートラルにおいては、脱炭素社会構築に向けた活動を計画している長浜市をはじめ、地域のエネルギー専門家、大学、県庁関係部署等を構成員として迎え入れる。また、森林サービスに関しては、長浜市内の

森林関係団体の協議会である森林マッチングセンターや商工会や市内関連事業者、県庁森林政策課などを迎え入れる。地域連携に関しては、自治会等の地域づくり組織や地元商店街、近接するこども園や小・中学校、市役所関連部署等を迎え入れる。

コンソーシアムは、全体的な方針の審議を行うハイレベル会議と、個別の活動（例：森の探究活動、地域連携活動、保幼小中連携活動、など）を推進する専門部会の２階層とし、機動的に活動を推進できる体制とする。

高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたいことから、コンソーシアムの構成員から、高校生の取組に対する社会的評価も期待している。



（３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
長浜市政策デザイン課	調整中	市の重点プロジェクトに関すること
長浜市北部政策局	調整中	市の北部政策に関すること
長浜市教育委員会	調整中	小中高連携に関すること
長浜市商工会	調整中	地域商工業者との連携
滋賀県教育委員会	調整中	県立高校の魅力化に関すること
旧伊香郡各地域づくり協議会【木之本・高時・伊香具・杉野・余呉・西浅井・高月】	調整中	市北部の地域づくりに関すること
伊香高校同窓会	調整中	伊香高校同窓生との連携
伊香高校 PTA	調整中	伊香高校保護者との連携
伊香高校学校運営協議会	調整中	伊香高校の運営全般に関すること

（４）配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
合同会社 kei-fu（ケイフー）	中山 郁英 氏
ココウ農園、ロハス長浜	伊藤 利恵 氏
長浜市地域おこし協力隊	副島 拓歩 氏

▼当該者の主な実績

中山郁英氏は、東京大学のイノベーション教育プログラムや行政と協働した事業に携わり、令和４年から伊香高校地域連携コーディネーターとして活動。行政と教育分野のコーディネートに関する知見を持つ。伊藤利恵氏は、三重大学生物資源学部森林資源学コースで学んだあと、静岡県、滋賀県で森林関係の仕事に携わり、森林環境学習の企画や、県内の小学生を対象とした森林環境学習「やまのこ」指導員としてのキャリアを持つ。副島拓歩氏は、NPO 法人カタリバでのインターンシップなどを通して探究教育や地域と連携した教育に関する経験を積み、地域おこし協力隊として取組を行っている。

▼コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

中山氏は、県や高校担当者と協働し、主にコンソーシアムマネージャーとして、本事業に関わる行政や民間事業者、地域組織など多様な主体との調整や事業推進を行う。校内への駐在や電話・オンラインでのやり取り等に従事する。教務課に配置し、学校管理職や教員との情報交換などを魅力化推進担当の教員とともに行う。具体的には以下のような業務を行うことを想定している。

・本事業に関するコンソーシアム組成のための各主体との調整、立ち上げ
・コンソーシアムの運営方法検討、専門部会設置検討と運営支援

伊藤氏は地域の森林関係者と協働し、新学科のカリキュラムの具体化とその準備を行う。実習のフィールドに出向いて専門家と教員をつなぎ、授業内容を構想する。またデスクを職員室内に設置し、週２日程度は学校内で生徒募集や情報発信のための業務を支援する。中山氏と伊藤氏あわせて、月 12 日程度業務に従事する。

・地域や専門家と連携した新学科カリキュラム形成支援
・地域連携のための拠点整備支援
・その他、学校経営や生徒募集、情報発信など全般に関する支援

副島氏は主に学校内で活動し、各担当教員と連携しながら、新学科のカリキュラム検討に関連した地域の各種主体と連携した授業や活動などの実施や、ウェブサイトや SNS などを活用した情報発信などを行う。デスクを職員室内に設置し、週３日程度は学校内に滞在し業務を行う。

長浜市の委嘱する地域おこし協力隊としての活動となるが、その業務管理においては、長浜市と伊香高校が協働して実施する。

中山氏は主に学校外部との関係構築・事業推進、伊藤氏は学校内外をつなぎながら新学科のカリキュラム形成、副島氏は主に学校内部での関係構築・事業推進と主たる担当領域を分けるが、密に情報交換しながら一体的に事業が推進されるように留意する。

（５）学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

県教育委員会では、急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者から成る滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、令和２年度から２年間にわたって議論を積み重ねてきた。そこで出された答申は、令和３年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和４年３月「基本方針」として策定し、公表した。

令和４年８月には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、伊香高等学校については、①地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校、②基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校と公表し、生徒、保護者にも知らせた。また、伊

香高等学校の魅力づくりについて、10 月には生徒会を中心に、生徒との話し合いを行い、さらに 11 月には地元住民の皆さんからのヒアリングを行い、様々な意見を賜った。

令和４年 11 月には、「魅力化プラン」策定に際し、市町のまちづくり主管課、教育委員会、地域の中学校長、保護者とそれぞれの代表に出席いただき、滋賀の県立高等学校の魅力化の方向性についての意見聴取（地域別協議会）を、管理機関が実施した。その中の意見を受けて、令和５年３月には「魅力化プラン」を提示した。伊香高等学校については、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに、「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」をかけ合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、新学科設置による魅力化を推進することを示した。

また、令和５年３月に、「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、その中で令和４年度の伊香高等学校の教育活動の広報、生徒による地域連携についての研究発表、さらに県教育委員会も交え、今後の伊香高等学校の魅力化の方向性、地域連携の取組について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者に向けてメッセージを発信している。令和６年３月にもシンポジウムを開催し、情報を発信するとともに、魅力化に対する意見を伺う場としたい。シンポジウムのみならず、運営指導委員会やコンソーシアム全体会議、学校運営協議会において、多くの当事者で課題を共有し、一方通行にならないよう意見交換等の機会を設けるよう努め、それぞれの立場や果たすべき役割の理解を深めることにも留意したい。

管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。また、伊香高等学校の所在地の長浜市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌「リビング滋賀」に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたい。

令和６年度には、令和７年度新学科実施に向け、全県下の中学生・保護者・地域住民を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うとともに、長浜市を中心に、地域連携の取組、学校改革についての説明会を、地元小中学校、地元商工会議所、地元自治会を基本とした形で実施し、生徒・保護者・地域に対する説明を行う。また学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信していく。

２－１―５　実施計画

（１）３ヶ年の実施計画の概要

令和５年度の校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課森の探究科推進室（プロジェクトチーム）を組織した。そのうえで、委嘱した運営指導委員、校長、教頭、事務長、教務主任を中心に研究にかかわる組織ならびに運営指導委員会、コンソーシアムを右記のように構成した。

管理機関の担当者と校長は、月１回以上は取組状況を共有しながら、諸課題の解決に向けた協議を行う。また生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動を複数回見学し、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行い、学校設定科目「森のキホン」「森の恵み」「持続可能な社会」「森の未来創造」の充実を図る。特に、森の探究科運営指導

委員会において、校内事務局は地域連携コーディネーターと協働して作成した学校設定科目のシラバスについて、評価・検討し改善を重ねる。

将来的には木質バイオマスの熱利用や太陽光発電を高校自体に取り入れることで、学習内容を体験的に理解するとともに、日本初の「ゼロ・カーボン高校」を目指す。また近接する保幼・小中学校も含めた地域のカーボンニュートラルに貢献できる環境を整える。

管理機関においては、「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第５号）」改正を行い、新学科設置を正式決定した。また「地域連携重点魅力化連絡会議」「運営指導委員会」を開催し、課題の整理や他校への情報発信、連携促進に努める。

令和６年度は、新学科設置の周知活動として、県教育委員会ホームページや保護者向け情報誌「教育しが」や、「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行う。６月には県教育委員会が主催し、８月には学校が主体となって学校説明会を実施する。並行して、地域連携コーディネーターと協働して学校設定科目について、普通科生徒の教育課程を一部変更するなど、指導と評価を一体的に行い、教育課程について、総合的な探究の時間を含め、さらなる改善を図るとともに、コンソーシアム構築の充実を図る。卒業生にはアンケートを実施し、新学科１期生との比較も図っていく。

令和７年度入学生が１期生となる。地域連携コーディネーターと協働して練り上げた学校設定科目や総合的な探究の時間、その他各教科の教育活動等をマネジメントしながら実施し、生徒アンケートや関係者の評価を受けながらカリキュラムについてさらに改善したり、構築したコンソーシアムの充実化を図りながら、指定事業終了後の体制づくりについても、長浜市やコンソーシアムの関係団体等と確認を行う。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい。

コーディネーターと連携しながら、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「森の探究家」（森林サービス産業や環境エネルギーに関連する専門家）のタネを育てる、高校生と大学生が共に学び合いをするコンソーシアム構築を目指す。

（２）令和６年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
４月	・プレ授業の年間計画作成	・長浜市との連携確認、情報共有 ・コンソーシアム会議年間計画作成 ・新たな分科会の設立検討
５月	・「森の恵み」「持続可能な社会」それぞれの授業研究・協力者の選定・打診 ・新学科カリキュラムの確認とシラバスの作成 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言）	・コンソーシアム参画者への報告と聞き取り

6月	・「森の恵み」「持続可能な社会」それぞれの授業研究・協力者とのプレ授業１の検討 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師）	・コンソーシアムの全体会キックオフ ・事業の進め方についての共有 ・第１回運営指導委員会 ・学校説明会（県教育委員会主管）
7月	・プレ授業１の実施と振返り （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師）	・カリキュラム分科会第１回
8月	・新学科シラバスの初稿作成 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・プレ授業２の検討 ・オープンスクール （中学生や保護者に新学科説明）	・学校説明会 （学校主体・地域づくり協議会協力）
9月	・プレ授業２の実施と振返り （フィールドワーク） （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師）	
10月	・新学科シラバスについて専門家との集中検討 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言）	・カリキュラム分科会第２回 ・学校説明会 （学校主体・地域づくり協議会協力）
11月	・プレ授業３の検討 （フィールドワーク）	・コンソーシアム２回目全体会の実施 ・新学科カリキュラムとシラバスの共有 ・第２回運営指導委員会
12月	・プレ授業３の実施と振返り （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師） ・新学科シラバスの最終確定 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言）	
1月	・プレ授業４の検討	・地域連携重点魅力化連絡会議 （県教育委員会主管）

２月	・プレ授業４の実施と振返り （カリキュラムアドバイザーによる 指導助言） （革新的な教育活動講師）	
３月	・次年度の授業準備	・年度の成果を発表するシンポジウムの開催（研究成果報告会とコンソーシアム３回目全体会を兼ねる） ・第３回運営指導委員会

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

管理機関による「地域連携重点魅力化連絡会議」を年１回開催する。ただし、令和５年度については令和６年１月 23 日に開催した。働き方改革の観点から、オンラインによる開催を積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。その際に伊香高等学校から事業の進捗状況や成果と課題について報告を行い、他の地域連携に取り組む県内高等学校への情報提供とともに評価も行う。

伊香高等学校において、年３回（おおよそ６月、11 月、１月）、運営指導委員会を実施していく中で、本構想において実現する成果目標の設定を行う。現時点においては就職希望者のうち県内に就職する生徒の割合を 95％以上とすることや、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合 80％以上とすること、生徒アンケートにおいて「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」を 80％以上、「地元に貢献したいと思う生徒の割合」80％以上、「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85％以上とすること、さらに「森林環境とエネルギーの問題が、自分たちの身の回りの生活にどのようにかかわっているかを知っている」生徒の割合を 95％以上とすることなどを想定している。

伊香高等学校は、地域連携を重点として高校の魅力化を推進し、地域で活躍する人材を育成する高校として、生徒が地域に赴き、地域の人々と協働して何かに取り組む回数や地域の方々や卒業生を学校に招く回数をあわせて年間 20 回を目指し、地域に開かれた学校づくりを推進する。また自治体に対する政策等の提案を年間３回、市内の高校による合同発表会や研究報告会等への参加回数を最終年次は６回としたい。

管理機関としては、伊香高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を４年後・７年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究する。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「森の探究家」（森林サービス産業や環境エネルギーに関連する専門家）のタネを育てる、高校生と大学生が共に学び合いをするコンソーシアム構築を目指す。そのためにコンソーシアムの構成メンバーを再検討したり、学校運営協議会組織とも関連付けたりしながら、より実効性のある活動ができる組織としていく。

２－１―６　成果の普及のための仕組み

管理機関では、令和４年度から県独自の「県立高等学校魅力化推進事業」を実施し、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置において、コーディネート人材の必要性が見えてきたところである。伊香高等学校において開催する年３回の運営指導委員会を通じた研究の深まりにより、「魅力化プラン」の中で、地域連携重点による魅力化推進を指定した普通科 13 校による「地域連携重点魅力化連絡会議」の中で、地域社会に関する学科の設置推進に向けた具体的な提案により、地域連携の課題研究と解決の方向性の提案を期待している。

また、生涯学習課が主管する「県立学校コミュニティ・スクール推進事業研修会」における事例発表を行うことにより、コミュニティ・スクールの円滑かつ効果的な導入や取組の充実が図られ、県立学校の地域連携・協働の推進につなげたい。

さらに、令和５年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同

世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。この「学びの祭典」において、「森の探究科」の学びに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科設置を県内の中学生等にアピールしていく。

伊香高等学校は、オープンスクールを年３回実施したり、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信したり、長浜市の公報や学校独自の広報誌（学校通信）を発行したりするなど、地域住民や地元中学校などに向け情報発信を行っていく。

２－１―７　国の指定終了後の取組継続のための仕組み

①管理機関

・国の指定終了後も「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、地域おこし協力隊も含め、県教育委員会は長浜市と事業指定３年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。

・県教育委員会事務局生涯学習課の令和６年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。

・令和３年度から令和５年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和６年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「森の探究科」の学びの継続・充実のための予算確保や、長浜市や地域の企業等から費用を含めた支援も含め検討していく。

・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した、「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。

・教育委員会内の体制の継続、また必要な予算を獲得し、伊香高等学校が、県予算で自走していけるよう必要な支援を継続する。

・特別非常勤講師の仕組みを活用して、外部講師による教育内容の充実・継続を図る。

②伊香高等学校・長浜市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、特に長浜市の地域おこし協力隊の制度等を活用したコーディネート人材の活用、ふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得など、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

２－２　事業の実施日程（事業結果説明書より）

事業項目	実施日程（令和６年４月１日～令和７年３月３１日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
新学科設立に向けた先行実施授業	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
地域をフィールドにした 探究的な学び	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	
カリキュラム開発会議		●		●		●	●					
森の探究科運営専門チーム会議			●				●					
先進校等訪問				●		●			●	●		
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会				●				●				●
コンソーシアム関連会議			●									●
地域各団体への説明								●	●	●	●	●
コーディネーター												
コーディネーター（中山氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（伊藤氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（副島氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
新学科説明会			●									
伊香高通信の発行			●			●			●		●	
地域各団体への説明（同上）								●	●	●	●	●
オープンハイスクールの実施					●		●	●				
地域中学校への訪問		●	●	●		●	●	●	●			
成果発表・成果普及												
北の近江高校生サミット											●	
伊香高校魅力化シンポジウム												●
地域連携重点魅力化連絡会議												
成果検証												
運営指導委員会や 先行実施授業後の生徒アンケート等	随時											
成果目標アンケート										●		
中学校等卒業予定者の進路志望調査						●				●		

２－３　事業の実施概要（事業結果説明書より）

（1）　カリキュラムの検討内容

本校は、現在開設している普通科自然環境類型を、令和７年度より普通科新学科として改編することを想定し、現在カリキュラム等を検討している。令和５年度はその新学科のコンセプトや学校設定教科・科目の大枠を検討してきた。令和６年度はカリキュラムの具体化と先行授業の実施を行った。令和７年度は、先行授業をもとに新学科でのカリキュラム内容の具体化と、普通科自然環境類型での先行授業の実施を行う。

①　カリキュラム開発に関わる会議の体制および取組

新学科のカリキュラムについては、コアメンバー（推進室長＋コーディネーター）、理科教員に地域の実践者をカリキュラムアドバイザーとして加えた校内組織「カリキュラム開発会議」を中心に昨年度作成した原案の修正を行った。カリキュラムアドバイザーには、昨年度に引き続き地域で森林自然関係やゼロカーボンに関連した経験や人のつながりを持つ前田壮一朗氏を任命し助言をいただいた。また、教育コーディネーターとして探究活動のデザインを行っている余島純氏には、オンラインにて会議に参加していただいた。

この「カリキュラム開発会議」では、先行授業の振り返りと学期での具体的な授業内容を検討した。その際、生徒へのインプットとアウトプットとのバランス、地域の実践者や団体と連携・協働した授業の展開、学びの一貫性を考慮しながら進められるよう協議を重ねた。

また、コンソーシアムのなかに「森の探究科運営専門チーム」を発足させ、先行授業に基づいてカリキュラム案の検討を行った。「森の探究科運営専門チーム」のメンバーは以下の表の通りである。

■森の探究科運営専門チーム参加組織

市内事業者・団体	株式会社バイオマスアグリゲーション
	ながはま森林マッチングセンター
	滋賀県森林組合　伊香事業所
長浜市	北部産業振興課森づくり推進室
	環境保全課
長浜市教育委員会	教育指導課（環境教育担当）
滋賀県	教育委員会事務局高校教育課 魅力ある高校づくり推進室
	びわ湖材流通推進課

令和６年度は２回会議を実施し、参加者からは学びのヒントや展開、新学科設置における、地域の活性化や小学校から中学校、高等学校へとつながる継続的な学びへの期待など、貴重な意見を伺うことができた。さらに、大津市立葛川小・中学校、依田林業、名城大学、アルスシムラ、大津市立葛川少年自然の家、龍谷大学など先進的な取組を実践されておられる学校や企業を訪問し、森林資源・自然環境に関する専門的な学びや取組に対して説明を受け、地域との連携例や本校の新学科のカリキュラムに対する意見を伺った。

■カリキュラム開発会議

	実施日	実施内容
第１回	R6.5/29	・先行授業の振り返りと次年度への修正 ・新学科のカリキュラム案の再検討
第２回	R6.7/18	・先行授業の振り返りと次年度への修正 ・新学科のカリキュラム案の再検討
第３回	R6.9/6	・先行授業の振り返りと次年度への修正 ・新学科のカリキュラム案の再検討
第４回	R6.10/9	・先行授業の振り返りと次年度への修正 ・新学科のカリキュラム案の再検討

■森の探究科運営専門チーム会議

	実施日	実施内容
第１回	R6.6/17	・カリキュラムの考え方と「森のキホン」のカリキュラム案について ・カリキュラム検討のためのこれまでの取組について
第２回	R6.10/24	・プレ授業・中学生への広報活動の取組状況 ・「森のキホン」「森の恵み」「持続可能な社会」の授業計画について ・「森の未来創造」について ・来年度から授業を実施する上での課題について

■先進校等訪問

実施日	訪問先	内容
R6.7/30	大津市立 葛川小・中学校	安曇川上流に位置した小さな山間学校で平成30年より小規模特認校に指定されている。総合的な学習の時間で魅力的な探究活動の取組を実践されており、その取組についてお伺いした。
R6.9/27	依田林業	山梨県甲州市にある有限会社で、森林整備や保全事業に取り組まれている。「MORIKATSU」や出前授業など地域と連携した取組についてお伺いした。
R6.12/20	名城大学	名古屋市にある私立大学。環境創造工学科で目指す人材像とその学び、進路先についてお伺いした。
R7.1/8	アルスシムラ	草木染めの先駆者志村ふくみ（人間国宝）・志村洋子が想像した染織の世界を、芸術体験を通して学ぶ場として2013年４月に設立された学校。草木染めを通じての学びと教育現場における自然との向き合い方についてお伺いした。
R7.1/9	大津市立 葛川少年自然の家	1987 年に設立された自然体験宿泊施設。幼少時から高校時までの連続した学びについて意見交換を行った。
R7.1/22	龍谷大学	1922 年に設置され、深草・大宮・瀬田と３つのキャンパスを構える。瀬田キャンパスには、「龍大の森」という里山林があり、生態系の保全などの里山研究や環境教育のフィールドとして利用されている。訪問では、里山研究や高大接続を含めた連携に向けた協議を行った。

② 新学科設立に向けた先行実施授業

新学科のカリキュラムで展開予定の授業を昨年度より先行的に一部実施し、今年度は「森のキホン」「森の恵み」の先行授業を主に実施した。地域の企業や事業者等と連携し、自然環境類型「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」の授業を通して、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学び、また新カリキュラム設計に向けた検証材料にすべく授業を実施した。

■授業計画

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R6.4/10	滋賀県の森林について考える	25 名 （３年生自然環境類型）	前田氏（バイオマスアグリゲーション・カリキュラムアドバイザー）
2	R6.4/16 4/17	森と人との関わりについて考える	24 名 （３年生自然環境類型）	伊藤氏 （コーディネーター）
3	R6.4/23 4/30 5/1	森の恵みを食す	25 名 （３年生自然環境類型）	本校教員
4	R6.5/8	キノコの魅力を考える	25 名 （３年生自然環境類型）	中川氏 （ながはま森林マッチングセンター）
5	R6.5/22	ミツバチについて考える	25 名 （３年生自然環境類型）	塩氏 （びぃふぁむ みつばちの雫）
6	R6.5/22	園児達への樹木レクチャー	25 名 （２年生自然環境類型）	長浜市立きのもと認定こども園
7	R6.5/24	琵琶湖の源流を辿る	25 名 （２年生自然環境類型）	冨岡氏・浅井氏・村田氏（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）
8	R6.5/28 5/29 6/4 6/5	草木染めを体験する	25 名 （３年生自然環境類型）	伊藤氏 （コーディネーター）
9	R6.6/4	豊かな森林と生態系について考える	25 名 （２年生自然環境類型）	奥田氏（琵琶湖博物館） 遠隔にて実施
10	R6.6/5	琵琶湖と生態系について考える	25 名 （２年生自然環境類型）	渡邉氏（琵琶湖博物館） 遠隔にて実施
11	R6.6/18	森林の多面的機能と世界の森林施策	25 名 （２年生自然環境類型）	吉村氏（森林総合研究所） 遠隔にて実施
12	R6.6/19 6/25	香りを科学する	25 名 （３年生自然環境類型）	伊吹氏 （atelier kiki）
13	R6.7/4	アウトドアの実践入門	25 名 （３年生自然環境類型）	本校教員
14	R6.7/12	赤川の底生生物の調査	25 名 （２年生自然環境類型）	植田氏 （湖北野鳥センター）
15	R6.7/29	大浦川の底生生物の調査	６名 （２年生自然環境類型 有志）	植田氏 （湖北野鳥センター）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
16	R6.9/3 9/24 9/25 10/9	木材加工入門	24 名 （３年生自然環境類型）	浅尾氏 （株式会社 浅尾）
17	R6.9/4	滋賀県の林業の現状	25 名 （２年生自然環境類型）	知田氏 （琵琶湖環境部 びわ湖材流通推進課）
18	R6.9/11	「木育」とは何かを考える	24 名 （３年生自然環境類型）	橋詰氏 （木育インストラクター）
19	R6.9/17	「森のようちえん」の実践にむけて	24 名 （３年生自然環境類型）	冨士野氏 （かえでの庭）
20	R6.9/18	森林整備の現場を知る	25 名 （２年生自然環境類型）	高橋氏 （滋賀県森林組合 伊香事業所）
21	R6.9/25	森林の健康度を知る	25 名 （２年生自然環境類型）	山本氏 （里山実験室 HareMori）
22	R6.10/1	樹木の手入れを行う	25 名 （２年生自然環境類型）	山田氏 （林業家）
23	R6.10/2	玉切りを体験する	25 名 （２年生自然環境類型）	山田氏 （林業家）
24	R6.10/15	木のおもちゃに触れる	24 名 （３年生自然環境類型）	青木氏 （株式会社 浅尾）
25	R6.10/16	園児と楽しむ木のおもちゃ	24 名 （３年生自然環境類型）	長浜市立きのもと認定こども園
26	R6.10/30	主伐見学	25 名 （２年生自然環境類型）	滋賀県森林組合 伊香事業所 川南林業
27	R6.10/30	滋賀県立大学 環境科学部 訪問	25 名 （２年生自然環境類型）	籠谷氏（滋賀県立大学 講師） 原田氏（圃場実験施設長）
28	R6.11/6	森のようちえん実習	24 名 （3 年生自然環境類型）	長浜市立きのもと認定こども園
29	R6.11/20	土壌調査	25 名 （2 年生自然環境類型）	飯村氏 （滋賀県立大学 講師）
30	R6.12/12	地域で取り組む環境問題	25 名 （2 年生自然環境類型）	髙橋氏 （髙橋金属株式会社 代表取締役社長）
31	R7.1/14	長浜バイオ大学 オルガネラ構造機能研究室 訪問	25 名 （2 年生自然環境類型）	奈良氏 （長浜バイオ大学 准教授）
32	R7.1/27	断熱改修ワークショップ	25 名 （2 年生自然環境類型）	清水氏（清水建設工業） 株式会社シガウッド 桐畑氏（長浜市環境保全課）
33	R7.2/12	持続可能な社会を考える	25 名 （2 年生自然環境類型）	渋沢氏（NPO 法人共存の森ネットワーク 理事） 遠隔にて実施

③　地域をフィールドにした探究的な学び

地域をフィールドに、「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究を行う魅力的なカリキュラムの開発を目的として、類型での授業や「総合的な探究の時間」の中で様々な活動を実施した。

■授業計画

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R6.9/24 ～ 11/21	３年総合的な探究の時間「住み続けられるまちづくりとは～防災の観点から考える～」	99 名 （３年生）	杉江氏（長浜市 防災危機管理局 防災指導員）、前田氏（長浜市社会福祉協議会･食育防災アドバイザー）、西野氏（大千山 充満寺）、熊畑氏・上村氏（自衛隊 滋賀地方協力本部 彦根地域事務所）、成田氏（郷土史研究家）、松橋氏（長浜市都市計画課）、長浜市立木之本小学校
2	R6.10/18 ～ 11/22	自己理解探究・ゲストトーク「地域で暮らす人の話を聞く」	86 名 （１年生）	中村氏（長浜市地域おこし協力隊）、冨士野氏（さざなみ整形外科 理学療法士）、前田氏（長浜市社会福祉協議会・食育防災アドバイザー）、杉江氏（長浜市 防災危機管理局 防災指導員）、熊畑氏（自衛隊 滋賀地方協力本部 彦根地域事務所）、竹内氏（フォトグラファー）
3	R6.12/6	キャリア企画 2024・クロストークセッション	81 名 （２年生）	西村氏（有限会社つるや）、佃氏（大音特殊生糸組合）、壷坂氏(長浜市地域おこし協力隊)、冨岡氏（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）、山本氏（里山実験室 HareMori）、植田氏（湖北野鳥センター）、森氏(元美容部員)横関氏(湖北地域消防本部 米原消防署)、中川氏（長浜市立きのもと認定こども園）
4	R6.5/22	内湖で体験するマリンスポーツ	23 名 （２年生スポーツ健康類型）	滋賀県カヌー協会
5	R6.5/22 5/24	木之本街散策	７名 （２年生地域文化類型）	冨田氏（冨田酒造） 篠宮氏（白木屋） 江北図書館、馬宿平四郎 山路氏（山路酒造）
6	R6.7/4	健康と睡眠の関係について考える	24 名 （３年生スポーツ健康類型）	株式会社 エアウィーヴ
7	R6.7/4	木之本の街の課題を考える	22 名 （３年生地域文化類型）	菅谷氏、冨田氏（長浜市 未来創造部北部政策局 北部政策課） 小泉氏（K-ZOHN 運営協議会 空き家活用相談所）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
8	R6.7/10	スケートボード実習	23 名 （２年生スポーツ健康類型）	吉田氏（ハックルベリー）
9	R6.7/10 7/12	地域の文化・産業を知る 賤ヶ岳散策	７名 （２年生地域文化類型）	佃氏（大音特殊生糸組合） 奥伊吹グループ 橋本氏（丸三ハシモト株式会社）
10	R6.10/30	園児と登る田上山	23 名 （２年生スポーツ健康類型）	長浜市立きのもと認定こども園
11	R6.10/30	山村文化を知る	７名 （２年生地域文化類型）	前田氏 （高時川源流の森と文化を継承する会）
12	R6.11/20	地域と協働して行う国道美化活動	７名 （２年生地域文化類型）	木之本地区地域づくり協議会
13	R6.7/3 ～8/23	「木之本の新しいカフェメニューを考える」	27 名 （２年生特進類型）	西村氏（有限会社つるや） 藤本氏（日本政策金融公庫）
14	R7.1/17 ～1/21	「SAKI 寄付教育」	21 名 （１年生特進類型）	渡辺氏（日本総合研究所） 橋爪氏（日本総合研究所）
15	R7.2/7	小原かご製作体験	７名 （２年生地域文化類型）	荒井氏（荒井木籠製作所）

■先行実施授業・地域をフィールドにした探究的な学びの総括：課題と次年度への展望

・次年度の新学科設置に向け、体験を重視した先行授業を数多く開講できた。その際、多くの企業や事業者にご協力いただき、専門的な学びに加え、社会とのつながりを感じることができた。その一方、多くの方々に携わっていただいたことで、学びのつながりや根幹の部分を感じにくくなっていたことは否めない。次年度は、今年度の反省を活かし、インプットの内容とアウトプットの方法を意識しながら、事業者とカリキュラム内容の調整を行いたい。また体験内容によっては、フィールドに限りがある内容もあるため、フィールドの確保や実習内容の再検討も同時に進めて行きたい。

・新学科のカリキュラムについては具体的な内容まで協議することができた。次年度は、他教科との連携や他の学校や企業などとの授業以外の連携内容についても検討し、新学科での学びをより深め、展開する手立てについても検討を行いたい。

④　新学科のコンセプト

滋賀県北部地域の豊かな自然環境、森林資源などを活用し「森で学ぶ」をコンセプトに、生徒の「生きる力」を地域とともに育む＜ゼロ・カーボン・ハイスクール＞を目指す。

■新学科教育活動の概要

持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会構築に資する人材育成を図る。また、地域の森林資源などを活かしたまちづくりに関わり、地域活性化との相乗効果を目指す。

・「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀北部ならではの学び
・地域内外の専門家と協働した循環型社会に関する実践的な学び
・地元地域や長浜市など地域と連携した学び

⑤　新学科で育てたい人材像

新学科で育てたい人材像について、学校全体のポリシーも含め以下の通り検討を行った。

■伊香高校全体のグラデュエーション・ポリシー

・教育基本法の精神に則り、将来の地域社会に貢献しうる、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成します。
・地域の未来を創造し、持続可能な地域社会を支える環境未来人材を育成します。
▶ 夢を描き、進路目標を実現する「自己実現力」
▶ 自己の思いを伝えながら、他者の多様性を理解する「コミュニケーション力」
▶ 人や地域と協働し、新たな創造に向かう「課題解決力」
▶ 未知の困難に柔軟に対応し、あきらめない「レジリエンス力」
加えて、**新学科ならではの育てたい人材像**
・人と自然が共存する循環型社会構築に資する**「過去と未来を思いやる力」**
・森林や自然との関わりを通して磨く**「洞察力」**と**「感受性」**
・わからないことを楽しむ**「好奇心」**

→　**個の力　×　しなやかさ　×　他者への想像力　＝　新学科で育てる「生きる力」**

⑥　新学科の学びに関するキーワードと大切にしたい要素

校内担当者での議論や運営指導委員会、森の探究科運営専門チームでの助言などを踏まえ以下の通り検討した。

・学習内容：森林、循環、持続可能性、再生可能エネルギー、自然資源、地域資源
・学習方法：鳥の目虫の目、上流から下流まで、温故知新、身体を動かす、探究とコミュニケーション

また、新学科での学びに関して、昨年度からの議論をふまえた新学科で大切にしたい学びの要素を以下の３点と考えている。

１．**現場主義**　：実際にフィールドへ出て体験・実践することを大切にする。
２．**地域連携**　：地域の実践者を講師として迎える、地域の団体と協働して授業を進める等、地域連携を大切にする。
３．**理論と実践**：現場での体験・実践の前後に座学の時間を設ける等、理論と実践のつながりを意識した活動を大切にする。

⑦　新学科の学校設定教科・科目

３年間で履修する全 90 単位のうち、**10 単位を新学科独自の「学校設定教科・科目」**として設定する。各学年で検討している学校設定教科・科目は以下の通りである。

〇1 年生

「森のキホン」：年間２単位

森林および自然を理解するための基本的知識、特に森林の多面的機能を中心とした知識を習得させる。また、林業を含めた森林・自然と人間とのかかわりについての基礎的知識を習得させる。

〇2年生

「森の恵み」：年間２単位

森林および自然から供給されている人間生活に必要な資源、また森林生態系によってもたらされる文化的な基盤や価値について理解し、その資源や価値を利用するための基礎的知識や技術を習得させる。

「持続可能な社会」：年間２単位

森林が支える生態系サービスは、地球環境の持続性にとって不可欠な存在である。本科目は、地球環境の持続に必要なエネルギーや環境問題の基礎知識を理解し、その課題解決にむけた基本的技術を習得させる。

〇3年生

「森の未来創造」：年間４単位

「森のキホン」「森の恵み」「持続可能な社会」で学習した２年間の学びをもとに、林業や自然環境といった地球環境・地域産業の諸課題、また森林資源の新たな活用やサービス産出を自分達自身で考え、その実践・探究を行う。

〇「総合的な探究の時間」との連携

「総合的な探究の時間」の活動においても、学校設定科目と関連した授業を行う。

（授業案）

・１年生：木之本・伊香地域の理解、地域の方へのインタビュー方法、森林資源をテーマとしたビジネスプランの作成、ビジネスプラングランプリ等への参加、森林に関するキャリアを検討する座談会など

・３年生：プレゼンテーションや論文執筆方法といった情報をまとめる活動、推薦入試や総合型選抜に対応した進路指導など

〇その他授業との連携

今年度、国語の授業で森の中で短歌を詠む、数学の授業では草木染めの模様を幾何学的に考える、地域文化類型の授業では山村文化を知る、スポーツ健康類型の授業では校外学習で利用したフィールド（田上山）の歴史の学習を行うといった他教科・他類型との連携した授業を行った。このような連携授業を行うことで、新学科での学びが特殊で別枠のものとならないよう、それぞれの単元の配置を工夫して教科の学びと関連付け、融合したものとして理解が深められるようにする。今後も国語・英語・数学・理科・社会の５教科、また体育や美術、家庭等の教科とも連携した授業を検討し、「総合的な探究の時間」において獲得した視点やスキルと合わせて３年次の「森の未来創造」やそれ以外での課外活動において発揮できるよう工夫を行う。

⑧　卒業後想定する進路

進学から就職まで幅広く、個々の生徒の希望に応じて対応する。

・進学希望者は、総合型選抜の機会を積極的に活用。今年度より進路指導課と協働し、個別指導プログラム「Go Beyond プログラム」をスタート。個別最適な学びと協働的な学びの充実化を図り、文理を問わず進学できるよう準備を行っている。

・就職希望者は、地元企業を中心に就職を支援する。

・地方公務員（初級）希望者には、「総合的な探究の時間」等を利用して試験対策講座を設ける。

「森の探究科」卒業生の想定進路（1/2）

○ 森林科学、森林管理、森林の利活用に興味のある人
- 森林組合、林業関連会社への就職
- 公務員（卒業後、進学後）
- 進学（森林科学、林学系の学部）
- 林業大学校（京都府立林業大学校、兵庫県立森林大学校、岐阜県立森林文化アカデミー、滋賀もりづくりアカデミーなど）

○ 木の建築利用や多方面での利用に興味のある人
- 建築関係、木材流通・加工関係の会社への就職
- 進学（建築学、森林科学系の学部）

○ 自然・生物・環境に興味のある人
- 進学（自然科学、農学、環境系の学部）
- 造園業等の自然に関わる会社への就職
- 公務員（進学後）

○ 再生可能エネルギーやエネルギー政策に興味のある人
- 進学（工学系や政策科学系の学部）
- 再生可能エネルギーや省エネルギーに取り組む会社への就職
- 公務員（進学後）

○ 地域文化に興味のある人
- 進学（地域文化、歴史に関する学部）
- 地元の伝統産業に関わる会社への就職

「森の探究科」卒業生の想定進路（2/2）

○ 食文化に興味のある人
- 食品の製造や流通に関わる会社への就職
- 進学（生活科学、食に関する学部）

○ 地域振興、地域おこしに興味のある人
- 進学（地域学、公共政策学、経済・経営学、商学、社会学系の学部）
- 公務員（進学後）

○ 観光やレジャーに興味のある人
- 観光・レジャー産業関連会社への就職
- 進学（観光学、経済学、経営学、商学系の学部）

○ 森林の心身への影響や医療への活用に興味のある人
- 進学（心理学、医学、看護学、薬学、化学関連の学部）

○ 野山の薬草に興味のある人
- 進学（薬学、医学、化学関連の学部）

○ 森林の教育への利活用に興味のある人
- 進学（教育、幼児教育に関する学部）
  参考：「やまのこ」、「木育」、「森のようちえん」等の取組

○ その他、上記以外の分野に興味のある人
- 個別に相談を受けながら、希望に添うように援助して行きます。

⑨　実施教育課程

<table>
<tr><th></th><th>1</th><th>2</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th><th>11</th><th>12</th><th>13</th><th>14</th><th>15</th><th>16</th><th>17</th><th>18</th><th>19</th><th>20</th><th>21</th><th>22</th><th>23</th><th>24</th><th>25</th><th>26</th><th>27</th><th>28</th><th>29</th><th>30</th></tr>
<tr><td>1年</td><td colspan="4">国語</td><td colspan="5">数学</td><td colspan="5">英語</td><td colspan="2">地理歴史</td><td colspan="2">理科</td><td colspan="4">保健体育</td><td colspan="2">芸術</td><td colspan="2">情報</td><td colspan="2">森のキホン</td><td>総探</td><td rowspan="3">LHR</td></tr>
<tr><td>2年</td><td colspan="2">国語</td><td colspan="4">数学</td><td colspan="5">英語</td><td colspan="2">地理歴史</td><td colspan="2">公民</td><td colspan="4">理科</td><td colspan="3">保健体育</td><td colspan="2">家庭</td><td colspan="2">持続可能な社会</td><td colspan="2">森の恵み</td></tr>
<tr><td>3年</td><td colspan="2">国語</td><td colspan="3">数学</td><td colspan="3">英語</td><td colspan="3">地理歴史</td><td colspan="5">理科</td><td colspan="3">保健体育</td><td colspan="3">選択</td><td colspan="4">森の未来創造</td><td colspan="2">総探</td></tr>
</table>

※網掛け：「森の探究科」ならではの特色ある学び
※総探　：総合的な探究の時間
※選択　：生徒の希望進路等により選択

課題

・今年度は、新学科の学校設定教科を考えるにあたって、２・３年生の類型授業や３年生の「総合的な探究の時間」を使って先行授業を実施した。計画通りに試行できたが、評価指標や「森の未来創造」に向けての専門家や大学等の研究機関との連携内容については、今後の検討課題である。

次年度計画への反映方針

・先行実施授業が新学科内の学校設定教科で系統的なものとなるよう、教科内や科目内、他教科とのつながりをもたせるよう実装し、引き続き評価指標について検討を行う。

⑩　成果目標アンケート

実施日：令和６年１月 17 日（金）
対　象：２年生（81 名）
※先行実施授業を主に実施した学年でアンケート調査をした。

■成果目標アンケートの結果

	質問項目	肯定的評価
質問１	今年度の学校魅力化事業において、様々な地域の方々と協働した学習をしました。これから「地域における課題と関わりたい」「地元に貢献したい」と思いましたか。	91.7%
質問２	これまでの「地域をフィールドとした学び」を通して、その学びを実生活や卒業後に応用してみたいと思いますか。	87.5%
質問３	（自然環境類型）　環境Ⅰの授業や校外学習を通して、森林環境が身の回りの自然環境や環境問題に大きく関わっていることを理解できましたか。	100%
質問４	（自然環境類型）　環境Ⅰの授業や校外学習を通して、身の回りの自然環境や環境問題に少しでも貢献したいと思いましたか。	95.5%

実施日：令和６年１月 15 日（水）
対　象：３年生 自然環境類型（24 名）
※先行実施授業を主に実施した学年でアンケート調査をした。

■成果目標アンケートの結果

	質問項目	肯定的評価
質問１	今年度の学校魅力化事業において、様々な地域の方々と協働した学習をしました。これから「地域における課題と関わりたい」「地元に貢献したい」と思いましたか。	91.3%
質問２	これまでの「地域をフィールドとした学び」を通して、その学びを実生活や卒業後に応用してみたいと思いますか。	91.3%
質問３	（自然環境類型） 環境Ⅰ・Ⅱの授業や校外学習を通して、森林環境やエネルギーが身の回りの生活や文化に大きく関わっていることを理解できましたか。	95.7%
質問４	（自然環境類型） 環境Ⅰ・Ⅱの授業や校外学習を通して、地域における森林環境とエネルギーの問題に少しでも貢献したいと思いましたか。	95.7%

（２） 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和４年度から概ね 10 年から 15 年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について全県的視野で基本的な考えを示す「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」を令和４年３月に策定した。令和５年３月には、この「基本方針」に基づき、全県的視野から各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を作成し、各県立高等学校の魅力化の取組を推進している。

この「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月 23 日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、本会議は隔年開催とし、次回は令和７年度に開催することとしている。

伊香高等学校は、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」をかけ合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、いち早く自然環境等の地域資源を活用した県北部ならではの学びに取り組み、普通科の特色化に向けたカリキュラム等の検討を行っており、かつ関係機関や市町等の協力体制など取り組みやすい条件が整っていること等から、新学科設置に向けた研究を進めた。

事業の実施にあたっては、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長１名、参事１名、主担当として教育企画主事１名、主任主事１名をその任に充て、学校の支援を行ってきた。適宜、伊香高等学校に出向き、モデル授業の参観や取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、３回開催した運営指導委員会では、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、外部有識者による指導・助言・評価を行うことで、以後の事業運営に役立ててきた。令

和７年度も高校教育課内の体制を継続し、学校の取組を支援していきたい。
　令和７年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、新学科を含めた伊香高等学校への志望者数は前年同期調査と比較してやや減少した。長浜市内外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、令和８年度から予定される全国募集も踏まえ、新学科の広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和７年度以降の周知活動に努める。

■協議や先行実施授業等への参加状況

活動日程	活動内容
R6. 4/ 1	・運営指導委員を委嘱
R6. 4/18	・今後の取組について協議
R6. 5/14	・長浜市・米原市教育委員会訪問 ・今後の取組について協議
R6. 5/24	・伊香高等学校の地域を教育資源とした先行授業を参観 ▶ 森林等の自然環境を活用した体験学習
R6. 6/ 1	・新学科説明会
R6. 6/17	・森の探究科運営専門チーム会議出席
R6. 6/26	・「地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム」第一回理事会出席 ▶ 今後のコンソーシアムの活動について
R6. 7/16	・第１回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、持続可能性に関する指導・助言
R6. 8/ 9	・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R6. 9/ 4	・既存施設等の状況視察・先行授業を参観 ・今後の取組について協議
R6. 9/17	・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R6. 9/30	・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R6.10/ 7	・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R6.10/24	・森の探究科運営専門チーム会議出席
R6.11/27	・第２回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言
R7. 3/23	・伊香高等学校魅力化シンポジウム ▶ 成果発表 ・第３回運営指導委員会 ▶ 今年度の取組に関する総括的な指導・助言

課題

・伊香高等学校では、先行実施授業や地域をフィールドとした探究的な学び、地元地域行事への参加など数多く実施されたが、それらの取組全てに立ち会うことができなかった。

次年度計画への反映方針

・新学科での学びがより充実したものとなるよう、月１回以上は伊香高等学校に出向き、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップ等の学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーター等と協議を行いながら進め、事業管理を行う。

・令和７年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、伊香高等学校への志望者数は地元地域の中学校等卒業予定者数減もあり、前年同期調査と比較してやや減少した。長浜市内 12 中学校・義務教育学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和７年度以降の周知活動に努める。

（３）　高等学校における事業の実施体制や管理方法

本校では令和４年度より地域連携実践モデル校として地域と連携した取組を進めてきた。今年度は、令和７年度からの新学科「森の探究科」のカリキュラム開発と地域と協働した学習活動に取り組むことを主眼に、以下の項目を実施した。

■校内での取り組み

・校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課内に森の探究科推進室（プロジェクトチーム）を組織した。室長、県コーディネーター、市コーディネーターを中心に、教務主任、カリキュラム開発担当、進路主任、各類型主任が所属する。
・コーディネーターを校務分掌に位置付け役割を明確化するとともに、職員室内に専用のデスクを配置した。
・コアメンバー（推進室長＋コーディネーター）は、週１回 60-90 分程度の進捗確認会議を実施し、情報共有と実施事項を確認。
・地域の実践者をカリキュラムアドバイザーとして任命し、地域と連携したカリキュラム内容構築に向け専門的助言を受ける。
・職員会議等にて事業内容の共有を図るとともに、森の探究科設立に関連した教員向けの研修を年２回実施。
・運営指導委員会などの会議資料や議事録を校内ネットワークを使って、職員室内にも簡易の情報掲示スペースを設けた。
・森の探究科設立に伴い、既存普通科の新類型内容の検討とシラバス作成を行った。

■運営指導委員会の開催

・運営指導委員会を年３回実施。大学教員、森の探究科に関連した実践者、地域の自治体・事業者等からなる委員より助言を受ける。
・助言の内容を踏まえ、森の探究科のカリキュラム内容や実施方法を検討した。

■地域と伊香高のミライ創造コンソーシアムの開催

・令和６年３月に発足したコンソーシアムは、６月に理事会を開催し、規約や体制を整えた。各専門チームからの報告や今後の活動について方向性を議論した。
・「森の探究科運営専門チーム」の会議を２回開催し、「森のキホン」（１年２単位）、「森の恵み」（２年２単位）、「持続可能な社会」（２年２単位）のカリキュラムと授業計画について議論し、決定した。「森の未来創造」（３年４単位）については、引き続き検討を行う。
・「生徒募集専門チーム」の会議を６回開催し、中学生向けの学校説明会などの状況を共有した。また、新入生が下宿できる体制（木之本留学）について、食事、生活場所、生活全般のサポート方法を議論した。

課題

・令和４年度より地域と連携した取組を先行して実施しているが、授業ごとの散発的な連携にとどまっている。１年生から３年生というタテの積み重ねや、教科を超えたヨコの連携など、全体のカリキュラム・マネジメントについては今後の課題であると考える。

・校内では森の探究科推進室が中心となり定期的な活動が実施できているものの、校外との連携については組織的な動きがまだ十分にできていない。コンソーシアムの専門チームの動きを中心に連携を深めたい。

次年度計画への反映方針

・４月から始まる森の探究科のカリキュラムマネジメントでは、PDCA サイクルを活用し、さらに良いものへと改善する。また、次年度以降に実施する科目についても、実施計画を具体化する。
・教科や類型を横断するカリキュラムマネジメントについては、引き続き既存の学習指導委員会などの組織で対応する。
・令和８年度から全国募集を開始することを見据え、地元住民や中学生向けだけでなく、県内外への広報活動を行う。
・校外連携については、コンソーシアムの理事会と専門チームの運営を通じて、情報共有と協議を行う。

（４）　運営指導委員会の体制および取組

運営指導委員会では、活発な議論が行われ、カリキュラムや評価、先行授業、コンソーシアムの運営、持続可能性等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただけた。事前に資料を配付することで、日程が合わず当日欠席の運営指導委員からも指導・助言をいただき、運営指導委員会当日に紹介することができた。運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和７年度も引き続き、年３回は運営指導委員会を開催していく。

■運営指導委員会の体制

氏名	所属
平岡　俊一	滋賀県立大学環境科学部　准教授
岳野　公人	滋賀大学教育学部　教授
山本　綾美	里山実験室 HareMori　森づくりコーディネーター
三浦　豊	森の案内人　合同会社 NiwaMori 代表社員
髙橋　康之	髙橋金属株式会社　代表取締役社長
久木　裕	株式会社バイオマスアグリゲーション　代表取締役
中嶋　克之	長浜市未来創造部　部長

■運営指導委員会の取組

	開催日	内容
第１回	R6. 7/16	・最新情報の共有、持続可能性に関する指導・助言 ▶ 先行授業の取組について ▶ 広報（説明会）について ▶ コンソーシアム理事会・運営・組織形態について ▶ 今後の事業の見通しについて　など
第２回	R6.11/27	・最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言 ▶ 先行授業、体験入学の状況について ▶ 広報活動、入学者選抜について ▶ カリキュラムの実施と評価ルーブリックについて ▶ コンソーシアムの運営と目指す方向について　など

第３回	R7. 3/23	・今年度の取組に関する総括的な指導・助言 ▶ 伊香高等学校魅力化シンポジウムについて ▶ 次年度の取組について　　など

課題・次年度計画への反映方針

年３回開催して、事業の進捗状況や成果、課題等を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てるよう努めてきた。次年度も学校が求める指導・助言等をいただけるよう、学校との打ち合わせを十分に行い、準備を進めていく。

運営指導委員会の開催にあたっては、学校の取組や進捗状況等も把握しながら進めていく。

（５）　コンソーシアムの体制および取組

伊香高校の魅力化活動の目標である「伊香高校と地域がともに未来を創る」ことを実現するため、高校と地域の諸団体が連携するための基盤となる組織としてコンソーシアムを位置付ける。

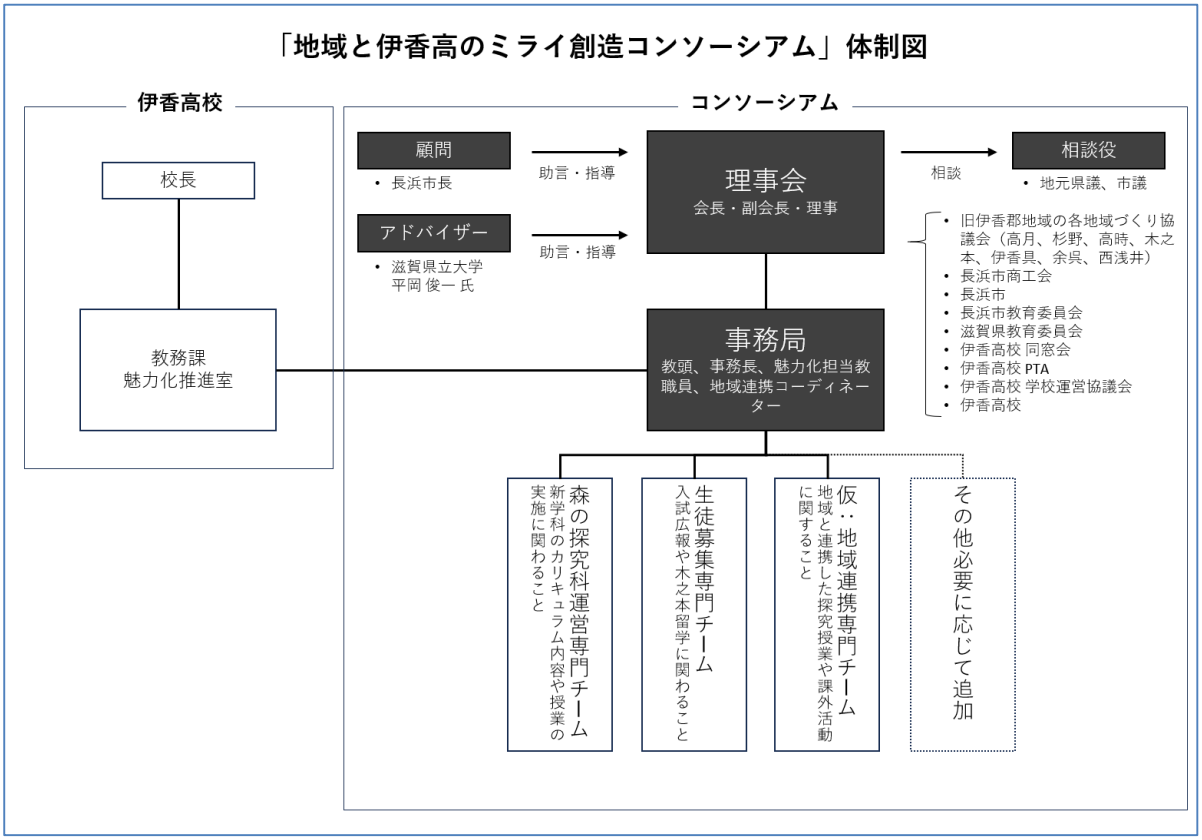
具体的には：

・学校と地域の協働に関するビジョンや学校経営の基本方針等について協議・共有し、必要に応じて承認等を行う。

・「生徒たちがどのように育ってほしいのか、高校として何を実現していくのか」という、目標や活動方針が話し合われる場として運営する。

・また、その議論の前提として、「高校の所在する伊香地域がどのようにあってほしいか」という地域の未来についても想いが共有される場にする。コンソーシアムの運営を通して、「高校を核とした地方創生」の実現を目指す。

コンソーシアムは全体の方向性を検討する「理事会」と、個別の事案について検討する「専門チーム」の２階層制とする。



■理事会参画団体（敬称略）

・旧伊香郡地域の各地域づくり協議会（高月、杉野、高時、木之本、伊香具、余呉、西浅井）
・長浜市商工会
・長浜市
・長浜市教育委員会
・滋賀県教育委員会
・伊香高等学校同窓会
・伊香高等学校 PTA
・伊香高等学校学校運営協議会
・伊香高等学校

「森の探究科運営専門チーム」では、森の探究科のカリキュラムと授業の実施に関わることについて議論した。「生徒募集専門チーム」では、入試広報や木之本留学に関わることについて議論した。また、今後「地域連携専門チーム」で、地域と連携した探究授業や課外活動に関することを議論し、必要に応じて他の専門チームを設置していく。各専門チームでは、人数や参加団体を規約で規定せず、柔軟な運営を行っていて、その活動内容は理事会にて報告している。

課題

・コンソーシアム参画団体が多いため、会議以外の場においても各団体とコミュニケーションを意識的にとっていく必要がある。
・コンソーシアムと学校運営協議会の位置付けが重複する部分があるため、役割の明確化が必要である。

次年度計画への反映方針

・地域の団体との連携において、特に地元自治体とどのような協力関係で実施していくか協議していきたい。
・コンソーシアムと学校運営協議会については、将来的に統合していくことを検討する。時期などを協議していく。

（6）　コーディネーターの配置および活動内容

令和６年度は、本事業に関連するコーディネーター３名を配置した。県から中山氏と伊藤氏、長浜市からは地域おこし協力隊の制度を活用し副島氏が勤務した。伊藤氏と副島氏の活動時間は週３～４日程度、中山氏は月３日程度であった。

３名は校務分掌において、教務課内の「森の探究科推進室」に所属し、職員室内にデスクを置いて、半常駐型で勤務し、一体的に事業を推進することに努めた。

中山氏は、主に学校外部との関係構築や事業推進を担当、伊藤氏は「森の探究科」カリキュラムの検討を担当し、副島氏は学校内部での関係構築や「総合的な探究の時間」と関連させた事業推進、広報を主に担当した。３名は定例会議などを通じて密に情報交換を行い、一体的に事業を推進することに努めた。

中山氏は主に事業全体の企画立案やコーディネートに助言を行い、コンソーシアムマネージャー的な役割として、コンソーシアム活動などにおいて行政、民間事業者、地域組織など多様な主体との調整を担った。

■主な実施事項

・コンソーシアムの運営と活動、その内容の検討
・コンソーシアム運営のための各主体との調整、会議の運営
・その他事業全体に対する俯瞰的視野からの助言

伊藤氏は、地域の様々な専門家との関係を活かしながら、教員とともに森の探究科カリキュラムの検討および、先行授業の企画・実施を担った。また、フィールドワーク先の選定や実習に使用する備品準備など学科設置に伴う体制整備を担った。

■主な実施事項

・教員や地域、専門家と連携した新学科コンセプトやカリキュラム検討
・「森の探究科」先行授業の内容検討、実施、実地支援
・「森の探究科」授業実施に向けた、フィールド調査や備品準備
・「森の探究科」体験入学の企画・実施・サポート

副島氏は主に学校内で活動し、各担当教員と連携しながら、森の探究科カリキュラム検討に関連する「総合的な探究の時間」の授業や、地域の各種団体と連携した授業を実施し、ウェブサイトや SNS を活用した情報発信も行った。また全国募集に向けた広報や下宿生受け入れのための準備調整を担った。

長浜市の委嘱する地域おこし協力隊としての活動ではあるが、その業務管理は長浜市と伊香高校が協働で実施し、職員室内にデスクを置いて半常駐型で勤務した。

■主な実施事項

・「森の探究科」に関連した「総合的な探究の時間」の授業内容検討、実施支援
・アントレプレナーシップ教育に関連した特別授業の実施、課外活動の伴走支援
・ウェブサイトや SNS、季刊の紙媒体「伊香高通信」の発行などの広報活動
・全国募集に向けた広報や下宿体制確立に向けた準備

■コーディネーターの勤務記録

中山コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4月	3	・事業についての打合せ
5月	6	・コンソーシアム理事会準備、打合せ
6月	13	・コンソーシアム理事会準備、資料作成 ・コンソーシアム理事会
7月	7	・運営指導委員会準備、資料作成 ・運営指導委員会
8月	5.5	・資料作成、打合せ
9月	14.5	・生徒募集専門チームの打合せ・生徒専門チーム会議、資料作成
10月	6	・生徒募集専門チームの打合せ・生徒専門チーム会議、資料作成
11月	6.5	・生徒募集に関する打合せ・運営指導委員会
12月	1.5	・森の探究科広報に関する打合せ
1月	2	・森の探究科広報に関する打合せ
2月	4	・地域連携に関する打合せ
3月	20	・コンソーシアム資料作成・シンポジウム資料作成 ・次年度に関する打合せ

伊藤コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4月	61	・授業準備、授業補助・カリキュラム検討、樹木調査
5月	66	・授業準備、授業補助・事業計画、カリキュラム検討
6月	58.5	・授業準備、授業補助・運営専門チーム会議、カリキュラム検討
7月	86.5	・授業準備、授業補助・県内施設への広報・体験入学準備、補助
8月	68	・授業準備、授業補助・体験入学準備、補助・縁日ＰＲブース補助 ・メディア取材対応
9月	80	・授業準備、授業補助・運営専門チーム会議、カリキュラム検討
10月	81	・授業準備、授業補助・体験入学準備
11月	55.5	・授業準備、授業補助・体験入学準備、補助
12月	50.5	・授業準備、授業補助・カリキュラム検討
1月	70.5	・授業準備、授業補助・事業計画、カリキュラム検討
2月	82	・授業準備、授業補助・事業計画、カリキュラム検討
3月	71.5	・授業準備、授業補助・シンポジウム準備、補助 ・次年度に関する打合せ

副島コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4 月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・学校広報・学校パンフレット作成諸調整
5 月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・学校広報・学校パンフレット作成諸調整
6 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、　設計、実施 ・学校広報・学校紹介動画作成
7 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・特別時間割 授業調整、設計、　実施 ・学校広報・中学生体験入学準備
8 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計・課外活動の伴走 ・魅力化研修にむけた準備・学校広報・体験入学準備、実施
9 月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報
10 月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報 ・全国募集に向けた諸準備
11 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備
12 月	190	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・特別時間割 授業調整、設計、実施 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・学校広報・事業報告書作成
1 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・学校 SNS・新学科広報方針調整・事業報告書作成
2 月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計・学校 SNS ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・新学科広報紙作成・事業報告書作成
3 月	200	・次年度「総合的な探究の時間」設計 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・学校 SNS・次年度学校案内作成

課題

・森の探究科の立ち上げ、カリキュラム検討・実施、既存の普通科も含めた学校全体の魅力化、下宿体制の整備、全国募集に向けた準備など魅力化事業が進んでいくにつれ、教員・コーディネーターの関わる業務が増え、範囲も多岐にわたっている。事業期間終了後を視野に、役割分担と注力分野を決める必要がある。

次年度計画への反映方針

・教員とコーディネーターの担当分野や範囲を明確にする。総合的な探究の時間については、教員主導で実施し、できるだけ多くの教員を巻き込みながら実施するようにする。また、既存普通科のカリキュラム開発・実施についても教員主導で実施する。
・下宿体制の確立については、地域主体で実施できるよう、教員ではなくコーディネーターが立ち上げに従事する。

（7）　新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

■伊香高等学校

令和６年度は、令和７年度新学科設置に向け県内中学生・中学校向けの広報活動を行った。

・県内市町立中学校 95 校に対して、新学科の概要を説明。県内市町教育委員会、全中学校に新学科資料を配付。
・湖北・湖西地域の中学校と体験入学参加中学校への訪問
・北部地域中学校（18 校）の進路担当者との情報交換
・市内中学校２年生保護者および生徒に体験入学の案内を市教委経由でデータ配布

昨年度に引き続き、地域向けの広報活動を以下の通り実施した。

・季刊発行の「伊香高通信」を４号（第５号～第８号）作成し、旧伊香郡地域の自治会に配布した。地元自治会へは全戸配布、その他地域は自治会内での回覧をお願いした。主に地域連携や新学科に関した内容を掲載している。
・公式フェイスブックとインスタグラムのアカウントにて、地域の方向けに学校の活動や日常風景を発信した。
・県内遠方から入学希望の中学生を受け入れる下宿先サポーターを募集するパンフレットを作成し、木之本自治会に全戸配布を行った。

また、2025 年３月 23 日には、主に地域の方を対象とした、第３回伊香高シンポジウムを実施した（生徒による活動報告や学校魅力化、木之本留学構想の内容共有）。

コンソーシアムの理事会を２回開催し、以下の団体に対して学校の取組について説明した。

・旧伊香郡地域の各地域づくり協議会（高月、杉野、高時、木之本、伊香具、余呉、西浅井）
・長浜市商工会
・長浜市
・長浜市教育委員会
・伊香高校学校運営協議会

以下の発表機会に生徒が参加し、探究的な取組について発表した。

・R6.12/1：長浜市青少年育成 市民のつどい
・R6.12/25：高校生による【しが】学びの祭典 2024
　（発表テーマ「地域と協働したカフェメニューの開発」）
・R7.2/16：北の近江振興 高校生サミット
　（発表テーマ「滋賀県北部の森・川・湖のつながりに関するフィールド調査」）

以下の発表機会に参加し、魅力化・新学科の取組について発表した。

・R6.5/18：全国トチノキ学ネットワーク第１回長浜大会
・R6.8/6：長浜市 教育委員会主催 環境教育に関わる研修会

・R6.8/8：特別な支援を必要とする子の進路についての学習会
・R6.9/5：虎姫学園 出前授業
・R6.10/11：米原中学校 出前授業
・R6.11/9：こども Do まんなかひろば
・R6.12/25：高校生による【しが】学びの祭典 2024
・R7.1/11：みんなではぐくむ あたらしい「やまのコモンズ」
・R7.3/2：つくるミライ展

以下のイベントにて、新学科 PR ブースを設置した。
・R6.8/23～8/25：木之本地蔵大縁日
・R6.11/3～11/4：たかしま里山里湖マルシェ
・R6.12/25：高校生による【しが】学びの祭典 2024
・R7.3/9：あぢかまの里　道の駅まつり
・R7.3/9：環境にやさしい日フェアーみんなで考えよう！長浜の SDGs－

以下の取材対応を行った。
・長浜市商工振興課運営 「長浜航海記」（ウェブサイト掲載）
・「中日新聞」（11/8 付）
・「彦根東高校新聞」（540 号掲載）
・「長浜 森の生活史」（ウェブサイト掲載）
・「み～な びわ湖から」（冊子特集掲載）
・「過疎物語【全国過疎地域連盟】」（YouTube 掲載）
・「リクルート進学総研」（ウェブサイト掲載）

その他、以下の項目を実施した。
・中学３年生向けの体験入学を昨年より１回増やし、年３回実施。特に、第３回体験入学は、新学科の紹介に注力し企画した。中学２年生向け「もりたんツアー」と同時開催し、地域の森林に関する専門家をお招きして本校裏山に入り体験実習を行った。
・県内の自然環境系機関や施設をまわり、ポスター掲示を依頼した。

第５号
（６月発行）

第６号
（９月発行）

第７号
（12 月発行）

第８号
（１月発行）

新学科ＰＲチラシ①

新学科ＰＲチラシ②

新学科ＰＲポスター

下宿サポーター募集チラシ

課題

・地域内外の様々な団体にパンフレット・チラシを配布した。発信したい内容があるにもかかわらず、印刷やデザイン依頼に使える費用が少なかった影響で配布を控えた場面があった。
・新学科に特化した広報資料や説明会の開催等、情報共有を地道に行ったが、マンパワー頼りの広報計画となった。

次年度計画への反映方針

・来年度は全国募集に向けた、県外生徒に対しての広報も行う。さらに人的リソースが限られているなかリーチ活動を実施していくためにも、自治体との連携、注力時期やエリアの検討など計画性と持続可能性な広報活動を実施する必要がある。

■管理機関

管理機関として、伊香高等学校が所在する長浜市教育委員会には、伊香高等学校では新学科「森の探究科」のカリキュラム研究や先行授業等を行っていること、県教育委員会主催の新学科説明会を開催すること等を説明した。あわせて、令和７年度設置であることから、特に現中学３年生を対象に市内中学校等への周知や、必要に応じて県教育委員会や伊香高等学校から中学校長会進路指導主事会に出向いて新学科の説明をさせていただくこと等をお願いした。

新学科「森の探究科」の設置は令和７年度であるため、本格的な広報活動を令和６年度より実施した。管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行った。また、令和６年 11 月には、中学２年生向けに新学科に関する広報チラシを作成し、県内中学校を中心に周知活動を行った。

令和７年度においても、長浜市を中心とした中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して、新学科について説明を行うことを予定している。学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンハイスクールを実施し、新たな学科の魅力を発信していく。

令和７年１月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、伊香高等学校への志望者数は地元地域の中学校等卒業予定者数減もあり、前年同期調査と比較してやや減少した。長浜市内 12 中学校・義務教育学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和７年度以降の周知活動に努める。

課題

・伊香高等学校での新学科設置に向けた検討状況は、長浜市教育委員会や県議会等に適宜説明してきた。令和７年４月には新学科の１期生が入学し、「森の探究科」の学びが始まる。より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていく必要がある。

次年度計画への反映方針

・県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」等を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたいと考えている。
・長浜市広報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたいと考えている。
・長浜市内 12 中学校・義務教育学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得な

がら検証し、令和７年度以降の周知活動に努める。

（８）　管理機関における事業全体の成果検証、評価

令和４年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高等学校 29 校のうち地域連携重点により魅力化を図ることを推進する 13 校で、「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和５年度から開催することとした。初回は令和６年１月 23 日に開催し、連絡会議の場で伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果検証を行った。連絡会議は隔年で定期的に開催することを予定しており、令和７年度も引き続き開催する。

あわせて、年３回の運営指導委員会によって事業の進捗状況や成果を確認し、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てた。運営指導委員会では、学校が求めるカリキュラム検討やコンソーシアム運営等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただけた。運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和７年度も引き続き、年３回は運営指導委員会を開催していく。

令和４年度滋賀県教育研究事業「県立高等学校魅力化推進事業」において、地域連携のためのコーディネーターを伊香高等学校に配置し、炭づくり、薪割り体験や地域住民とのふれあい対談等、地域を教育資源とした地域連携活動に取り組み、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICT による学校間連携授業に取り組んでいる。このように、伊香高等学校では、１年先行して普通科改革の研究を進めてきたこともあり、コーディネーターを中心とした新学科のカリキュラムやコンソーシアム運営等の検討は、令和７年度設置に向けて順調に進んでいると評価している。

課題

・「地域連携重点魅力化連絡会議」や運営指導委員会の場で、取組の成果について検証・評価いただいてきた。一方、運営指導委員会については、学校と十分打ち合わせの時間を取れないこともあり、今後学校が求める指導・助言等を、より十分いただけるように準備を進める必要がある。

次年度計画への反映方針

・「地域連携重点魅力化連絡会議」では、伊香高校の取組内容および諸課題を共有することで改善点等を把握するとともに、県内地域連携重点校における魅力化の取組推進につなげる。
・運営指導委員会の開催にあたっては、新学科および学校全体の状況等をしっかり確認しながら進めていく。
・「伊香高等学校魅力化シンポジウム」や、その他成果発表会等の機会を活用して成果検証と評価を行い、以後の事業運営に役立てる。

（９）　管理機関による支援体制

伊香高等学校の新学科「森の探究科」は、森林管理や木工加工等の実習や森林資源を活用したサービス産業、地球環境や再生可能エネルギー等をテーマとした探究学習に取り組む学科を考えており、木材加工等のための実習室や、学校設定科目に必要な備品等の用意、指導できる教職員の配置が必要である。備品等については、令和７年度県事業「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」や「2050 しが CO2 ネットゼロに向けた高等学校の研究取組推進事業」において予算化し、教職員については、事業終了後は、新学科の専門的な学びに対応した特別非常勤講師の配置を予定する。

（10）　成果普及のための取組

■伊香高等学校

伊香高等学校は、中学３年生向けのオープンハイスクールを年３回実施したり、学校のホームページや SNS を活用して様々な活動を掲載し情報を発信したり、伊香高通信を発行したりするなど、地域住民や地元中学校等に向け情報発信を行った。

また、「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月 23 日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。連絡会議は隔年開催することとしており、次回は令和７年度に開催する。

さらに、２月 16 日に開催された「北の近江振興　高校生サミット　集え！北の高校生たちよ！」では「滋賀県北部の森・川・湖のつながりに関するフィールド調査」をテーマにした 1 年間の探究活動の成果を発表した。３月 23 日には木之本スティックホールで「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、今年度の教育活動の報告や、生徒による地域連携についての研究発表等を行い、伊香高等学校の新学科について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者等に向けてメッセージを発信した。

令和５年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。令和７年度の「学びの祭典」において、「森の探究科」の学びに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科を県内の中学生等にアピールしていく。

・生徒による授業内容の発表
- ▶ R7.2/16：北の近江振興　高校生サミット
  （発表テーマ「滋賀県北部の森・川・湖のつながりに関するフィールド調査」）
- ▶ R7.3/23：伊香高等学校魅力化シンポジウム

■管理機関

「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13 校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和６年１月 23 日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。連絡会議は隔年開催することとしており、次回は令和７年度に開催する。

課題

・昨年度実施した「地域連携重点魅力化連絡会議」では、本事業の指定を受けた学校の取組状況等を発表していただくことで、本事業の効果的な実施と、各校での地域連携の取組や地域社会に関する学科の検討の一層の推進を図った。地域連携の取組を進めるには、コーディネーターの配置や教職員の時間軽減等、予算・人員配置が焦点になりがちだが、令和７年度開催時には、それ以外のところも県教育委員会として各校の取組を支援する方策を考えたい。

次年度計画への反映方針

・伊香高等学校が行うオープンハイスクールとは別に、県教育委員会として、長浜市を中心に中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を主催する。令和７年度は新学科の生徒も参加した説明会とする等、出席者にとって訴求力の高いものになるよう工夫する。

（11） 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

■管理機関

・国の指定終了後も「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、地域おこし協力隊も含め、管理機関である県教育委員会は長浜市と事業指定３年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。また、県教育委員会事務局生涯学習課の令和６～８年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。

・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。

・令和３年度から令和５年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和６～８年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「森の探究科」の学びの継続・充実のための予算確保や、長浜市や地域の企業等から費用を含めた支援も含め検討していく。

・県教育委員会内の体制や予算等、伊香高等学校が自走していけるよう必要な支援を継続する。

・特別非常勤講師の仕組みを活用して、外部講師による教育内容の充実・継続を図る。

■伊香高等学校・長浜市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、特に長浜市の地域おこし協力隊の制度等を活用したコーディネート人材の活用、ふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得など、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

（12） 他の事業との関係

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、令和４年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICT を活用した、小規模の学校間での遠隔授業の日常的な導入に向けた研究に取り組んだ。伊香高等学校を研究校に指定した研究で、地域社会に関す

る学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

遠隔授業の研究については、令和４年度から滋賀県総合教育センターと協力して実施している。伊香高等学校と伊吹高等学校を対象とした取組で、２校の生徒がオンラインで地域探究活動や「化学基礎」の科目で合同授業に取り組んできた。令和６年度は、「森の探究科」での学びを見据えて、県立琵琶湖博物館や国立研究開発法人森林総合研究所等の専門機関と結んで専門的な深い学びの遠隔授業を実施した。

また、令和５年度から県北部地域の高校（伊香高校はその対象）を対象とした「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」を実施している。この取組は、北部地域の高校の魅力化を進めることで、北部地域の高校やそこで学ぶ生徒が、地域で探究的な学びを深めることにより、地域振興に寄与する人材を育成すること、また、高校生が地域課題解決に向けた施策構築や地域振興、企業に必要な資質「解決したい課題を発見し、その解決方法を共同で検討し、提案・実践する力」を養成することで、未来の北部振興に挑戦する精神の育成、若い世代の育成につなげるとともに、地域に定着し貢献する人材の育成につなげることを目的としている。

「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」における「北部の地域課題に向けた北部探究プロジェクト」（令和５年度は「北部ならではの学びの創出」）では、県北部地域の豊かな自然環境や森林資源等を活用し、「森で学ぶ」をコンセプトに人と自然が共存する循環型社会構築に資する人材を育成するとともに、地域の森林資源等を活かしたまちづくりにかかわり、地域活性化との相乗効果を目指す取組である。森林資源等の自然環境を活用した炭焼き体験やアウトドアキャンプ実習、また、環境教育の一環として近隣の発電所見学や教室の断熱改修ワークショップ等、新学科設置に向けた様々な取組を実施した。また、県外の先進校も視察し、カリキュラム検討の参考とした。３月 23 日には木之本スティックホールで「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、今年度の教育活動の報告や、生徒による地域連携についての研究発表等を行い、伊香高等学校の新学科について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者等に向けてメッセージを発信した。

令和７年度も引き続き「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」を実施し、北部地域の高校の魅力化を進めたい。

第３章　研究開発の内容

３－１　運営指導委員会

■第１回運営指導委員会

＜会議の日時等＞

開催日時　　令和６年７月 16 日（火）14：00～15：35（伊香高等学校　第３会議室）

出 席 者　【運営指導委員】

久木裕委員　岳野公人委員　中嶋克之委員　平岡俊一委員　山本綾美委員

【伊香高等学校　森の探究科推進室】

大森文子校長　中川雅彦教頭　箕浦総子事務長　水谷智宏教諭　富山昌彦教諭

中川聖良教諭　中野優教諭　平塚恭平教諭　大久保卓也教諭

中山郁英コーディネーター　副島拓歩コーディネーター

伊藤利恵コーディネーター

内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況等について

最新情報の共有、「持続可能性」について

（２）事業に関する指導助言等

○カリキュラム、広報について

○資料説明（富山教諭）

＜主な意見＞

・今ある自然を学ぶだけでなく、例えば森をスポーツやキャンプとして利用するなど、それを活かすという視点もあるとよい。また、学びの結果形になるものをアウトプットしていくことで、学校や地域に対する愛着も生まれてくるのではないか。

・学びのアウトプットがあるからこそインプットが有効になると思う。校外で開催されるコンクールや発表会などを目標として学びを進めていくと、生徒の学びのモチベーションが高まるのではないか。

・１年生の段階で森をフィールドとしたワクワクするような発見、学びの機会があると、その後の探究心にもつながる。最初の段階で基本を学ぶ動機になるものがあるとよい。

・将来的にどのような活躍の仕方があるか、早めにキャリアのモデルケースを見せてあげることで、２年、３年生の学びやモチベーションに繋がっていく。講師で来られる方自体がとても良い教材になるはず。講師の方の学校での学びや社会での経験等のお話は意識的にどこかで時間を取っていただけるとよいと思うし、それらを踏まえて生徒自身も考える時間を１年生の段階から取り入れるとよいと思う。

・全般的に良い方向に動き出しているように感じる。実習が多いためこれを最終的にどうまとめていくかということも考えていく必要がある。

・最近では、新聞社に新学科やスクール・ミッション、ポリシー等記事にしていただいた。他には県教育委員会発行の「教育しが」、県発行の「滋賀プラスワン」に掲載いただいている。また、琵琶湖博物館や森林関係の機関等にポスターを持参するなど周知に伺っている。

・広報の際には、ピンポイントで関心のある生徒に情報が届くことも大事なこと。

・説明会の参加状況から遠方の中学生にも関心を持っていただいていることが分かる。湖北には様々な活動を行っている方がおられるし、学校の教員によって良い授業もできると思う。森の探究科でどのような人材を育てたいか、卒業の時点でどのような能力を目指しているかといったことを、はっきり示されるとよいと感じた。

○「持続可能性」について
○資料説明（中山コーディネーター、大森校長）
＜主な意見＞

・新学科は国の事業期間だけでなく、この先継続的に通常運転できることが最低の条件だと考えている。コーディネーターはそれぞれ知識を持っておられ助けられている。本校は県最北の高校でもあり、教員が足りていない。そのような中でコーディネーターの方々が我々の思っている以上の仕事をしていただいているからこそ事業が回っているようなもの。学校の教員は転勤もある中で、最終的にはコーディネーターが１人でも配置されていないと持続可能性は難しい。
・ここまで続けてきたものを今後どのように持続させていくかについて、この時期に考える必要があるということで問題提起いただいていると思う。この場ではっきり申し上げるのは難しいが、まずは授業とそれに係る経費、そしてコーディネーターとコンソーシアムをどうしていくか、そこまで含めて財源措置に向けて努力していきたい。
・市の方でも副島氏にお力になっていただいている。先のことなので分からないが、地域おこし協力隊に継続して関わってもらうのもやり方としてはあるかと思う。
・コンソーシアム継続性について、法人化して運営するとしたら、コーディネーター自体もコンソーシアムの所属でそこから学校に派遣される可能性もあるということで、理想的な形ではある。コンソーシアムがどういう機能を持つか、どういう事業を行っていくかということもセットで議論をしていく必要があると思う。
・当面はこれまで関わってきた方がしっかり関わっていくなど安定した土台が必要かと思う。来年度新１年生が入り、２年、３年と上がる度に毎年新しい取り組みを始めていかないといけない。初めてのことが数年続くので学校だけでは難しい。ここ数年はこれまで熱意をもって関わってきた方々が引き続きサポートする形が必要であり、そのための予算が必要。それを支えるためにも県がお金を確保する必要があるのではないかと思う。
・新学科のコンセプトを持ってアピールすることは、予算取りのためにも必要である。例えば、林業の担い手を育成すると一つでも明記されていたら、そこを頼りに予算を入れることができる。地域に根付く人材を育てたいとすれば、地域の予算を取ってくることができるかもしれない。このような点からも新学科のコンセプトを明確に謳うことは大事ではないか。

■第２回運営指導委員会
＜会議の日時等＞

開催日時　令和６年 11 月 27 日（水）14：00～15：40（伊香高等学校　第３会議室）
出 席 者　【運営指導委員】
久木裕委員　岳野公人委員　三浦豊委員
【滋賀県立伊香高等学校　森の探究科推進室】
大森文子校長　中川雅彦教頭　箕浦総子事務長　水谷智宏教諭　富山昌彦教諭
中川聖良教諭　中野優教諭　大久保卓也教諭
中山郁英コーディネーター　副島拓歩コーディネーター
伊藤利恵コーディネーター
内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況等について
最新情報の共有、今後の取組について
（２）事業に関する指導助言等

○カリキュラムについて
○資料説明（富山教諭、大森校長）
＜主な意見＞

・体験に重きを置かれたカリキュラムでとても魅力的だと感じた。
・木之本は文化的背景も豊かな場所で、先人たちが育んできた精神文化もある。座禅や瞑想といったことで内観する時間、体験もあるとよいのではないか。社会に出ても自分という人間が根幹になってくると思う。そういう人間の探究というところもカリキュラムに入れられると、より深みのある素晴らしいものになると感じた。
・カリキュラム全般が具体的になり、非常に充実してきたと思う。外部講師で構成されているため、持続可能性の部分で心配はあるが、具体的なものが外に出せるようになると注目も集まるのではないか。
・中学校の理科や社会科などは森の探究科の学習内容に繋がる学びもあり、中学校の学びの上にこの森の探究科があるという見せ方もあると思う。そういう意味では中高連携みたいなものも少し考えていけないかなと思う。
・「まち全体が寮」というのはとてもすばらしいコンセプトだと思う。適切な費用徴収も検討されており、地元で一体感を持って持続可能性も含め検討されていることに敬意を表する。
・「森の探究科」という名称はキャッチーでよいと思う。新学科の生徒には、人々の営みとともに育まれてきた林があり、そして自然にできた森があるというところをみてほしい。言葉の問題になるが、「森」と「林」という概念にも注力していただけたらと思う。
・企業にとって水環境というのは非常に大きな問題で、水を守ることは森を守ること、そこを企業も真剣に考えている。水を守るための森の管理って何なのかということを、大学等とも連携して論理的に解明し、その対策を地域が中心になって取り組んでいくといったことができないか。そういう点では、伊香高校の存在はとても大きいと思う。生徒が大手企業や研究機関と一緒に、日本また世界最先端のことを伴走するといったことが森の探究科だと発展性としてある。そういったことも授業に組み込むと面白いのではないか。
・魅力的なカリキュラムが検討されていると感じている。是非、学び・体験・楽しさを、「社会への応用」、「地域課題の解決」、「全国への発信」につなげていけないか、常に考えるような工夫をしていただければと思う。

○今後の取組について
○資料説明（富山教諭、大森校長、副島CN）
＜主な意見＞

・全国募集していくことを考えた際に、どのように広報していくか。今後全国募集を続けていく中、地域みらい留学の仕組みを利用しながらでも今後展開していかないといけないと思っている。
・まずは授業をしっかりできるよう県として予算措置させていただいた。広報についても学校で取り組んでいただいているところではあるが、２校の新学科広報に少しでも力になれることがあればと考えている。予算が厳しい中ではあるが、できることを考えているところ。
・全国から生徒が集まると地域活性化にもつながってくると思うが、多くの場合、基礎自治体が地域振興という観点からそういう活動に注力されているケースが多い。市については、学校に対する支援というより、地域振興という観点から、また県にとっても地域への移住、定住などの政策で何かできないかと思っている。
・長浜市内の中学生に向けて今年度から本格的な広報を行ってきた。中学生はどちらかと言

うと面倒見が良くて、しっかり進級できるところといった観点で高校選びをしているようだ。森の探究科に入学してから卒業するまでのイメージが分からないと中学生も検討しづらいという状況もある。

■第３回運営指導委員会

＜会議の日時等＞

開催日時　令和７年３月23日（日）16：00～17：00（木之本スティックホール研修室）

出 席 者　【運営指導委員】

久木裕委員　岳野公人委員　中嶋克之委員　山本綾美委員

【滋賀県立伊香高等学校　森の探究科推進室】

大森文子校長　中川雅彦教頭　箕浦総子事務長　富山昌彦教諭

大久保卓也教諭

中山郁英コーディネーター　副島拓歩コーディネーター

伊藤利恵コーディネーター

内　　容　（１）「普通科改革支援事業」の取組状況等について

今年度の成果の報告

次年度の検討課題

入試結果

留学サポートの会について

（２）事業に関する指導助言等

○成果報告、次年度の検討課題、入試結果、留学サポートの会について

○資料説明（富山教諭、大森校長）

＜主な意見＞

・今年度開催された体験入学の中学生参加人数は、夏休み中に開催した１回目が124名、10月開催の２回目が38名、11月開催の３回目が14名であり、当日は参加者をグループ分けして模擬授業を行った。県南部地域の中学校からも参加いただいた。

・本日の説明を聞いて、第三者的に見るとこの学校いいなと感じるようになった。令和８年度以降が気になるところで、授業と運営の面でしっかり体制をつくっていかないといけない。授業のトライ＆エラーは先生が最も感じられる部分であると思われ、外部的な評価やサポート等は必要かと思う。

・まずは森の探究科をここまで組み上げられたことに敬意を表する。入学希望者数も初めての取組にしては十分かと思うし、ここから広がっていくものと思うので、ぜひ成功させてほしい。令和８年度から全国募集も始まっていくが、学校によっては初年度、２年目はゼロというころもあるのではないか。そのような中でどのように人を集めていくかというところを心配している。学校について営業できる人材は絶対に必要だが、そのような人材がいないのが現状。この辺りのサポートが得られることを考えていく必要がある。市の立場としても、応援していきたいと思うので、こういった部分も念頭に置いて進めていただきたい。

・この事業自体のゴールがどのあたりにあるのか。例えば、定員を埋めることが最優先になるのか、コンソーシアムをまとめて地域の活性化がゴールになるのか、またカリキュラムの充実等なのか、様々な要素がある。それぞれ学校の先生にできることや地域の方に御協力いただくことなどあり、どこに集中していくか整理しないといけないと思う。

・シンポジウムでは「地域」という言葉が出ており、先行授業などに地域の方も関わっておられる状況から、普通科の「地域デザインコース」も関係がありそうだが、「森の探究科」の授業に乗り入れる想定もされているのか。また「地域デザインコース」の生徒が「森の探究科」で学びたいとなった場合は可能なのか。
・入試の段階で「森の探究科」と「普通科」は分かれている。普通科に設置されているコースは２年生から選択するため、授業も分かれることになるが、互いにタイアップしながら一緒にできそうなことがあれば実施したいと考えている。
・現在多くの外部講師の方が来られているのは、事業予算があるからなのか。事業終了後はどのような想定か。
・森の探究科の授業については、来年度からは特別非常勤講師という形で来ていただく。専門の方を授業ごとにお呼びするという形になる。
・本日のポスター展示を見させていただき、魅力的だと感じた。一方で、最近は携帯やタブレット端末の画面で学校 HP を見て感じ、学校選びの判断をされている。今はネットが営業してくれる時代で保護者も見ている。その点では今の HP の画像は拡大できないなど魅力が伝わりづらくもったいないと思う。説明会や体験入学で志望校を決めることもあるが、第一印象という点では HP も大事なので、ぜひ頑張っていただけたらと思う。
・将来的には、市外、県外など外の力をもっと活用できるとよいと思う。我々が外との繋がりの仕事をする中で、地域、若者支援、教育などの分野に興味を持たれているケースも多いので、物心両面で支援いただける可能性は高い。次のステップとしてお考えいただきたい。

３－２　地域と伊香高のミライ創造コンソーシアムの会議

令和６年３月 23 日の魅力化シンポジウムでコンソーシアムの発足式を行い、令和６年度は理事会と専門チームの会議を以下のとおり開催した。

＜概要＞

■理事会　第１回会議

開催日　令和６年６月 26 日（水）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	杉野地区地域づくり協議会	奥野義明氏
	高時地区地域づくり協議会	奥村勝氏
	伊香具地区地域づくり協議会	二宮邦剛氏
	余呉地域づくり協議会	三國晃氏
	西浅井地区地域づくり協議会	山口正之氏
	長浜市商工会	山内芳博氏
	長浜市未来創造部政策デザイン課	手崎俊之氏
	長浜市未来創造部北部政策局	横尾仁氏
	長浜市教育委員会教育指導課	草野孝夫氏
	滋賀県教育委員会高校教育課	木部浩次参事
	滋賀県教育委員会生涯学習課	石田由美社会教育主事 中村隆洋氏（ＣＳアドバイザー）
	伊香高等学校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高等学校ＰＴＡ	吉村優子氏
	伊香高等学校学校運営協議会	寺田年克氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭 箕浦総子事務長　水谷智宏教諭 富山昌彦教諭 中山郁英コーディネーター 副島拓歩コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った。

１．コンソーシアム規約について
　・規約
　・体制図
２．伊香高校より現況報告
３．森の探究科運営専門チームより報告
４．各団体からの要望事項について
　・現在いただいている要望事項
　・地域協働活動マッチングシートの活用について
５．生徒募集に関わって
　・遠方からの入学希望者への対応
６．今後のスケジュールについて

コンソーシアム発足後、理事の初会合となった。新年度のためメンバーの入れ替わりもあり、改めて規約や体制についての確認を行った。また、参加団体からの要望と今後の協働のあり方について情報共有と議論を行った。

■理事会　第２回会議

開催日　令和７年３月 14 日（金）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	杉野地区地域づくり協議会	奥野義明氏
	高時地区地域づくり協議会	奥村勝氏
	余呉地域づくり協議会	三國晃氏
	長浜市未来創造部政策デザイン課	手崎俊之氏
	長浜市未来創造部北部政策局	横尾仁氏
	滋賀県教育委員会高校教育課	木部浩次参事
	伊香高等学校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭 箕浦総子事務長　富山昌彦教諭 中山郁英コーディネーター 副島拓歩コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

１．報告・説明

（１）今年度の地域と連携した取り組みについて

（２）森の探究科運営専門チームより

（３）生徒募集専門チームより

（４）生徒募集に関わって

・遠方からの入学希望者への対応

２．各団体からのコメント、質疑応答

今年度の各専門チームの取組について説明を行い、今後の方向性について協議した。その後、各理事一人ひとりよりコメントをもらった。生徒の発表についての講評や、地域との連携、資金と運営、北部地域の人口減少と長浜市のこども若者支援などについて、活発な意見交流を行った。

■森の探究科運営専門チーム　第１回会議

開催日　令和６年６月 17 日（月）

出席者	教育プランナー	余島純氏（Zoom 参加）
	株式会社バイオマスアグリゲーション	久木裕氏
	滋賀県森林組合伊香事業所	高橋市衛氏
	滋賀県びわ湖材流通推進課	知田之宏氏
	長浜市北部産業振興課森づくり推進室	横田茂隆氏　上坂謙太氏
	長浜市環境保全課	伊藤栄昭氏　桐畑孝佑氏
	長浜市教育委員会教育指導課	北村友紀氏
	滋賀県教育委員会高校教育課	木部浩次参事
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭 水谷智宏教諭　富山昌彦教諭 大久保卓也臨時教諭 中山郁英コーディネーター 副島拓歩コーディネーター 伊藤利恵コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った。

1．カリキュラムの考え方と「森のキホン」のカリキュラム案について
2．カリキュラム検討のためのこれまでの取り組みについて

昨年度のカリキュラム検討内容を振り返り、改めてカリキュラムの基本的な考え方と「森のキホン」（1年2単位）に関するカリキュラム案について議論した。また、1 学期に実施しているプレ授業についての説明も行った。その後、出席者による意見交換と情報共有を行った。

■森の探究科運営専門チーム　第２回会議

開催日　令和６年 10 月 24 日（木）

出席者	株式会社バイオマスアグリゲーション	久木裕氏
	ながはま森林マッチングセンター	橋本勘氏
	滋賀県森林組合伊香事業所	高橋市衛氏
	滋賀県びわ湖材流通推進課	知田之宏氏
	長浜市北部産業振興課森づくり推進室	横田茂隆氏　上坂謙太氏
	長浜市環境保全課	桐畑孝佑氏
	滋賀県教育委員会高校教育課	周防成彦指導主事
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭
		水谷智宏教諭　富山昌彦教諭
		大久保卓也臨時教諭
		副島拓歩コーディネーター
		伊藤利恵コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った。

1．プレ授業と広報活動の取組状況
2．「森のキホン」、「森の恵み」、「持続可能な社会」の授業計画について
3．「森の未来創造」について
4．次年度実施に向けての課題

森の探究科の３年間のカリキュラムの流れについて確認し、各科目「森のキホン」（1年2単位）、「森の恵み」（2年2単位）、「持続可能な社会」（2年2単位）の学習の流れと授業計画についての議論を行った。具体的な実施時期、実施内容、実施場所、講師などについての計画を決定した。さらに、「森の未来創造」（3年4単位）について、課題研究としてどのような形で実施できるかの議論を行った。

■生徒募集専門チーム　第１回会議

開催日　令和６年９月５日（木）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	木之本地区地域づくり協議会	岩根健治氏
	Ｋ－ＺＯＨＮ運営協議会	小泉優氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭

富山昌彦教諭　大橋成年教諭
中山郁英コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

1．報告・説明

（1）コンソーシアム規約について

（2）伊香高校より現況報告

・第１回中学生体験入学（８月 20 日）の様子

・Ｒ７年度入学生募集と遠方からの入学希望状況

（3）先進校見学の報告

2．協議

（1）遠方からの入学生の受け入れ体制

・サポーター募集への木之本在住の方からの問合せ

・近隣のアパートの空き状況

・協力いただけそうな方について

・受け入れやサポートについて

・必要経費について

・受け入れ手続きについて

（2）今後のスケジュールについて

生徒募集専門チームの初会議で顔合わせを行い、コンソーシアムや伊香高校のこれまでの活動内容などについて報告があった。遠方から入学する高校生のサポートに関しては、朝夕食の提供や生活サポート、個室の提供など、さまざまな点について検討を行った。

■生徒募集専門チーム　第２回会議

開催日　令和６年９月30日（月）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	Ｋ－ＺＯＨＮ運営協議会	小泉優氏
	木之本すむすむ編集室	中村妃都美氏　服部貴美代氏
	長浜市未来創造部（北部政策担当）	中田重樹氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭 富山昌彦教諭　大橋成年教諭 中山郁英コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

１．報告・説明

前回会議以降の動き

・現地確認と下宿先の交渉

・希望者の現地見学の様子

２．協議

（１）受け入れ体制

・生徒募集にあたって

（２）今後のスケジュールについて

前回の会議を受け、受け入れ体制の詳細について議論が深まった。「まち全体が、伊香高生の寮」をキャッチフレーズとし、遠方から入学する高校生のサポートに関して、朝夕食の提供や生活サポート、個室の提供など、さまざまな点について検討を行った。

■生徒募集専門チーム　第３回会議

開催日　令和６年10月22日（火）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	木之本すむすむ編集室	藤谷法子氏　中村妃都美氏
	長浜市未来創造部（北部政策担当）	中田重樹氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭 富山昌彦教諭　大橋成年教諭 中山郁英コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

１．報告・説明

前回会議のまとめと会議以降の動き

・第２回体験入学（10月６日）

・希望者の問合せ状況
・食事サポートについて
２．協議
（１）受け入れ体制
・生徒募集にあたって
・サポーターへの謝礼
・運営体制と運営資金
（２）今後のスケジュールについて

受け入れ体制の詳細について具体化が進められた。遠方生徒の受け入れに向け、条件も固まってきた。食事サポートの取り組みはまず１年という期間を想定して開始し、将来的な継続方法は別途検討することとした。また、予算の確保に向けて寄付募集や基金設立なども今後検討する。

■生徒募集専門チーム　第４回会議

開催日　令和６年 11 月 19 日（火）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	Ｋ－ＺＯＨＮ運営協議会	小泉優氏
	長浜市未来創造部（北部政策担当）	中田重樹氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭
		富山昌彦教諭
		中山郁英コーディネーター
		副島拓歩コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った。
１．報告・説明
前回会議のまとめと会議以降の動き
・第３回体験入学と「もりたんツアー」（中２生対象）（11 月３日）
・希望者の見学の様子
・下宿、食事、生活、資金サポートについて
２．協議
（１）受け入れのための組織体制について
・運営資金の管理について
・謝礼について
・運営組織について
（２）今後のスケジュールについて

遠方からの生徒受け入れに向けて、資金面の目安をつけ、サポート環境を整備するためには、持続的な資金確保のために組織化が必要である。今回、サポート組織として新たに「木之本留学サポートの会」（仮称）の設立についても議論した。また、食事提供グループの運営体制についても議論を行った。

■生徒募集専門チーム　第５回会議

開催日　令和７年２月 14 日（金）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	Ｋ－ＺＯＨＮ運営協議会	小泉優氏
	木之本すむすむ編集室	服部貴美代氏
	長浜市未来創造部（北部政策担当）	中田重樹氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭
		富山昌彦教諭
		中山郁英コーディネーター
		副島拓歩コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

１．木之本留学サポートの会の設立について
　・組織の在り方と規約

２．今後の検討事項について
　・受け入れの手続き
　・運営資金と会計
　・食事提供

前回の会議以降の入学希望者や地域の動きについて情報共有を図り、今後の下宿・食事・生活・資金についてのサポート方法について議論を行った。

■生徒募集専門チーム　第６回会議

開催日　令和７年３月 10 日（月）

出席者	コンソーシアム会長	大林利男氏
	木之本自治会	藤田喜代隆氏
	木之本地区連合自治会	落合武士氏
	木之本すむすむ編集室	服部貴美代氏　中村妃都美氏
	長浜市未来創造部（北部政策担当）	中田重樹氏
	伊香高校同窓会	丹治和弘氏
	伊香高校ＰＴＡ	千田壮史氏
	伊香高等学校	大森文子校長　中川雅彦教頭
		富山昌彦教諭
		中山郁英コーディネーター
		副島拓歩コーディネーター

以下の項目について、情報共有・議論を行った

１．前回会議からの動きについて
　・下宿、食事、見守り、資金のサポートについて

２．木之本留学サポートの会について
　・組織と実施体制、役職について

・規約について
・支援要綱について
３．今後の計画について
・下宿検討生徒へのヒアリングから下宿まで
・会計と口座開設について
・食事提供と場所について
・見守りサポーターについて
・初期費用について

前回の会議以降の地域の動きなどについて情報共有を図り、具体的なサポートの方法と今後の活動計画について議論を行った。また、「木之本留学サポートの会」とコンソーシアム生徒募集専門チームと連携を取りながら活動していくことを確認した。

３－３　教育活動改善に向けた先進校視察

（１）大津市立葛川小・中学校

期日　　令和６年７月 30 日（火）
視察者　教諭 富山昌彦、コーディネーター 副島 拓歩
対応者　教諭 松田 義輝 氏
内容　　①授業内容について（特色ある学びについて）
②地域と連携・協働した取組について
③卒業後の進路状況について

【学校の魅力化活動について】
・安曇川上流に位置する葛川小・中学校は、豊かな水と流域資源から独自の文化を持つ山間の小さな学校である。平成 30 年より小規模特認校に指定され、大津市全域から児童生徒が集まるようになる。
・過疎に苦しむ地域と一体となり「安曇川流域資源を活かした起業家精神の育成」をカリキュラムの柱に位置付けている。平成 30 年に始まった地域活性化をはかる小中学校の９年間の連続した総合的な学習の時間がスタートし、令和５年には、教科名を「ふるさと未来科」とした。ふるさとを大切におもい、未来をつくる力を育んでいる。

【特色ある教育について】
・葛川小・中学校では、アントレプレナーシップ育成を目的とし、ふるさと未来科の枠組みの中で「KCL プロジェクト」に取り組んでいる。KCL プロジェクトとは、児童生徒数減少による学校存続の危機から母校を守るため、地域を知ってもらい＜Know＞来てもらい、＜Come＞住んでもらう＜Live＞活動である。
・過去に行ったプロジェクトとしては、「地域に縁のある天然染料を用いた商品開発およびオンラインストアの開設」「地域の伝統である筏流しの再現・琵琶湖筏旅による安曇川流域水文化の広報」「安曇川支流を活用した子ども水力発電所の開発」などである。ふるさとを大切に想う児童の夢に共感する、地域内・外の企業や団体と連携しながら実施している。また、積極的に児童が学びを発表する全国規模のコンクールにも出場し、多数の賞を受賞している。

【新学科への反映】

・葛川小・中学校は、まさに学校を核とした地方創生を行っている学校であった。地域活性のため、学校は地域内外の人々を繋ぐところだという考えのもと、積極的なプレスリリース、コンクールへの出場を行っていた。本校も多様な人々と連携しながら、地域の活性化を目指し、湖北の森林資源の魅力を発信していく活動を「森の探究科」で実施していきたい。

（2）有限会社 依田林業

期日　　令和 6 年 9 月 27 日（金）
視察者　校長 大森文子 教諭 富山昌彦、コーディネーター 副島拓歩
対応者　有限会社 依田林業取締役 依田聡美氏
内容　　①事業内容について
　　②地域イベント「MORIKATSU」について

【主要事業】

・有限会社 依田林業では、山梨県甲州市の上萩原山地で、森林を維持管理しながら、育成した樹木を伐採して森林整備、保全を行っている。東京都水道局水源管理事務所の造林作業を請負っており、多摩川上流域を整備することで東京都民が使用する水源を守っている。

【特色ある取り組み】

・依田林業は、森林維持管理事業に加え、林業従事者や森林に関心を持ってもらうべく「MORIKATSU」というイベントを甲州市と企画・開催している。地域の林業従事者、森の恵みを活かした商品開発を行っている企業、飲食店とともに、森に触れるきっかけづくりを行っている。

【新学科への反映】

・「MORIKATSU」のような、地域で森をキーワードに活動している主体が集まり、その魅力を発信する場は湖北地域では少ない。伊香高校とその授業でお世話になっている方々を中心にお招きして、中学生・地域の方々が新たな森の魅力を発見できる機会を作りたい。

（3）名城大学　理工学部　環境創造工学科

期日　　令和６年 12 月 20 日（金）
視察者　教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也
対応者　教授 三宅克英 氏、准教授 広瀬正史 氏
内容　　①授業内容について（特色ある学びについて）
　　②卒業後の進路について
　　③中学生・高校生が地球環境の保全・持続性に関心を寄せるための仕掛けについて

【学科の特色】

・環境創造工学科は、わが国が目指す「持続可能な経済社会システムの構築」に貢献するため、従来の学問分野の枠組みを超え、エネルギー・資源循環分野、環境共生分野、人間活動環境分野の関連科目を幅広く学び、環境に携わるための知識・能力が得られる人材の育成に注力している。

【学科の沿革】
・2020 年 4 月に理工学部環境創造工学科が設置された。そして来年度 2025 年 4 月に、資源・エネルギー・バイオ工学コースと環境マネジメント・データ科学コースの２コース制になる。

【学生の状況】
・本学科の学生は、大学院へ進学する学生は少なく、土木や建築について学ぶ授業が多いこともあってゼネコンやインフラなどの仕事に就く生徒が多いようである。

【特色ある教育について】
・三宅教授は、環境材料・バイオマス、広瀬准教授は気象学・地球環境問題に関する実践事例や研究についてお話を伺った。三宅教授から、カニが森・川・湖のつながりに寄与していることとカニの飼育方法について、広瀬准教授からは衛星データを利用した地球環境の変化の観測や地球温暖化に関する諸問題をどのように取り扱うかなど、多くのご意見をいただいた。

【新学科森の探究科への反映】
・実際にカニを飼育し、森・川・湖のつながりを理解するために研究を行うことや、衛星データを用いて地域がどのように気候変動しているのか、また気象ステーションを利用した地域の気候現象の理解・解明を行う。

（４）大津市立葛川少年自然の家

期日　　令和７年１月９日（木）
視察者　校長 大森文子、教諭 富山昌彦、臨時講師 大久保卓也、コーディネーター 伊藤利恵
対応者　所長 田中義也 氏、次長 山本輝明 氏、指導主事 片桐愛 氏、
　　やまのこ専任指導員 藤本陽菜乃 氏、やまのこ専任指導員 吉田就登 氏
内容　　①施設案内
　　②所内散策
　　③草木染め体験実習
　　④情報交換

【学校の特色・沿革】
・自然の中での集団宿泊生活を通じて、子供たちに自然の偉大さを体験させ情操を育むとともに、よりよい人間関係を育てるために、昭和 62 年に設立された施設である。各種の野外活動やクラフト体験、冬季の雪遊びなど年間を通して多くの体験を実施している。例として、森林環境学習「やまのこ」事業やふるさと体験学習において宿泊実施を行うなど、滋賀県の自然環境学習に大きな役割を果たしている。

【特色ある教育について】
・館内は広く、寝る場所やお風呂など宿泊施設として十分な機能を持っていた。また、所内は豊かな自然のなかに位置しており、様々な樹木や動物が暮らしている痕跡、森からの湧き水など自然の美しさや雄大さを感じる絶好の場所であった。施設・所内見学後は、プログラムの１つである草木染めを体験し、今後の連携について協議を行った。

【新学科森の探究科への反映】
・葛川少年自然の家は、様々なプログラムがあり、そのプログラムを活かした高校での学びの実践例や、高校生によるプログラムの支援や補助など、幼少時から高校までの一貫した自然環境教育プログラムを考え、実践する。

（5）アルスシムラ

期日　令和７年１月８日（水）
視察者　校長 大森文子、教諭 富山昌彦
対応者　代表 志村宏 氏
内容　①授業内容について（特色ある学びについて）
②今後の展望について

【学校の特色・沿革】
・志村ふくみ・志村洋子が想像した染織の世界を、芸術体験を通して学ぶ場として 2013 年４月に設立。本科と予科、通信科を設置。草木で染め、機での織りを通して作品の製作を行っている。

【特色ある教育について】
・生木を使った草木染めを展開。様々な視点から思想・文化に触れ、手仕事を通した心が躍動する色彩体験を展開している。

【新学科森の探究科への反映】
・ご対応いただいた志村宏氏より、草木染めに関する様々な連携案をご提示いただいた。例として、伊香高校周辺の森より生木を切り出し、草木染めの簡易キットの販売を行い、ゆくゆくは滋賀県を色の産地とすること、また染色技術の途絶えている海外地域に草木染めの技法を伝えにいく構想があげられた。まず、本校周辺の森林資源を見直し、草木染めの実践事例を増やしていく。

（6）龍谷大学

期日　令和７年１月 22 日（水）
視察者　校長 大森文子、教諭 富山昌彦、大久保卓也、伊藤利恵コーディネーター、副島拓歩コーディネーター
対応者　龍谷大学 高大連携推進室
内容　①本校の取り組み、森の探究科のカリキュラム紹介
②龍谷大学の高大連携による取り組みの紹介
③連携内容の協議

【龍谷大学が行っている高大連携の取り組み】
・高校生が事前に課題に取組み、オープンキャンパス当日に龍谷大学教員が実施する「反転授業」という高大連携特別授業がある。高校における「学習」と大学における「学修」の違いや奥深さを理解する企画として、法学部や農学部、経済学部が行っている。
・総合的な探究の時間での連携依頼が直近では多く、課題探究のテーマの提示および中間発表
・最終発表のフィードバックという形での高大連携を行っている。

【新学科森の探究科との連携について協議した事項】

・新学科森の探究科のカリキュラムを共有した上で、多種多様な専門家が所属している龍谷大学として先端理工学部・農学部ともに、幅広い分野での協働が可能と言って頂いた。具体的には、大学が行う実験実習への生徒の参加、「龍谷の森」でのフィールドワーク、遠隔・出張での教授による出前講座の実施という形で連携が可能とのことだった。

・龍谷大学瀬田学舎の隣接する約 38ha の森林である「龍谷の森」にて、森の探究科の生徒が学校設定科目「森のキホン」の授業にて実習を行えないか相談した。実習によって、学術的な視点から森を見る方法を学習することができ、また滋賀県南部の森林と北部の森林の違いを考える機会となることが期待される。令和７年度 10 月での授業実施を視野に入れ、４月ごろ授業内容の相談および下見を行うことをご承諾頂いた。

３－４　新学科設立に向けた先行実施授業

新学科のカリキュラムで展開予定の授業を、令和５年度より先行的に一部開講してきた。今年度も地域の企業や事業者等と連携し、自然環境類型の「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」の授業を通して、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学び、また新カリキュラム設計に向けた検証材料にすべく授業を実施した。

３-４-１　滋賀県の森林について考える

（１）活動目標

〇滋賀県の森林概要を知る

〇森林の多面的機能を理解する

（２）実施概要

【スケジュール】

〇４月 10 日：本校

【実施体制】

〇授業実施：前田壮一郎（バイオマスアグリゲーション・カリキュラムアドバイザー）

〇対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 25 名

〇企画：教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】

〇新学科で令和８年度に開講される「森の恵み」を想定して、その授業内容に関するガイダンスを３年生自然環境類型で実施した。本時では、地域の森林事業者である前田氏を招き、滋賀の森林資源に関する概要と森林の多面的機能についてワークを行いながらご講義いただいた。

【生徒の感想】
○「滋賀県の森林は県面積の 1/2 を占めることを知り、滋賀県の自然の豊かさを知った。」
○「昨年に行った実習先の場所を確認し、湖北地域以外の場所がどうなっているか興味を持った。」

【成果と課題】
○滋賀県内の森林の場所や面積について具体的にイメージすることができ、森との接点について考えることができた。
○３年生の進路決定に取り組む時期に、森林に関する基本的な内容を取り扱ったが、生徒達がどのように本時の内容を受け取ったかは、普段の生徒達と自然との関わりによるところが大きく、個人差が見られた。

【次年度への反映】
○３年生の自然環境類型の生徒達は、２年次にすでに先行授業を受けており、授業の時期が適切でないように思われた。本時の内容はより早い時期に行い、本時の内容以後の学習につなげられるよう、カリキュラムを見直す必要がある。

３-４-２　森と人との関わりについて考える

（１）活動目標
○過去と昔の暮らしの違い（衣・食・住・エネルギー）を比較し、森と人との接点について考える。

（２）実施概要
【スケジュール】
○４月 16・17 日：本校

【実施体制】
○授業実施：コーディネーター 伊藤利恵
○対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 25 名
○企画：コーディネーター伊藤利恵、教諭 富山昌彦

（３）活動実績
【活動内容】
○身近に存在する森ではあるが、時代が進むにつれ、森と人との接点は減りつつある。本時では、昭和時代の写真を振り返りながら森と人との暮らしを見直し、昔と現代との暮らし（衣・食・住・エネルギー）の違いについて考えた。また、本校では農業科があった時代に、学校林での実習が行われていた。過去の本校での実習体験を辿りながら、森と文化の関わり、自分と森との関わりについて見直した。

【生徒の感想】
○「昔と現代の暮らしの違いを見直すと、文明開化や産業革命などのエネルギーの転換によって、衣・食・住に変化が見られたことと繋がった。」
○「昔の暮らしは今の暮らしと全く異なるものだと思っていたが、エネルギーが潤沢でない昔は合理的であることを知った。」

【成果と課題】
○昔と現代の生活を見直すことで、現代では衣・食・住・エネルギー全ての面で多様であり、一方で個人の選択が求められていることを感じることができた。
○この地域での昔の暮らしを振り返り、地域についての理解を深めることができた。

【次年度への反映】
○授業では、昔と現代の暮らしの違いを表にまとめるにとどまったが、図やイラスト等を用いるなど、生徒達のアウトプットの方法に一工夫できると感じた。
○本時の内容は、次年度に開設される「森の探究科」のカリキュラムだけでなく、普通科地域デザイン類型のカリキュラムに取り入れることについても検討の余地がある。

3-4-3　森の恵みを食す

（1）活動目標
○森には、山菜や木の芽、木の実、キノコなど、季節に応じて食すことができるものがあり、それは先人たちが苦労しながら開拓してきた結果である。本時は、「春の恵み」としてタケノコやシイタケ、山菜などを木質バイオマス（薪と炭）を用いて調理を行い食すことで、竹害や獣害といった山林の課題について考える機会とする。

（2）実施概要
【スケジュール】
○４月 23 日 ： 本校（計画書作成）
○４月 30 日 ： 本校（下ごしらえなどの事前準備）
○５月 1 日：本校（実習）

【実施体制】
○授業実施：本校教員
○対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 25 名
○企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也

（3）活動実績
【活動内容】
○班ごとに調理内容や調理工程を考え、皆が協力して森の恵みを堪能できる食事メニューを作成する。
○当日は、タケノコご飯や鹿肉のローストビーフ、原木しいたけとタケノコの炭火焼き、原木しいたけとタケノコの天ぷら、味噌汁を作り、森の恵みを味わった。

【生徒の感想】
○「鹿肉は想像しているよりも臭みがなく、また脂身も少なかったためヘルシーで食べやすかった。」
○「皆で協力してご飯や炭火焼き、天ぷらを調理し、記憶に残る実習となった。」
○「食を通じて、竹害や獣害などの様々な課題を知り、これからどのように諸課題と向き合うことができるか考えてみたい。」

【成果と課題】
○生徒達が日頃食さないジビエやタケノコを食し、森や山の恵みを美味しく堪能することができた。
○生徒達同士で、調理や皿洗いなど協力して実習を行うことができたおかげで、実習後はクラスの雰囲気が活発となり、本時後の実習をスムーズに行えるようになった。
○タケノコやジビエの食材の調達や下拵えの準備に時間がかかるため、実習に人手と労力を要する。

【次年度への反映】
○本時では旬の山の食材である山菜は用意できず、またシイタケも原木栽培したものを頂いた。今後は、学生達が主体となって食材の調達を行うことができるようにする。
○本時後に獣害に関しての学習を教員で行ったが、鹿肉を提供してくださった猟師さんにお話を伺うなど、現場の声を聞く機会を設ける。

3-4-4　キノコの魅力を考える

（1）　活動目標

○前述の調理実習で使用したキノコは、生態系のなかで大きな役割を果たしている。その生態系をキノコの構造とともに理解し、その魅力について考える。

（2）実施概要

【スケジュール】
○５月８日：本校

【実施体制】
○授業実施：中川仁男（ながはま森林マッチングセンター）
○対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 25 名
○企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】

〇キノコの森林での働きやその構造について、また原木でのキノコの栽培方法について、中川氏より講義を受けた。

【生徒の感想】

〇「シイタケの原木栽培は見たことがあったが、その原理について理解することができた。」

〇「シイタケ以外のキノコをどのように栽培するのか気になった。」

【成果と課題】

〇キノコの不思議な生態について学習し、キノコへの関心を喚起することができた。

【次年度への反映】

〇時間が限られていたこともあり、森林生態系の中のキノコの役割について学習することができなかったため、森林生態系の学習の中でキノコに関する学習を取り入れることを検討する。

〇学習の導入として、実際に森に生えているキノコを観察する時間を設ける。

3-4-5　ミツバチについて考える

（1）活動目標

〇ミツバチは世界の 3 分の 1 の作物を受粉しており、生態系や私たちの生活にとって非常に重要な役割を果たしている。その役割と生態について知り、減少しつつあるミツバチと森との関係について考える。

（2）実施概要

【スケジュール】

〇5 月 22 日：本校

【実施体制】

〇授業実施：塩範子（びぃふぁむ みつばちの雫）

〇対象生徒 ： 3 年生 自然環境類型 25 名

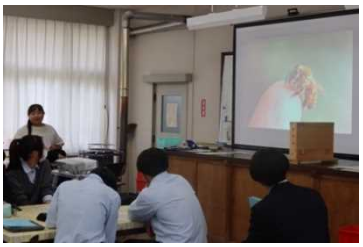
〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】

〇養蜂家の塩氏よりミツバチの生態や魅力についてご講義いただいた後、トチとソバのハチミ

ツの試食と遠心分離機を用いた採蜜体験を行った。その後、ミツバチが農薬の影響により減少の一途を辿っている現状を知り、私たちの生活が様々な生態系のなかでの自然の恩恵を享受していることを理解した。



【生徒の感想】
○「試食したハチミツの味は花や樹木によって、大きく味が異なることに驚いた。」
○「自然を相手にする養蜂家さんのお仕事は、蜂の管理が大変だと思った。」

【成果と課題】
○社会性生物であるミツバチの生態を知り、ミツバチが私達の暮らしや生態系の中で大きな役割を担っていることを知った。
○養蜂家の塩氏から養蜂の魅力について伺うことができたが、養蜂で世話をされているセイヨウミツバチは日本の在来種ではないため、日本の森林とミツバチの関係まで話を展開できなかった。

【次年度への反映】
○生徒たちが養蜂を体験し、ミツバチが周囲の生態系に良い影響を与えているかどうか、観察を行う。
○森林とミツバチの関係について知見を広げ、学習の内容に取り入れる。

3-4-6　園児たちへの樹木レクチャー

（1）活動目標

○２年生自然環境類型の生徒達は、これまで樹木観察を通して、樹木の構造や生態についての学習を行ってきた。本時はこども園の園児を対象に、グループに分かれて校内の樹木の魅力を紹介し、四季の移ろいや自然の良さを見直すなど、園児たちと共に自然に対する感性を育む。

（2）実施概要

【スケジュール】
○５月 22 日：本校

【実施体制】
○授業実施：本校教員
○対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名、きのもと認定こども園 ５歳児 31 名
○企画：教諭 富山昌彦

（3）活動実績

【活動内容】

〇校内を３つのエリアに分けて、エリアごとに園児達を案内する。そしてエリアごとで生徒達のおすすめ樹木の見どころ（生態や雑学）を紹介し、園児達と交流を行った。

【生徒の感想】

〇「園児達が話をしっかり聴いてくれて、良かった。」

〇「樹木だけでなく、花や他の場所を一緒に散策したい。」

〇「自分の担当箇所だけでなく、移動中にも園児達が楽しめるような雑談ができれば良いと感じた。」

【成果と課題】

〇生徒達は自分から自己紹介をするなど、園児達に積極的に話しかける姿が見られた。

〇樹木や植物の詳しい説明にあたって、本時の取組以外に樹木や植物の知見を広げる機会を創出する必要がある。

【次年度への反映】

〇本時は春の時期にレクチャーを行ったが、夏や秋など季節を変えて、園児達と触れ合う機会を設ける。

３-４-７　琵琶湖の源流を辿る

（1）活動目標

〇山門水源の森は琵琶湖の源流となる森で、貴重な湿原を有し冷温帯と暖温帯の植物の接点であるなど、多様な植生をもつ生物多様性に富んだ場所である。今回の実習では散策を通じて、山門水源の森における生態系と管理者の保全の取組について学び、生物多様性の意義について考える。

（2）実施概要

【スケジュール】

〇５月 24 日：本校、奥びわ湖・山門水源の森

【実施体制】

〇授業実施：冨岡明・浅井正彦・村田良文（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）

〇対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名

〇企画：臨時教諭 大久保卓也

（3）活動実績

【活動内容】

〇冨岡様より本校にて山門水源の森が中央分水嶺に位置していることや森の保全・管理が水を守ることにつながることをご講義いただいた後、バスにて奥びわ湖・山門水源の森へ移動。３グループに分かれて森や湿地、断層跡など多様なフィールドを散策し、引き継ぐ会の方々より植生する多様な樹木や植物の生態・保全に関する講義を受けた。

【生徒の感想】

〇「様々なフィールドで、多くの見たことがない生物を見ることができて、多様性について考えるきっかけとなった。」

〇「森の中は手入れがしてあったため綺麗で、気持ちが良かった」

〇「森の中では、色々な共生や食物連鎖があることを知り、生態系の複雑さを知ることができた。」

【成果と課題】

〇様々なフィールドが、生態系の保全に必要であることを体感することができた。今後は、フィールドの手入れや保全に関わる活動を行いたい。

〇山門水源の森は、琵琶湖の源流となる森林であり、水源涵養機能や生き物の住処になるなど、森の多面的機能を体感することができた。

【次年度への反映】

〇生物の多様性に関する学習は、多くの内容が想定されるため、実習と内容を精選してカリキュラムを考える必要がある。

3-4-8　草木染めを体験する

（1）活動目標

〇草木染めは、身近な植物を利用して染める、日本の伝統的な染色技術である。古代から、装飾的な目的だけではなく、繊維の強度向上や抗菌・防虫の効果、体の保護など、実用的な目的でも発達してきた。今回は、校内にある樹木を使った染色体験を行い、植物が持つ自然の色や樹木による色の違いを知り、自然由来の素材の良さについても体感する。

（2）実施概要

【スケジュール】

〇5月28・29日・6月4・5日 ： 本校

【実施体制】

〇授業実施：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 中野優、教諭 富山昌彦

〇対象生徒 ： ３年生 自然環境類型25名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（３）活動実績

【活動内容】

〇草木染めの概要や手法について講義をした後、数学の授業で絞り染めと実際の模様の関係について幾何学的な観点から講義を行った。後日、６グループごとに分かれて、校内で染液の素材（サクラの葉・枝・キンモクセイ・スギ・ヒノキ・ヨモギ）を採取、それぞれを細かく裁断し、鍋に入れて１時間煮出して染液を作成した。染液を煮出しながら、媒染液（染液中の色素を繊維により定着させる溶液）を作成。媒染液作成後は、染色と媒染の原理について、化学的な観点から講義を行った。後日、班ごとに綿を染色。素材の違いによる色や風合いの違いを比較して、各自学習内容をまとめた。

【生徒の感想】

〇「染液の臭いがきつかったが、綺麗に染まって良かった。」

〇「草木によって染まる色や染液の匂いが異なり、外見からは判断しにくい草木の違いを感じた。」

【成果と課題】

〇染めという文化的要素に数学・化学を絡ませて、教科横断的な取組に挑戦することができた。

〇植物の違いによる染まり方の違いや、天然由来の素材でもあるため後処理がしやすいなど環境負荷の少なさを体感することができた。

〇染色の結果は、同じ植物でも自生する土地や季節によって異なり、また染める繊維によっても異なるため、実際に染色を行うまで染まる色がわからない、という難しさがある。

【次年度への反映】

〇単に染色の結果を追い求めるのではなく、地域をどのように色で表現するかといったことやその表現方法を重視したり、草木染めを用いた商品開発を行ったりするなど、草木染めを行うにあたっての目標を明確にする。

３-４-９　豊かな森林と生態系について考える

（１）活動目標

〇滋賀県は豊かな森林資源を有しており、県面積の半分が森林面積となっている。本時は、講師の方から滋賀県の地形と森林の概要からみる昔と今の森の違い、また生態系からみた森の重要性についてご講義いただき、豊かな森林とは何かという視点から森林保全の意義について考える。

（２）実施概要

【スケジュール】

〇６月４日：本校（遠隔授業）

【実施体制】
〇授業実施：奥田岬（琵琶湖博物館）
〇対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名
〇企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）活動実績
【活動内容】
〇滋賀県の地形と森林の概要からみる昔と今の森の違い、また生態系からみた森の重要性についてご講義いただき、豊かな森林と森林保全の意義について考える。

【生徒の感想】
〇「滋賀県の森林の概要や保全の意義について知ることができ、豊かな森とは何かについて考えることができた。」
〇「森林の保全の課題としてシカの食害が大きな問題となっていることを知った。」

【成果と課題】
〇滋賀県の森林の概要や保全の意義について知ることができたが、一方生態系から見た森林の重要性についてまで掘り下げることはできなかった。

【次年度への反映】
〇本時は遠隔授業であり、また打ち合わせも遠隔で行ったため授業の狙いが先方に十分伝わっていなかったことが大きな反省である。依頼をする際は、生態系から見た森林についての学習であることをしっかり伝え、蝶やミツバチなど具体的な生物を絞って依頼を行う。

３-４-10　琵琶湖と生態系について考える
（１）活動目標
〇滋賀県は世界においても貴重な古代湖・琵琶湖を有しており、その琵琶湖では固有種を含む多様な生態系が育まれている。本時は、講師の方より琵琶湖の概要と生態系についてご講義いただき、人と生態系との関わりについて考える。

（２）実施概要
【スケジュール】
〇６月５日：本校（遠隔授業）

【実施体制】
〇授業実施：渡邉俊洋（琵琶湖博物館）
〇対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名
〇企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）活動実績
【活動内容】
〇琵琶湖の概要や生態系について講義を受けた後、琵琶湖の生態系に関わる外来魚問題について話題提供がなされた。生徒が外来魚問題について考えた後、講師より生態系の善悪は人間の主観で決まってしまうことの危うさを投げかけられ、人と生態系が関わる難しさと、生態系内の相互作用の難しさについて考えた。

【生徒の感想】
○「琵琶湖の生物について、詳しく知ることができた。博物館に行くなど、自分でも色々調べてみたい。」
○「最初は少数だった外来魚がすぐに繁殖したと聴いて、生態系の複雑さを感じた。」

【成果と課題】
○滋賀県のシンボルである琵琶湖の概要と生態系について知り、以前に学習した山門水源の森とのつながりを学習することができた。
○高校生にとって少し平易な内容であったため、琵琶湖の生態系に絞って依頼をするべきであった。

【次年度への反映】
○水鳥や固有種など琵琶湖独自の生態系がどのように形成されているか、また森林生態系とどのようなつながりがあるか、広い観点から授業を展開する。

３-４-11　森林の多面的機能と世界の森林施策

（１）活動目標
○森林の多面的機能にまつわるデータをもとに、森林の必要性と森林管理の方向性について考え、これから求められる森林管理や保全方法について考える。

（２）実施概要
【スケジュール】
○６月 18 日：本校（遠隔授業）

【実施体制】
○授業実施：吉村真由美（森林総合研究所）
○対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名
○企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）活動実績
【活動内容】
○水の循環に森林がどのように関わっているか、豊富なデータをもとにご講義いただいた。その後、世界の森林施策を例に世界の動向を踏まえたこれから求められる森林管理やその方向性について考えた。

【生徒の感想】
○「森林に関する色々なデータを提示いただいて、最近の科学はすごいと感じた。」
○「森林に関する取組は、世界で取り組むべき課題であると感じた。」

【成果と課題】
○森林の多面的な機能をデータと裏付けながら理解することができた。また、森林の保全には、個人の意識や活動といったソフト面だけでなく、政策や規則などのハード面も重要で、生物多様性の保全は世界で取り組むべき課題であることを認識できた。

【次年度への反映】
○生物多様性に関する内容を続けて学習していき、日本の生物多様性が世界的に見て豊かであることや、世界の生物多様性の状況についてなど、生物多様性に関わる内容を盛り込むことを検討する。

3-4-12　香りを科学する

（1）活動目標

○樹木や花、果実の香りは受粉媒介者などを誘引し、種の繁栄に影響を与える。また、害虫に対しては、香りが忌避機能として作用し身を守る働きもある他、私たち人間に安らぎを与えるなど心身に働きかける効果もある。本時はアロマオイルの蒸留体験を行い、香りとは何か、香りの効能について理解を深める。

（2）実施概要

【スケジュール】
○6月19・25日：本校

【実施体制】
○授業実施：伊吹志津香（atelier kiki）・教諭 富山昌彦
○対象生徒 ： 3年生 自然環境類型25名
○企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】
○講師の伊吹氏より香りとは何かに関するご講義をいただいた後、校内にあるクロモジとラベンダーからアロマの有効成分を取り出す蒸留を行い、アロマスプレーの作成を行った。作成後、伊吹氏よりアロマセラピストの仕事やそのきっかけ、仕事を行ううえで大切にしている職業観に関するお話を聴いた。後日、本校教員より香りの歴史や蒸留の仕組み、香り成分である化学物質の構造に関する講義を行った。

【生徒の感想】
○「香りが百種類の成分からできていることを聴き、香りの複雑さを感じた。」
○「自然には色々な香りがあり、香りを通して、様々な情報を読み取っていることがわかった。」

【成果と課題】
○アロマスプレー作りを通して、現在の化学の体系が長い歴史の中で培われてきたことを学ぶことができた。
○香りを言語化することが難しく、生徒達は嗅いだことのない匂いに対して、単に好きな匂い、嫌いな匂いと表現していた。香りへの表現方法を、嗅覚以外の感覚（視覚や味覚など）で捉えたような表現をする訓練が必要である。

【次年度への反映】
○香りは人によって感じ方が異なるため、こちらが香りを提示するのではなく、生徒自身が好きな香りを探しその香りを探究することに加え、香りへの表現方法を深める学習を行う。

３-４-13　アウトドアの実践入門

（１）活動目標

○近年人気であるキャンプ体験は、レクリエーションや環境教育、文化体験、チームビルディングといった様々な目的で行われている。本時は、森のなかでキャンプ体験を行うことを目標に、グループに分かれてタープ設営を行った。

（２）実施概要

【スケジュール】
○７月４日：本校

【実施体制】
○授業実施：本校教員
○対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 25 名
○企画：教諭 富山昌彦

（3）活動実績

【活動内容】

○タープ設営の概要を講義した後、グループに分かれてグラウンドでタープ設営を行った。グループ全てでタープ設営が終了した後、近隣の森のなかを探索しキャンプ実習の候補地を選定した。

【生徒の感想】

○「ペグの打ち込みと糸の位置関係に気をつければ、簡単に設営できた。」

○「糸の張りが弱いとタープがすぐ倒れてしまい、立て直すのに苦労したが、皆が手伝ってくれて設営できて良かった。」

【成果と課題】

○グループ内で役割を分担しながら、設営を行っており、予定より早く設営できていた。またグループを越えて協力している姿も見ることができた。

○森でのキャンプ場所探しは、虫等の理由で嫌がる生徒が多いのではと心配をしていたが、前向きに選定している様子が見られた。

【次年度への反映】

○アウトドア実習は、森の探究科以外の普通科の実習でも実施できる内容であるため、科を越えた実習を行う。

○本時は、タープ以外のキャンプ用品の調達が間に合わなかったため、本年度中にキャンプ用品を揃え、来年度は同時期に森の中でのキャンプ実習を行えるよう準備をする。

3-4-14　赤川の底生生物の調査

（1）活動目標

○学校近辺を流れる赤川は余呉川の支流となっている川である。この赤川の上・中・下流の底生生物の観察結果から、礫や砂などの河川環境と生息する生物を比較し、河川の特徴とその生態系について調査を行った。

（2）実施目標

【スケジュール】

○7月12日：本校

【実施体制】

○授業実施：植田潤（湖北野鳥センター）

○対象生徒 ：2年生 自然環境類型25名

○企画：臨時教諭 大久保卓也

（3）活動実績

【活動内容】

〇赤川の上・中・下流で土砂サンプルを採取し、そのサンプルを観察用のバットに移し、水でよく洗った。バットの中で見つけた底生生物は、別の容器に選別・保管した。この工程を繰り返し、上・中・下流における底生生物の種類と数を調査した。

【生徒の感想】

〇「見たことのない小さな生物を多数観察できて良かった。」

〇「川の区間によって川底の様子が異なり、その違いで暮らす生物の種類が異なることがわかった。」

【成果と課題】

〇長時間の観察であったが、生徒達は根気強く観察を行い、上・中・下流の底生生物の分布を調査することができた。

〇河床の土砂の性状が、上流ではレキ、下流では砂・泥となっており、大きく異なっていた。その河床の違いが、生物の種類に影響している可能性が考えられる。

【次年度への反映】

〇上流よりも中・下流の方が生物の種類が多く、これは上流から運ばれる栄養分が関係している可能性がある。今後は時期を変えて、更なる調査を実施する。

3-4-15　大浦川の底生生物の調査

（1）活動目標

〇琵琶湖の源流である山門水源の森から流れ出す大浦川は、琵琶湖の固有種であるビワマスの産卵が盛んに行われるなど、水生生物が暮らす貴重な場所である。以前に行った赤川と同様に中流・下流に生息する底生生物と魚を調査し、河川の特徴とその生態系から森と川のつながりを見出すことを試みた。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇7月29日：大浦川

【実施体制】

〇授業実施：植田潤（湖北野鳥センター）

〇対象生徒 ：2年生 自然環境類型6名（有志）

〇企画：臨時教諭 大久保卓也

（3）活動実績

【活動内容】

〇大浦川の中・下流でたも網を用い、魚を捕獲した。捕獲した魚は、バケツにうつし、種類とその数を数える。また底生生物に関しては、赤川と同様の方法で選別を行い、種類と数を調査した。調査後、捕獲した魚や底生生物は、捕獲した場所に戻した。

【生徒の感想】

〇「市内の河川では見られない魚を多数観察でき、源流である山門水源の森とのつながりを知ることができた。」

〇「中流・下流での生物の様子が異なっており、生物の餌や水温条件による違いを感じた。」

【成果と課題】

〇魚類やトンボ類の幼虫、トビケラの幼虫など、赤川と異なる底生生物の分布が見られた。

〇魚類の分布は、中流ではカワムツ、アブラハヤが多く、下流ではウキゴリ、アユが多いという琵琶湖流入河川での一般的な分布が見られた。

〇下流では、ヤリタナゴも多く見られ、抽水植物が多く分布していることを反映した結果となった。

【次年度への反映】

〇赤川と同様に、河床の土砂の形状が、生物の種類に影響している可能性があるため赤川の調査と並行して調査を行う。

3-4-16　木材加工入門

（1）活動目標

〇近年、「木や森、人との関りを経て豊かな心を育てる」という目的で木製の製品に触れるなどといった「木育」が注目されている。そのなかで、木の命や森林環境に目を向け、「木と人との関わり」を意識することが重要視されている。本時は、実際に木材加工をすることで木の香りや手触り・見た目の良さを体感しながら、自分たちの手で作品を生み出す喜びを見出す。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇9月3・24・25日、10月9日：本校

【実施体制】

〇授業実施：浅尾年彦（株式会社 浅尾）

〇対象生徒 ：3年生 自然環境類型24名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】

〇校内設備の木材利用推進を目的に、グループごとにベンチや机、イスの作成計画を立て、エクセルにて設計図を作成した。作成にあたっては、浅尾氏よりマルノコや指金、ボール板、インパクトドライバーといった器具の使い方をご指導いただきながら行った。作成後は、ニスを塗って仕上げを行った。

【生徒の感想】

〇「マルノコで木を真っ直ぐ切ることや、木を貫通させずビス打ちをすることが難しかったが、モノづくりの大変さと楽しさを感じた。」

〇「材料のスギの色が良く、木製製品の良さを感じた。」

〇「木の種類によって硬さや重さ、作業のしやすさが異なった。実際に組み立てて座ってみて木材が沈んだりする箇所の隙間を調整するなど、自分たちで工夫できたことが良かった。」

【成果と課題】

〇昨年度実施した断熱ワークショップに続く形で、木工に必要な工具の使い方を経験し、DIYに必要な技術を身につけることができた。

〇自分たちで木製製品を作成することで木の良さを感じ、身の周りの素材に対して興味・関心を持たせることができた。

〇本時で使用した机や椅子は、各グループのオーダーをもとに浅尾さんが製材してくださった木材を使用した。すべてのグループが異なるオーダーであったため、コストが非常にかかってしまった。

【次年度への反映】

〇本時は材料費にコストがかかってしまったため、コストを下げる方法を考えるとともに、机や椅子以外の作成物も考える。

３-４-17　滋賀県の林業の現状

（１）活動目標

〇これまで、生態系の保全や地球環境の保全に、森林が大きな役割を担っていることを学習してきた。そこで、２学期より森林の役割や機能を保つ施業である林業について学習する。本時は滋賀県で林業・木材産業の振興対策を実施する県職員を講師としてお招きし、林業の概要や課題について学習する。

（２）実施目標

【スケジュール】

〇９月４日：本校

【実施体制】
〇授業実施：知田之宏（琵琶湖環境部 びわ湖材流通推進課）
〇対象生徒 ：２年生 自然環境類型 25 名
〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（３）活動実績

【活動内容】
〇健康な森を保持するために欠かすことができない森林資源の循環について学習した。
〇日本・滋賀県の林業課題について知り、「しが CO_2 ネットゼロムーブメント」など滋賀県の取組を知った。

【生徒の感想】
〇「林業の循環の必要性について学んだが、そのなかで林業従事者の数が不足していることはとても大変なことだと思った。」
〇「森の健康を保つには、伐って使うことが必要と知り、これからの木の利用方法について考えたい。」

【成果と課題】
〇大変な仕事のイメージがある林業の意義について知ることができ、その必要性と関わり方について考えることができた。
〇本校が位置するこの地域は高齢化に加え、少子化も顕著な地域である。そのため、林業の担い手を増やすためには、抜本的な改革が必要である。

【次年度への反映】
〇健康な森が少なくなった時のシミュレーションを行うなど、森が自分たちの生活にどれだけ影響を及ぼしているかを考え、今後どのように自分たちが森林と関わることができるかを考える。

３-４-18 「木育」とは何かを考える

（１）活動目標

〇滋賀県では、つなぐ「しが木育」として、ウッドスタート、やまのこ、しが自然保育支援制度、木育ビジネスへの支援などを実施し、赤ちゃんから高齢者までつながりのある事業に取り組んでいる。本時では、10/23 実施予定の木育おもちゃによる保育、11/6 実施予定の森のようちえんでの活動を目指し、講師の橋詰氏より実践内容や活動で大切にされていることを聴き、木育活動を理解し、その意義を学ぶ。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇9月11日：本校

【実施体制】

〇授業実施：橋詰純子（木育インストラクター）

〇対象生徒 ：3年生 自然環境類型24名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】

〇橋詰氏が実践されておられる木育活動を聴いた後、用意された葉を分類する簡単なワークを行い、自分たちと自然との接点について考えた。

〇簡単な分類をもとに木育活動をどのような視点で行うと良いか考えて、木育活動に対するイメージを共有した。

【生徒の感想】

〇「ムクノキはサンドペーパー、クスノキは湿布の匂いがするなど、身の回りには面白い樹木があることを知った。」

〇「自然のなかで行う活動は、五感を刺激するのに良い活動であると感じた。」

【成果と課題】

〇本時の学習で得た経験や発見の共有が、木育活動においては大切であることを体感した。

〇木育活動は、系統主義的な立場や経験主義的な立場に分類され、大人から子どもまで広い世代に適応できることがわかった。そのため、これまで体験してきた活動（炭焼き体験や断熱ワークショップなど）も木育活動に分類され、木育活動に対する敷居を下げることができた。

【次年度への反映】

〇これまで学習した木育活動をまとめたり、自分たちで取組を考案するなど、木育活動を生徒たちが発信する機会をつくる。

3-4-19 「森のようちえん」の実践にむけて

（1）活動目標

〇11月6日実施予定の森のようちえんの活動は、園児たちの興味・関心を優先させながら活動を見守る必要があるが、一方で実際の活動現場となる森では園児達にとって怪我などのリスクとなるもの（危険な生物や草木など）がある。そのリスクとなるものについて考え、園児たちが安全に過ごすために必要な整備を考える。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇9月17日：本校裏山の森

【実施体制】

〇授業実施：冨士野麻希（かえでの庭 代表）

〇対象生徒 ：3年生 自然環境類型24名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】

〇活動場所となる森のなかを散策し、グループごとに園児たちがどのような遊びを行うか、 考えた。

〇園児たちが遊ぶ際、森のなかでリスクとなるもの、またその整備についてグループごとに話し合い、全体で各グループの意見を共有した。

【生徒の感想】

〇「森の中での、危ない生き物や場所などを知ることができ、森へ入るハードルが低くなった。」

〇「森の中で園児達と遊ぶときは、大きな怪我につながらないよう、周囲を確認しながら遊びたいと思った。」

【成果と課題】

〇園児達と遊ぶ森を下見し、園児達がどのように遊ぶかを想像することで、当日の準備を行うことができた。

〇森の中では講師の声が届きにくく、森の中を歩き回る時間と集まって話を聴く時間のメリハリをつける必要がある。

【次年度への反映】

〇大きな怪我につながらないよう、木や枝を伐るなどの整備は、今回林業従事者の方にお願いすることとなった。次年度は、生徒達自ら整備を行えるよう、本授業の前に樹木の手入れの練習を行う。

３-４-20　森林整備の現場を知る

（１）活動目標

〇これまで地球環境保持のため、森林資源の活用について学習を進めてきた。今回の実習では本校近辺の森林資源に目を向け、森林探索を行うなかで、実際に森林が手入れされている現場を見学し、森林資源の活用や循環について知る。

（２）実施目標

【スケジュール】

〇９月 18 日：本校裏山

【実施体制】

〇授業実施：高橋市衛（滋賀県森林組合 伊香事業所）

〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名

〇企画：教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】

〇本校裏にある森林を森林組合の方に案内していただき、植林や伐採の様子、獣害対策などを見学して林業の現状や課題を知った。

〇胸高直径や樹高の測定を行い、森林整備・保全の方法について知った。

【生徒の感想】

〇「木の直径の測り方や木の高さの測り方を知ることができて良かった。森が整備されいたため明るくて、涼しかった。」

〇「木が高くて、静かで、空気がきれいで楽しかった。」

【成果と課題】

〇学校裏の整備された森林を散策し、整備された森の過ごしやすさを、体感することができた。

【次年度への反映】

〇次年度は新緑の季節に本時の授業を実施するなど、季節によって変化する森の移ろいを感じながら散策することを検討する。

３-４-21　森林の健康度を知る

（１）活動目標

〇地球環境の維持や森林資源の活用を有効的に行うには、人工林の適切な管理や保全が必要である。そこで本時は、森の健康度を測定することで、間伐等の効果的な森林の管理計画について考える。

（２）実施目標

【スケジュール】

〇９月 25 日：本校・本校裏山の森

【実施体制】

〇授業実施：山本綾美（里山実験室 haremori）

〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】

〇山本氏より、樹木の概要と人工林としてよく利用されるスギ・ヒノキの特性、林業の循環についてご講義いただいた。

〇講義後、裏山の森に移動し、注目した樹木の胸高直径、樹高、周囲の樹木との平均距離を測定し、間伐の必要性について考えた。そして、グループに分かれて 10m 四方に区切られた区間内で２種類の間伐方法（下層間伐･優性間伐）について、間伐する樹木の選定を行った後、グループで選定理由を発表し講師より講評をうけた。

【生徒の感想】

〇「間伐による大切さを知り、細い木、枯れた木、まっすぐじゃない木を切ればいいことがわかった。」

〇「森を健康にするための間伐方法として、色々な木の選び方があることを知った。しかしどの木を間伐するのか、選ぶのが難しかった。」

【成果と課題】

〇森の健康を保つ間伐について、その方法を具体的に知ることができ、森に対する見方をより深めることができた。

〇間伐は林業の中でも重要な施業の一つであるため、高校生にとって馴染みのない林業の一端を経験することができた。

【次年度への反映】

〇講義の中で、樹木の胸高直径、樹高、周囲の樹木との平均距離より森の健康度の算出方法を事前授業として実施する。

３-４-22　樹木の手入れを行う

（１）活動目標

〇これまで人工林の適切な管理方法について学習を進めてきた。そこで本時は、実際に枝打ちを体験し、樹木の手入れ方法を身につける。

（２）実施目標

【スケジュール】

〇10 月 1 日：本校 スギ林

【実施体制】

〇授業実施：山田薫（林業家）
〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名
〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（３）活動実績

【活動内容】

〇山田氏より枝打ちの方法について説明をうけた後、1 人 1 回枝打ちを行った。その際、ヘルメットを着用するなど安全面に十分な配慮を行った。
〇一通り枝打ちが終わった後、講師による木登り器とチェーンソーを用いた枝打ちを見学した。

【生徒の感想】

〇「木に登って枝を切るのはすごく大変な仕事だと思った。太い枝は最初に下からノコギリを入れてから切ると伐りやすいことがわかった。」
〇「枝を切ることは簡単そうに見えて意外と難しかったが、枝を切った方がいい板になることを知り、枝打ちは積極的に行うべきであると感じた。」

【成果と課題】

〇枝打ちに慣れた生徒は積極的に作業を行っており、基本的な樹木の手入れ方法を習得することができた。
〇本実習は枝打ちできる樹木が必要であるため、いくつものフィールドの確保が必要である。

【次年度への反映】

〇枝打ちできるフィールドを探し、本時と同様の内容を実施する。

３-４-23　玉切りを体験する

（１）活動目標

〇森林資源の循環利用を推進するためには、適切な森林整備を行い、木材を生産する林業に加え、木材を木材製品に加工し流通するなど木材産業が不可欠である。本時は、樹木を利用しやすい長さに揃える玉切りを体験し、樹木の活用方法を身につける。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇10 月 2 日：本校

【実施体制】

〇授業実施：山田薫（林業家）

〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（3）活動実績

【活動内容】

〇山田氏より、玉切りを行う際に使用するチェーンソーの取り扱い方法と注意点について説明をうけた。

〇1 人 1 回チェーンソーを用いて玉切りを行った。その際、ヘルメット、チャップスを着用するなど、安全面に十分な配慮を行った。

【生徒の感想】

〇「チェーンソーを使うのは力がいるものだと思っていましたが、チェーンソーの重さで簡単に木を切ることができて、驚きました。」

〇「キックバックが怖かったけど、思ったより早く切れて安心しました。」

【成果と課題】

〇林業に必要なチェーンソーを実際に使用し、切断するパワーを体感することができた。

〇チェーンソーの使用の際には細心の注意が必要であるため、チェーンソーを用いた実習について展望をもつことが難しい。

【次年度への反映】

〇玉切り体験以外に、農業現場での剪定作業の見学など、チェーンソーの用途について理解する機会を増やす。

3-4-24　木のおもちゃに触れる

（1）活動目標

〇これまで木育に関する学習を進めてきた。本時は、地産木材を使った木のおもちゃに触れ、木の質や柔らかさ、香りなどの良さを体感し、森林の整備や木材利用の意義について考える。

（2）実施目標

【スケジュール】

〇10 月 15 日：本校

【実施体制】
〇授業実施：青木栄次（株式会社浅尾）
〇対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 24 名
〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（３）活動実績

【活動内容】
〇青木氏より、木育おもちゃ「ズレンガ」の開発経緯や導入状況についてお話を聴いた後、その遊び方について演示していただいた。
〇グループに分かれて、「ズレンガ」で作品制作を行った。制作にあたっては、園児たちと一緒に「ズレンガ」を使って遊ぶことを想定して行った。

【生徒の感想】
〇「木材だけで色々なものを形作ることができて、工夫されたおもちゃであると感じた。」
〇「どの年代の人にも遊びやすいおもちゃで、高校生の自分たちでも楽しく遊ぶことができた。」
〇「木材は環境に良い素材で、普及すると良いなと感じた。組み立ては、簡単に見えたが難しく、自分の頭の固さを感じた。」

【成果と課題】
〇使用したおもちゃはシンプルな構造で、色々な動物や構造物に応用して作ることができたため、高校生も楽しく遊ぶことができた。
〇本時で使用した木育おもちゃは、レンタルでの利用であったため限られた時間での使用となり、複雑な構造物まで作ることができなかった。

【次年度への反映】
〇木育おもちゃを継続して利用するため、購入の検討を行う。

３-４-25　園児と楽しむ木のおもちゃ

（１）活動目標

〇これまで木育に関する学習を進めてきた。本時では、こども園の園児たちと一緒に木のおもちゃで遊ぶことで、園児たちに木の良さを伝えるとともに、高校生がこどもの発達や知的な刺激を与えることに積極的に関わることを目指す。

（２）実施目標

【スケジュール】
〇10 月 16 日：長浜市立きのもと認定こども園

【実施体制】
〇授業実施：本校教員、長浜市立きのもと認定こども園 保育士
〇対象生徒 ： 3 年生 自然環境類型 24 名、長浜市立きのもと認定こども園 31 名
〇企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

（3）活動実績

【活動内容】
〇こども園にて挨拶後、園児たち用の名札（木製）の作成を行った。
〇名札作成後、木のおもちゃ「ズレンガ」や、滋賀県木材協会さまよりレンタルした、木育おもちゃ（滑り台・積み木・パズル・ままごとセット）を使って、園児たちが主体的に遊ぶサポートを行った。

【生徒の感想】
〇「子供たちは何も言わなくても、自分たちで遊んでいて発想力が豊かだと感じた。」
〇「こども園の先生方は、園児たちへの声掛けも工夫されており、自分もできる限り褒めたり、元気な声で声掛けすることを心がけた。」
〇「子供達と上手く接することができるか不安だったが、皆元気で楽しく過ごすことができて良かった。」

【成果と課題】
〇木育おもちゃを使いながら、高校生は自分達で考えながら園児達の活動をサポートしていた。
〇園児達は思いのまま活動していたため、生徒によっては遠慮をしてしまい、思うような活動ができていない生徒も見受けられた。
〇先日の高校でのおもちゃ体験と同様、本時もレンタルでの利用であったため、園児達にとっても限られた時間での利用となってしまった。

【次年度への反映】
〇木育おもちゃの継続利用に向けて、こども園と協議しながら、レンタル方法の模索や購入の検討を行う。

３-４-26　主伐見学

（１）活動目標

〇これまで森林資源の活用に関する学習を進めてきた。特に滋賀県では、戦後の昭和 20～40 年代の拡大造林で植林された森林が伐期を迎えており、森林資源を収穫して再造林を実施する主伐・再造林の施策がとられている。本時では、木材利用循環のなかの主伐現場を見学し、滋賀県の森林・林業の特徴や現状を知る。

（２）実施目標

【スケジュール】

〇10 月 30 日：黒田地区　アチラ山

【実施体制】

〇授業実施：滋賀県森林組合 伊香事業所、川南林業

〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵

（３）活動実績

【活動内容】

〇主伐の現場にて、講師の方々から林業の魅力についての話を伺った後、ハーベスターやグラップルといった林業機械やチェーンソーを用いた主伐・収穫の様子を見学した。

【生徒の感想】

〇「林業機械での伐採は、人の手で伐採するより素早く、安全面でも良いと感じた。」

〇「切った木が倒れる瞬間の迫力が凄く、機械を用いると長くて太い木も簡単に切ることができていた。」

〇「主伐をしていた木は、60 年前に人の手で植えられた苗木という話を聴き、先を見据えた林業の一端を見ることができた。」

【成果と課題】

〇林業の主たる施業である主伐・収穫現場を見学し、これまで体験した間伐・枝打ちと合わせ林業の一連の施業を知ることができた。

〇主伐は森林組合の方々が長い見通しを持った計画のもと実施されるため、見学できたこと自体が幸運であった。実際の現場見学以外の主伐学習を検討する必要がある。

【次年度への反映】

〇主伐現場の見学フィールドを探しながら、動画視聴など主伐のライブ感を意識した学習方法の検討を行う。

３-４-27　滋賀県立大学 環境科学部 訪問

（１）活動目標

○これまで、森林資源の活用やその保全・管理について学習を進めてきた。本時は、持続可能な農林水産業資源の生産と利用を課題に研究を行う滋賀県立学を訪問し、大学での学びを知るとともに、高校卒業後の進路選択の一助とする。

（２）実施目標

【スケジュール】

○10 月 30 日：滋賀県立大学、圃場実験施設

【実施体制】

○授業実施：講師 籠谷泰行、圃場実験施設長 原田英美子

○対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名

○企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）活動実績

【活動内容】

○講義室にて、講師の籠谷氏から琵琶湖集水域と森林生態系の概要について講義を聴いた。

○講義後、施設長の案内のもと、水田や畑、動物実験・バイオマス棟を見学し、施設で行われている研究の概要を聴いた。

【生徒の感想】

○「森林には様々な問題が起こっており、解決するために色々な調査が行われていることを知った。」

○「人が手入れをしないと生き永らえない植物もあれば、人が手を出すことで生命が途絶える植物があることを知り、植物に興味を持つことができた。」

○「森林について、学校で学習したこともあったが、新たに学んだこともあり、大学での学びを想像することができた。」

【成果と課題】

○講義や見学を通して、高校の学びと大学の学びのつながりを実感することができた。

○生徒の大半が大学を訪問したことがないため、大学生活のイメージを持たせ、高校卒業後の進路選択の一つとすることができた。

【次年度への反映】

○次年度は、大学生達から大学での学びや研究内容の紹介など、大学生との交流もプログラムの中に入れることを検討する。

３-４-28　森のようちえん実習

（１）活動目標

○これまで、木育に関する学習を進めてきた。本時は、森の中で園児と遊び、自然の中で遊ぶことの心地よさを体感し、森林フィールドの新しい使い方や教育環境の現場として森林環境がどのような効果があるのかを考える。

（２）実施目標

【スケジュール】

○11 月 6 日：学校裏山の森

【実施体制】

○授業実施：本校教員、長浜市立きのもと認定こども園 保育士

○対象生徒 ： ３年生 自然環境類型 24 名 、長浜市立きのもと認定こども園 園児 31 名

○企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】

○高校生と園児たちが挨拶後、園児たちに対し、これから遊ぶフィールドはスギが植林されており、このスギは人の手で大切に育てられていたこと、10 月 16 日に遊んだ木育おもちゃに使われていることを伝える。

○森の中で遊ぶ際は、園児たちの安全に注意を払いながら、園児の自由で想像力豊かに遊ぶことを大切にして、サポートすることを心掛けた。園児たちは、森のなかで生物を探したり、枝で遊んだり、高校生と鬼ごっこをしたりと、楽しく過ごしていた。

【生徒の感想】

○「樹木の種類を知ると、その性質に応じた遊び方ができると感じたため、色々と学習を進めて次の機会に活かしたい。」

○「園児達の要望についていくのが大変だったが、仲良く過ごせるよう、園児に寄り添いながら活動することができた。」

○「孤立する園児もなく、皆が楽しく過ごせていた。これからも相手の気持ちを汲み取りながら過ごしたい。」

【成果と課題】

○園児が怪我することなく、無事活動を終えることができた。森の中で、園児たちは楽しく過ごしており、終了時間となっても帰りたがらない園児がいた。

○本時のこども園との協働活動は、２回目ということもあり高校生と園児たちは最初に比べ、かなり打ち解けた様子であった。1 回目のこども園の訪問では園児と接するのに時間を要した生徒も、本時はスムーズに園児のサポートを行うことができており、周囲を見ながら活動する姿が見られた。

○活動できる森林フィールドが少ないことや、その整備には知見と時間が必要である。また、共に遊ぶ高校生や指導する教員の自然体験や自然への理解が乏しいため、自然の良さや遊び方を伝えきれていない課題がある。

【次年度への反映】
○木や枝を伐るなどの整備を高校生が行うことに加え、春や秋など年間を通じて季節感を感じられるような森林フィールドでの実習を検討する。

３-４-29　土壌調査

（１）活動目標

○これまで、森林生態系に関する学習を進めてきた。本時は、地球環境や森林生態系を形成するうえで重要な役割を果たす土壌について理解を深める。

（２）実施目標

【スケジュール】
○11 月 20 日：本校

【実施体制】
○授業実施：飯村康夫（滋賀県立大学 講師）
○対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名
○企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）活動実績

【活動内容】
○土壌の構造や性質について、飯村氏より講義を受けた。
○学校裏山に移動後、異なる３地点の土壌の色や感触を観察し、３グループに分かれて各地点の土壌中の木の根を数えた。

【生徒の感想】
○「土が色々な成分から成り立っていることを初めて聴き、驚く内容であった。」
○「木の根を数えるのは大変だったが、各層に含まれる養分の量が異なることが理解できた。」

【成果と課題】
○森の機能を果たすうえで欠かすことができない土壌の講義・実習を通じて、土壌を含めた森づくりについて考えることができた。
○土壌に関する学習をこれまで実施しなかったため、生徒によっては土壌の話の内容についていけなかった。

【次年度への反映】
〇実習の前に土壌の重要性や働き、森とのつながりについて事前学習を行い、土壌に関する学習機会を増やす。

３-４-30　地域で取り組む環境問題

（１）活動目標

〇わが国で 2050 年までに地球温暖化の防止を目的とした「カーボンニュートラル」を目指すことが宣言され、再生可能エネルギーの利用など二酸化炭素の排出を抑制することは急務となっている。本時は、環境に配慮した商品事業を展開し、地域での再生可能エネルギー循環事業に取り組んでいる企業を訪問することを通して、私たちの生活とエネルギーの関わりを考える機会とする。

（２）実施目標

【スケジュール】
〇12 月 14 日：髙橋金属株式会社 本社

【実施体制】
〇授業実施：髙橋康之（髙橋金属株式会社 代表取締役社長）
〇対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名
〇企画：教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】
〇高橋氏より、会社紹介と概要、地域での再生可能エネルギー循環事業についての講義を聴いた。
〇高橋氏の講義後、２班に分かれて工場見学(超塑性加工を行う工場・環境に配慮した商品製造を行う工場)を行った。見学後は、専務より環境に配慮したものづくりに関して、お話を聴いた。

【生徒の感想】
〇「会社の理念に沿って目標を立て、皆さんで社会をより良くするために活動されていることを知りました。モノ作りは環境にとって害を与えざるを得ないものだと思っていましたが、髙橋金属さんは環境に配慮したものづくりで社会課題に立ち向かっておられ、環境問題は自分たちの工夫で解決できることを知れて良かったです。」
〇「今の世界では地球温暖化が進んでいるが、髙橋金属さんのような理念をもって環境改善に挑んでいる方はかっこよいと感じた。世界の環境を維持するためには、一人ひとりの地球温暖化への意識、他人事にしない思いが大切であると思った。」

○「単にモノづくりを行うだけでなく、作った後のこと、環境に良いものを考えておられた。また、自分の地域のなかでエネルギーを創り、そのエネルギーを使えるよう取り組まれていることも知ることができて良かった」

【成果と課題】
○理念を持ち、活動を実践する地元企業を見学し、社会人として必要な心構えや現在の学びをどのように社会に繋げるかなど、社会人としての自覚を促すことができた。
○他人事で済ませてしまう環境問題も、地域で真剣に取り組まれている実践者を目の当たりにしたことで、環境問題に対する諸課題について取り組む意義を再認識することができた。

【次年度への反映】
○実習後、環境問題に取り組む企業や活動、政策を調べ、環境問題を通じた社会活動や企業活動について考える機会を設ける。

３-４-31　長浜バイオ大学 オルガネラ構造機能研究室 訪問

（１）活動目標

○これまで来年度新設の「森の探究科」の先行授業を行ってきた。本時は、滋賀県北部の豊かな自然を題材に様々なユニークな取組を行なわれている長浜バイオ大学を訪問し、その取組や大学での学びを知り、高校卒業後の進路選択の支援の機会とする。

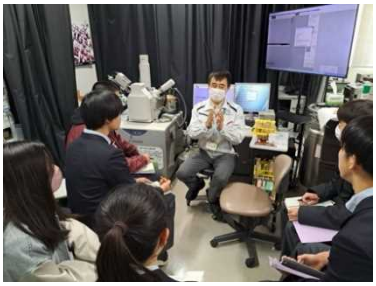
（２）実施目標

【スケジュール】
○１月 14 日：長浜バイオ大学

【実施体制】
○授業実施：奈良篤樹（長浜バイオ大学 准教授）
○対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名
○企画：教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】
○３班に分かれて実習を実施。それぞれ電子顕微鏡を用いたサンプル（化石・お菓子・キノコ）の観察、森の VR 体験、大学生による研究室紹介を行った。
○実習後は班ごとに大学生と交流を行い、大学生活や残りの高校生活の過ごし方などを聴いた。



【生徒の感想】
○「トッポの観察では、チョコとクッキーの部分で空洞の大きさ、数が異なっており、その違いで食感が異なることを知って、企業さんの工夫を知ることができた。」
○「VR は初めて体験したが、意外と楽しくて、色々なシチュエーションに使えそうだと思った。」
○「様々な顕微鏡や細胞の冷凍庫など、細胞を扱う実験の雰囲気を感じることができた。」

【成果と課題】
○電子顕微鏡や VR など高度な最新技術を体感し、身の回りにあるものの見方やこれまでの学びを深めることができた。
○大学生活や研究室の雰囲気を見ることで、進学の選択として大学を候補の 1 つとすることができた。

【次年度への反映】
○電子顕微鏡で観察を行うサンプルを設定したテーマで準備し、単なる観察にとどまらない解釈や表現方法としての電子顕微鏡の利用を試みる。
○地域の小中学生に対して森林環境への保全や啓発など大学生と協働した授業づくりを行う。

３-４-32　断熱改修ワークショップ

（１）活動目標

○現在、気候変動の影響が世界各地で顕在化しており、様々な主体がそれぞれの立場で対策を加速することが必要である。地域においても取組を行うことが重要であり、長浜市において策定された「ながはまゼロカーボンビジョン 2050」では、気候変動対策が次世代への移行戦略と位置づけられており、すでにゼロカーボンに向けた社会の変化を地域課題解決のためのチャンスに変えるための活動が活発化している。こうした動きを受け、本校において、生徒が省エネや断熱の重要性を学ぶ機会をつくることを目指し、高校生自身が教室の断熱工事を行う DIY ワークショップを実施する。本ワークショップを実施することで、学校の省エネを進めることのみならず、教室の学習環境を向上させること、学生の環境教育やキャリア教育の機会にすること、地域工務店や地域環境事業者と学生との交流の機会にすること等、多くの効果を期待して実施する。

（２）実施目標

【スケジュール】
○1 月 27 日：本校

【実施体制】
○授業実施：清水広行（清水建設工業）、株式会社シガウッド、桐畑孝佑（長浜市環境保全課）
○対象生徒 ： 2 年生 自然環境類型 25 名
○企画：教諭 富山昌彦

（３）活動実績

【活動内容】
○４班に分かれて作業を実施。関係者の紹介、ラジオ体操を行った後、講師よりインパクトドライバーや脚の使用方法や注意事項を聞いた後、班ごとに二重窓の組み立てを行った。

○二重窓は、3 個の木枠を組み立ててビス打ちにより固定後、ポリカーボネートを２枚はめ込み、4 個目の木枠を被せビス打ちにより完成させた。

【生徒の感想】
○「最初ビス打ちの作業は緊張したが、慣れるとビス打ちの作業が楽しくなった。」
○「工務店の方が、丁寧に教えてくださったので、落ち着いて作業することができた。」
○「自分たちが作成した窓が、実際に断熱効果があるのか調べてみたいと思った。」

【成果と課題】
○身近に感じることが難しい省エネ対策や断熱対策として、手軽に効果が期待される二重窓の作成を自分達で行うことができ、その方法について具体的に知ることができた。
○今回の断熱工事は、教室が冷え込む冬場だけでなく、暑くなる夏場にも効果が期待できる。改修前後で、体感温度にどのような変化があったか、今後検討を行う。
○本実習は、材料費や人件費などの多額の費用が必要であり、実習の継続性確保に課題がある。

【次年度への反映】
○今回の取り組みを、生徒たち自身が普段の生活に活かすとともに、その体験と成果を発信する。
○今回の断熱改修の取り組みを、本校以外に広げ、環境教育の実践と普及を行う。

３-４-33　持続可能な社会を考える

（１）活動目標
○地球温暖化や生物多様性の危機が取り沙汰されているなか、これからの私達は地球環境に配慮した持続可能な社会を構築する必要がある。かつての日本人は、森などの自然の循環に合わせた暮らしを行っており、各村々で団結した自治を構築していた。これらの暮らしについて確認しながら、人類と地球が共存するためには、どうすれば良いか、何ができるかを考える機会とする。

（２）実施概要
【スケジュール】
○２月 12 日：本校

【実施体制】
○授業実施：渋沢寿一（NPO 法人共存の森ネットワーク 理事）
○対象生徒 ： ２年生 自然環境類型 25 名
○企画：臨時教諭 大久保卓也

（３）実施実績

【活動内容】

〇これまで様々な保全活動を実践されてきた渋沢氏より、事例をご紹介いただきながら、人類と地球の共存や持続可能な社会に対して、私たちはどのように取り組んでいくべきかを考えた。

【生徒の感想】

〇「昔と今では生活様式が大きく異なるなかで、今の生活を次の世代へと託さなければならない。地域の人たちの為と思った行動も、世界から見ると環境問題につながっていることや食糧問題につながっていることを知り、これからは環境問題のことを考えながら暮らしたいと思った。」

〇「技術の進歩によって、昔と今では「働く」ことの定義が変化したことがわかりました。現代は生きるために働くという社会ではなく、お金中心の社会になったことで社会と環境のバランスが乱れ、その結果地球が破壊される。その原因が、私達人間にあるという話を聴いて悲しくなりました。現代には、様々な課題がありますが、それらに対して私なりの考えを出せるようこれからの人生を過ごしたいです。」

〇「豊かになった犠牲に、地球の環境が破壊されていることを知り、どうすれば良いかわからなくなった。」

【成果と課題】

〇令和８年度に開講予定の「持続可能な社会」に向けて先行授業を行うことができた。本講義において、持続可能な社会は人間の心の有り様であることを学習し、現代の社会に一石を投じていただいた形となった。答えのない問いに悩む生徒が多かったが、地球環境や日々の暮らしに目を向けようとする姿が見られた。

〇「持続可能な社会」に向けての議論は、テーマや内容が広いため、内容を精査して行う必要がある。

【次年度への反映】

〇人間の精神面に関わる内容であったため、これまでの社会背景と照合しながら、持続可能な社会に向けた活動の整理を行う。

３－５　地域をフィールドにした探究的な学び

地域をフィールドに、「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究を行う魅力的なカリキュラムの開発を目的として、類型での授業や総合的な探究の時間の中で様々な活動を実施した。

３-５-１　３年総合的な探究の時間
「住み続けられるまちづくりとは～防災の観点から考える～」

（１）活動目標

〇長浜市の過去の災害の被害状況の認識とその反省に基づく防災意識や取組の意義を知る
〇地域社会の一員として、災害に備えた安全なまちづくりの担い手としての自覚をし、取り組んでみる

（２）実施概要

【スケジュール】

〇９月 24 日：木之本スティックホール
〇10 月８日：本校（自然環境類型・地域文化類型）、長浜市役所（特進類型）、
　　充満寺・西野水道（スポーツ健康類型）
〇10 月 11 日 ： 美浜原子力 PR センター、あわら北潟風力発電所（特進類型）
〇11 月 21 日 ： 木之本小学校（スポーツ健康類型）
〇10 月１、３、８、10、15、17、22、24、29
　11 月５、７、19、21、26 日
　　：グループに分かれて探究学習を実施し、発表資料を作成
〇12 月 18 日：発表会の実施

【実施体制】

〇授業実施：伊香高校教員 16 名、コーディネーター 副島拓歩
〇対象生徒：３年生 99 名
〇企画：コーディネーター 副島拓歩、教諭 富山昌彦、教諭 脇阪博也、臨時教諭 大久保卓也
〇協力：
　９月 24 日　杉江氏（長浜市 防災危機管理局 防災指導員）、
　　前田氏（長浜市社会福祉協議会・食育防災アドバイザー）
　10 月８日　熊畑氏・上村氏（自衛隊 滋賀地方協力本部 彦根地域事務所）、
　　前田氏（長浜市社会福祉協議会・食育防災アドバイザー）、
　　松橋氏（長浜市 都市計画課）、杉江氏（長浜市 防災危機管理局）、
　　西野氏（大千山 充満寺）、成田氏（郷土史研究家）
　10 月 11 日 美浜原子力 PR センター
　11 月 21 日 長浜市立木之本小学校

（３）活動実績

【活動内容】

〇防災をテーマに、住み続けられるまちづくりとは何かを考えた。初回オリエンテーションのみ学年全体で実施し、以降の活動については４類型（地域文化・スポーツ健康・自然環境・特進）に分かれて実施した。①２年間の類型での学びを活かして、自分やまわりの人の命を守る方法を考えること、②防災を通じて、自身がまちづくりの担い手であるという自覚を持

つことを目的として実施した。

○４類型ごとのテーマは以下の通り。

地域文化類型　　：１週間生き延びるための防災食メニューの開発
スポーツ健康類型：初等教育における防災学習の課題の分析
自然環境類型　　：アウトドア用品を活用したサバイバル術の検討
特進類型　　：災害に負けないクリーンで持続可能な電気供給方法の検討

（長浜市防災危機管理局杉江様、長浜市社会福祉協議会前田様より全体オリエンテーション）

（地域文化類型：防災食に関する調理実習）

（スポーツ健康類型：木之本小学校と連携した防災スポーツの開発）

（自然環境類型：自衛隊の方々によるサバイバルに関する講義・実習）

（特進類型：風力・原子力発電所訪問（左・中）、本庁にて原子力災害に関する講義（右））

【生徒の感想】

○地域文化類型「実際に防災食を調理して食べてみた体験が一番印象に残りました。お皿を使わずに耐熱の袋で調理して試食しました。災害時は難しくて複雑な工夫をした調理をしないといけないかなと思っていました。しかし、知識さえあれば意外と簡単だということを学べて良い体験になりました。」

○スポーツ健康類型「防災とスポーツを掛け合わせたことで、小学生が楽しみながら防災というテーマに親しむ機会を作ることができました。小学生に伝えたいことをまとめるなかで、自分自身も防災に対して調べるきっかけになりました。」

○自然環境類型「災害時、水を自分たちで確保できるか調べました。濾過装置を作り、水がどれだけ綺麗になったか調査しました。綺麗に見える木之本地域の山水も動物による菌が混ざっている可能性を知り、こんなところでも獣害の話が出てくるのかと思い驚きました。水を中心とした生態系保全の大切さを理解した機会になりました。」

○特進類型「色々な発電のメリットデメリットを知ったことで「こうしたら良いのに」という言葉を軽く言えなくなりました。専門的な大人たちと同じように考えるということで、電力問題をより深く考えることができました。家庭内でできる工夫を検討していきたいです。」

【成果と課題】

○①これまでの類型学習を防災の視点から見た上でのフィールドワーク、②実習をもとに仮説を定義、③仮説を検証するための実習、④学びの言語化・まとめ、という流れで実施したため、テーマへの深い理解を促すことが出来た。

○自然環境・地域文化類型で行ったグループ活動では、グループごとに成果物や活動の目標を自己決定することで主体的な活動を促すことが出来た。逆に生徒にとってテーマが複雑だった特進・スポーツ健康類型については、教員側が活動の舵を取ることで密度の濃い活動を実施できた。

【次年度への反映】

〇類型授業の学習内容が充実したことで、類型授業と総合的な探究の時間を教科横断的に実施することができた。今後も横断授業をより活発に実施するため、各教科・類型授業の位置付けや身につける資質・能力を明らかにすべきである。

〇活動の目標を生徒自身で決め、自走していくグループ活動の進め方が、生徒の課題解決力・自己実現力を伸ばす上で本来理想である。１、２年のうちから複雑なテーマに対しても自身で問いを立て活動を自己決定していく力を総合的な探究の時間や類型の授業で養っていく必要がある。

３-５-２　自己理解探究・ゲストトーク　「地域で暮らす人の話を聞く」

（１）活動目標

〇「幸せの４因子」をもとに自分が大切にしている価値観を理解する。

〇地域で暮らす人が大切にしている価値観を理解する。

〇地域で暮らす人との対話を通じて、自分が大切にしている価値観をより深く理解する。

（２）実施概要

【スケジュール】

〇10 月 18 日 ～ 11 月 22 日：本校

【実施体制】

〇授業実施：伊香高校教員９名、コーディネーター 副島拓歩

〇対象生徒 ： １年生 86 名

〇企画：コーディネーター 副島拓歩、教諭 富山昌彦

〇協力：中村氏（長浜市地域おこし協力隊）、冨士野氏（さざなみ整形外科 理学療法士）、
前田氏（食育防災アドバイザー）、杉江氏（長浜市 防災危機管理局 防災指導員）、
熊畑氏（自衛隊 滋賀地方協力本部 彦根地域事務所長）、竹内氏（フォトグラファー）

（３）活動実績

【活動内容】

〇自分がどういう時にワクワクするのか、モチベーションが高まるのか、何が自分にとって大切な価値観なのかを理解することで、これからの様々な高校生活を充実させることができる。慶應義塾大学前野隆司教授の「幸せの４因子」を切り口に、どういう時にモチベーションが高まるのか、①過去の自己の経験を言葉にすること、②他者がどう考えているかを理解することを通して、より自己理解を深めることを目的とする。

○授業で使用したワークシート（一部抜粋）

1年 総合的な探究の時間 | 自分が大切にしている価値観を知る

組：
出席 番号：
名前：

0 | 「自己理解探究」の概要

(1) テーマ　自己理解探究
└これからの高校生活、社会に出てから活躍するため、自分の価値観への理解を深める
└どういった大人になりたいか、現状の自分の考えを言葉にする

(2) 授業実施の流れ

10月25日	幸せの4因子をもとに、過去を振り返りながら自分の価値観を知る
11月8日	地域の方とのクロストークの準備 └質問作成、対話の練習をします
11月22日	地域の方とのクロストーク └地域の方の価値観を知り、自分の価値観を見つめ直します

1 | 「幸せ」とはなんだろう（well-being学）

1. みなさんはどういう大人になりたいですか？どのような人生を送りたいですか？

2. 幸せ・幸福・happy 違いは？ それぞれの意味を考えよう

幸せ

幸福

happy

3. 幸せな人生を過ごすには、何がの要だと思いますか？

1

1年 総合的な探究の時間 | 自分が大切にしている価値観を知る

組：
出席 番号：
名前：

幸せの4因子

人間は、どのようなときに幸せを感じるのか、それを明らかにするために、慶應大学 前野隆司氏の研究グループが調査したところ、4つの因子の存在が浮かび上がりました。

幸福度を向上するには、「自己実現と成長（やってみよう因子）」、「つながりと感謝（ありがとう因子）」、「前向きと楽観（なんとかなる因子）」「独立とマイペース（ありのまま因子）」の4つの価値観を高めることが有効であることが判明しました。

これからの時間では、みなさんの中にある上記4つの価値観を考えながら「自分」について理解を深めます。

参考文献：『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』（2013、講談社）

2 | 幸せの4因子をもとに、自分の価値観を知ろう

1. やってみよう！因子（チャレンジする原動力）

1-1. エピソードとその時の感情を書こう

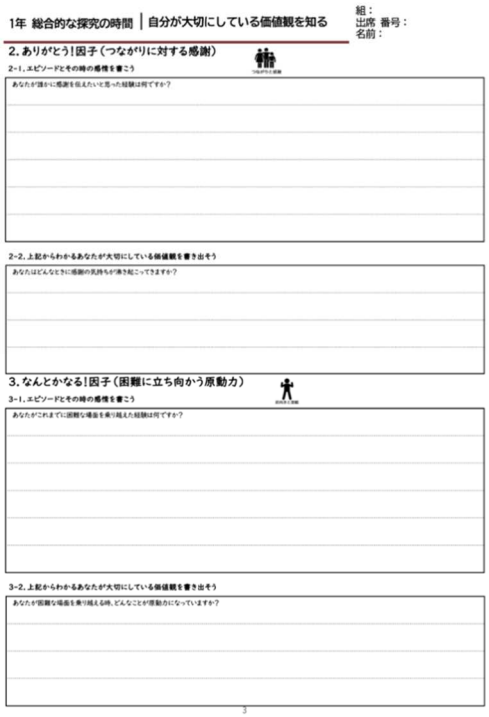
あなたがこれまでにチャレンジした経験は何ですか？

1-2. 上記からわかるあなたが大切にしている価値観を書き出そう

あなたは何かに挑戦する時、どんなことが原動力になっていますか？

※全部の内容を細かく書けなくても大丈夫。自分の現在地を確認するための時間です。
このような4つの項目があるということを覚えておきましょう。

2



1年 総合的な探究の時間 | 自分が大切にしている価値観を知る

組：
出席 番号：
名前：

2. ありがとう！因子（つながりに対する感謝）

2-1. エピソードとその時の感情を書こう

あなたが誰かに感謝を伝えたいと思った経験は何ですか？

2-2. 上記からわかるあなたが大切にしている価値観を書き出そう

あなたはどんなときに感謝の気持ちが湧き起こってきますか？

3. なんとかなる！因子（困難に立ち向かう原動力）

3-1. エピソードとその時の感情を書こう

あなたがこれまでに困難な場面を乗り越えた経験は何ですか？

3-2. 上記からわかるあなたが大切にしている価値観を書き出そう

あなたが困難な場面を乗り越える時、どんなことが原動力になっていますか？

3

1年 総合的な探究の時間 | 自分が大切にしている価値観を知る

組：
出席 番号：
名前：

4. ありのままに！因子（自分らしさの条件）

4-1. エピソードとその時の感情を書こう

あなたが自分らしくいられると思った経験は何ですか？

4-2. 上記からわかるあなたが大切にしている価値観を書き出そう

あなたがありのままに、自分らしくいられるときはどんなときですか？

5. 4つの因子を分析してみて、今週の行動に活かしたいことを書こう

4

【生徒の感想】

○「とりあえずやってみる、行ってみるということがすごく良いことだと思った。何事も挑戦だと思うので、とにかく新しいことに触れて挑戦・失敗・振り返りを意識して実践してみたい」

○「失敗からの立ち直り方を真似したいと思いました。私はなかなか立ち直れないので、気持ちの整理をしっかりしようと思いました。」

【成果と課題】

〇授業の事前準備として、ゲストと生徒には人生グラフを描いてもらった。ゲストと生徒が同じ体験をした状態で授業に臨んだため、生徒はただ話を聴くのではなく、積極的に質問することができた。

〇ゲストの方には、対象生徒の人数・クラスの雰囲気・進路選択の検討状況のみ伝えていた。授業実施後ゲストの方より、「生徒に関する情報提供が不十分だったため、生徒への見立てを持つことができず、限られた時間の中で狙いを絞った話をすることが出来なかった」という声を頂いた。

【次年度への反映】

〇事前に生徒が描いた人生グラフをゲストの方にお見せする。生徒がどのような強みを持ち、どのような悩みを抱えているのかを把握してもらい、ゲストの方が話の狙いを持ちやすくする。

〇教員は生徒の実情を把握している存在である。各ゲストトーク会場を担当する教員が、対話・質疑応答の際、深く質問すべき箇所を生徒に示すことで、充実した対話が可能となる。各ゲストトーク会場を担当する教員にどのような役割が求められているのか、明示する必要がある。

３-５-３　キャリア企画 2024 クロストークセッション

（１）活動目標

〇地域で働く大人の話を聞き、仕事をすることへの理解度を高める。

〇将来の仕事を考える時の不安を解消し、仕事のやりがいについて考える。

（２）実施概要

【スケジュール】

〇12 月６日：本校

【実施体制】

〇授業実施：伊香高校教員９名、コーディネーター 副島拓歩

〇対象生徒 ： ２年生 81 名

〇企画：コーディネーター 副島拓歩、教諭 富山昌彦

〇協力：西村氏（有限会社つるや)、佃氏（大音特殊生糸組合)、
壷坂氏(長浜市地域おこし協力隊)、冨岡氏(山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会)、
山本氏（里山実験室 HareMori)、植田氏（湖北野鳥センター)、森氏(元美容部員)、
横関氏(湖北地域消防本部 米原消防署)、中川氏（きのもと認定こども園)

（３）活動実績

【活動内容】

〇２年生ではキャリア教育の推進にむけて、分野・業種別説明会やオープンキャンパスへの参加推奨を行い、自身の関心のある分野や業種について理解を深めている。今回はキャリア企画 2024 と題して、類型・地域連携授業でご来校頂いた方々をお招きし、地域で仕事をすることや、今後求められる新たな価値観について考える機会を設けた。

○授業で使用したワークシート（一部抜粋）

1年 総合的な探究の時間 | ゲストトーク

組：
出席 番号：
名前：

ゲストトークの目的とゴール

目的：
地域の大人の方の価値観を知り、自分の価値観への理解を深める。
ゴール：
・地域の方の話を聞き、似ている部分、真似したい部分を見つけられている
・話を聞いた上で、新たにやってみたいことを見つけることが出来ている

ゲストトークの流れ	
13:30-13:35（5min）	今日の流れ、目的の確認
13:35-13:45（10min）	ゲストのプレゼンを聞く（1人目のゲスト） ・現在行われていること ・ゲストの方の人生、活動グラフを聞く
13:45-13:53（8min）	・3~4人の班ごとで感想を共有する ・質問内容をまとめる
13:53-14:08（15min）	質問・感想共有タイム
14:08-14:18（10min）	休憩 （ゲストの交代、席の移動） （チャイムのタイミングとは異なる形）
14:18-14:28（10min）	ゲストのプレゼンを聞く（2人目のゲスト） ・現在行われていること ・ゲストの方の人生、活動グラフを聞く
14:28-14:36（8min）	・3~4人の班ごとで感想を共有する ・質問内容をまとめる
14:36-14:51（15min）	質問・感想共有タイム
14:51-15:11（20min）	振り返り
15:11-15:20（目白 9min）	

1 | ゲストトークにむけて準備をしよう

憧れどういうことをやっている人ですか？

自分と似ていそうな部分はどこですか？

当日どんなことを聞いてみたいですか？

1

1年 総合的な探究の時間 | ゲストトーク

組：
出席 番号：
名前：

2 | ゲストトーク

| ゲストトーク1人目

メモ

自分と似ていると思った部分は？

マネしたいと思ったことは？

ゲストの方に聞いてみたいことは？

2

【生徒の感想】

○「なるようになる。最初はその仕事をするつもりがなくても身を任せれば自分のやりたいことが見つかるということ。受け身な姿勢ではなく自ら見つけていくのだという姿勢が大切。また大学や専門学校でやりたいことを見つけることが大切だとわかり、安心した。」

○「自分はこれから自分にあった楽しい仕事につけるのか、不安でしたが、様々なことを経験して挑戦して、失敗・反省を繰り返していけば良いのかなと思いました。その結果、後悔しないようにしていきたいです。」

【成果と課題】

〇類型・地域連携授業でお世話になった方々にご来校いただき、クロストークを行った。お互いの雰囲気を把握した上で授業に望むことが出来たため、双方向的に会話を行うことが出来た。

〇生徒の視野を広げるゲストの方との偶発的な出会いも意識し、どのゲストの話を聞くかの割り当ては教員側で決めた。終了後ゲストより、「興味のある子と興味が薄い子の差を感じた。興味のある子は質問したがっていたようだが、興味が薄いまわりの子たちの目を気にして質問が出来ていない様子だった」という声を頂いた。

【次年度への反映】

〇今回の授業の狙いは、自身に関心のある職業や分野に対しての解像度を上げることだった。生徒の目的意識を高めるためにも、自身でどのゲストの話を聞きたいか決定させる必要がある。また実施後、生徒同士で学びを共有する時間を設けることで、自身が聞くことができなかったゲストの方の話を間接的に聞くことが可能となれば、視野を広げるための学びも両立できる。授業の狙いに合わせた授業企画を検討すべきである。

３-５-４　内湖で体験するマリンスポーツ

（１）活動目標

〇滋賀県の自然環境を考える上で欠かすことができない琵琶湖でのアクティビティを行い、滋賀県の豊かな自然環境と私たちの生活が密接に繋がっていることを学ぶ。今年度は、地域に根差したスポーツの実践と探究を目的に、自然との共生と生涯スポーツの意義や必要性について考える。

（２）実施概要

【スケジュール】

〇５月 22 日：近江八幡市安土Ｂ＆Ｇ海洋センター

【実施体制】

〇授業実施：伊香高校教員２名、滋賀県カヌー協会指導者
〇対象生徒 ： ２年生　スポーツ健康類型 23 名
〇企画：教諭 富山昌彦
〇協力：近江八幡市安土Ｂ＆Ｇ海洋センター

（３）活動実績

【活動内容】

〇近江八幡市にある西の湖にて体験を実施。講師よりカヌー競技の基礎知識や自然環境の楽しみ方を聞いた後、安全講習を行った。安全講習後は、実際にカヌー体験を行いその魅力を体感した。

【生徒の感想】
○「最初は怖かったが、慣れると速く漕いだり、左右に曲がったり、ブレーキをかけたりと上手くカヌーをコントロールすることができ、楽しくカヌーを体験できた。」
○「カナディアンカヌーという競技用カヌーの操舵は非常に難しく、プロの方の凄さがわかった。」

【成果と課題】
○滋賀県における貴重な水資源を生かしたマリンスポーツを行うことで、地域の魅力を活かした生涯スポーツを体験することができた。
○昨年度と同様、西浅井などの地元民間施設での実施を検討したが、コストが合わず見送ることとなった。

【次年度への反映】
○体験活動を行うだけでなく、マリンスポーツの魅力を発信するとともに、コスト面を抑えた体験活動となるよう、調整を行う。

３-５-５　木之本街散策
（１）活動目標
○本校が位置する木之本は、かつて鳥居本北より米原・長浜を経る「北國街道」と関ヶ原から春照・小谷を経る「北国脇往還」が交わる宿場町であり、かつ地蔵院の門前町であったことから、幕末の長浜の繋栄にともなって多くの人が行き交った歴史がある。そこで本時では、「北國街道」を中心に木之本の街を散策し、時代とともに変化してきた木之本の歴史について、街道の役割や木之本の風土から考える機会とする。

（２）実施概要
【スケジュール】
○５月 22 日：冨田酒造、白木屋、江北図書館、馬宿平四郎
○５月 24 日：山路酒造

【実施体制】
○授業実施：本校教員４名、コーディネーター 副島拓歩
○対象生徒 ： ２年生 地域文化類型７名
○企画：教諭 富山昌彦
○協力：冨田氏（冨田酒造）、篠宮氏（白木屋）、江北図書館、馬宿平四郎、山路氏（山路酒造）

（３）活動実績
【活動内容】
○事前学習として木之本の街と北國街道の歴史について学習を行った後、木之本の街を散策。２日間で冨田酒造、白木屋、江北図書館、馬宿平四郎、山路酒造を訪問し、各店舗での歴史や取組についてお話を伺った。

【生徒の感想】
○「当たり前のように歩いている通学路の見方が変わった。」
○「北國街道で商売をされている方々のお話から、みなさんが街道をとても大事にされているということがわかった。」

【成果と課題】
○これまであまり学習する機会がなかった木之本の街を散策し、地蔵院の門前町や宿場町の名残を感じることができた。また街の景観の美しさや街の歴史を紡いできた人々の話を直接聴くことで、当時の街の様子をリアルに想像し、これからの街づくりを考えるきっかけとすることができた。

【次年度への反映】
○本時の活動後、現在の木之本の街づくりや今自分たちが住んでいる街について考えるなど、過去と現代の接点について考える機会を設ける。

３-５-６　健康と睡眠の関係について考える

（１）活動目標

○睡眠は生活習慣の１つであり、睡眠と健康は相互に大きく関係しているが、日本人、とりわけ子供たちや就労者の睡眠時間は世界で最も短いとされており、慢性的な寝不足状態であると言われている。睡眠時間の確保には、日本の労働生産性の低さや社会構造の問題を指摘する声があがっているが、個人の生活改善だけでは限界がある。そこで、本時は質の高い睡眠を追求し、有名アスリートからも大きな支持を得ている株式会社エアウィーヴを訪問し、睡眠と健康の関係について考え、自身の生活習慣と健康について考える機会とする。

（２）実施概要

【スケジュール】
○７月４日：株式会社エアウィーヴ

【実施体制】
○授業実施：伊香高校教員２名
○対象生徒 ： ３年生 スポーツ健康類型 24 名
○企画：教諭 脇阪博也、教諭 富山昌彦
○協力：株式会社エアウィーヴ

（３）活動実績

【活動内容】
○工場に到着後、会社や製品に関する概要を聴いた後、２手に分かれて睡眠研究とマットレスフィット体験、エアファイバーの生産及び組付けの生産現場見学を行った。

【生徒の感想】
○「自分の身長や体重・性別のデータを入れるだけで、自分に合ったマットレスの固さを判別できるのはすごいと思った。」
○「工場では、時間と工程をかけてマットレスの生産を行なっておられ、良いものを作るには時間がかかることがわかった。」
○「実際に製品に寝転んでみると、身体がすぐにリラックスできたので、健康には良い睡眠が欠かせないと感じた。」

【成果と課題】
○丁寧な見学体験プログラムで、株式会社エアウィーヴの取組についてよく理解でき、睡眠と健康の関係について考える機会とすることができた。
○対象生徒は、進路選択を控える３年生であったため、自身の進路選択にも大きく役立ったという声も多く聞くことができた。

【次年度への反映】
○睡眠のメカニズムや必要性など、自分たちが気になったことを探究する機会を設ける。

３-５-７　木之本の街の課題を考える

（１）活動目標
○地域文化類型ではこれまで、「衣食住」それぞれの側面から地域の文化や産業を学習してきた。今回は「住」をテーマに、市の行政職員や地域の方から、伊香高校が位置する木之本のまちの課題について講義をうけ、これから必要とされるまちづくりについて考えるきっかけとする。

（２）実施概要
【スケジュール】
○７月４日：長浜市北部合同庁舎、きのもと交遊館、Book café すくらむ

【実施体制】
○授業実施：伊香高校教員２名、コーディネーター 副島拓歩
○対象生徒 ： ３年生地域文化類型 22 名
○企画：コーディネーター 副島拓歩
○協力：菅谷氏、冨田氏（長浜市未来創造部北部政策局北部政策課）、
　　小泉氏（K-ZOHN 運営協議会 空き家活用相談所）

（３）活動実績
【活動内容】
○木之本の街を貫く北國街道を紹介しながら、長浜市北部合同庁舎まで移動。移動後、北部政策課の方から市の条例に触れながら景観保全で必要な視点をワークショップ形式で解説いただいた。講義後、きのもと交遊館に移動し、空き家問題に関する講義を受け、空き家を活用した取組を実践している Book café すくらむへ移動。最後にきのもと交遊館に戻り、振り返り学習を行った。

【生徒の感想】
○「授業を通して、木之本らしい景観とは何なのか言葉にできるようになった。」
○「まちには魅力はあると同時に、課題がとても多いことがわかった。自分にできることは何か、引き続き検討していきたい。」

【成果と課題】
○まちづくりに関する課題を行政・市民目線の両面から、実践的に学習することができた。
○移動が多かったため、移動に疲れた生徒が見受けられた。講義を行う場所を集約するなど、次年度はシンプルな動線で実施する。

【次年度への反映】
○まちづくりに関わる実践者の声を多様な主体から聞き、木之本らしいまちづくりとは何なのか自身で言語化する機会を引き続き作っていく。

3-5-8　スケートボード実習

（1）活動目標

○長浜市では、公園の魅力向上に向け、滋賀県営都市公園「奥びわスポーツの森」にスケートボード場を整備することを明らかにしており、令和５年 11 月に上記公園にて試行的なスケートボード場設置が行われた。このような長浜市の動きを受け、本校では、昨年度より長浜市で 20 年以上活躍され数々の有名スケーターを輩出しているハックルベリーでスケートボート体験を行ってきた。今年度も、スケートボード体験を実施し、高校生や市からスポーツの魅力と可能性について発信することを試みる。

（2）実施概要

【スケジュール】
○7月　5日 ： 本校（事前学習）
○7月 10 日 ： ハックルベリー

【実施体制】
○授業実施：伊香高校教員２名
○対象生徒 ： ２年生 スポーツ健康類型 23 名
○企画：教諭 富山昌彦
○協力：吉田氏（ハックルベリー）

（3）活動実績

【活動内容】

〇事前学習として当日の講師である吉田氏からスケートボードの歴史や安全面の配慮に関する講義をうけた。当日は、普段ハックルベリーで実践されているプログラムにのっとって、体験を行った。

〇生徒２人に対して１名の講師が指導してくださり、生徒のプログラム遂行状況によって柔軟なプログラム進行をしてくださった。

【生徒の感想】

〇「講師の方のアドバイスのおかげで、だんだん滑ることができるようになった。もっと上手くなりたいし、興味を持ったのでスケートボードを今度買ってみようと思う。」

〇「バランス感覚に自信がなく、とても不安だったが講師の方々に丁寧に補助してもらえたので、安心して取り組むことができた。」

【成果と課題】

〇昨年度に引き続き、怪我無く活動を終えることができた。また指導者も多く、生徒のレベルに合わせて指導をしてくださったため、生徒達は充実した体験を行うことができた。

〇この活動を経て、自分でスケートボードに挑戦する生徒や新たなスポーツに取り組みたいと考える生徒が見受けられた。事前学習の時間で心構えを含めた体験の準備を行うこと、そして体験活動においては最終的に体験を成功に導くことが、スポーツ体験を行ううえでも有効であると感じた。

〇基礎の定着に時間がかかることや、学んだ事を次どのように活かすが課題である。

【次年度への反映】

〇ハックルベリーで実習を行うまでに、道具を揃え簡単な技術習得を授業のなかで行う。

〇長浜市と連携し、スケートボードを核にした公園の活性化や、持ち運び可能なスケートボードセクションの設計を行われているハックルベリーと引き続き連携を行い、スケートボードを通した地域活性について考える。

3-5-9　地域の文化・産業を知る、賤ヶ岳散策

（1）活動目標

〇木之本の大音地域では、賤ケ岳の麓から湧き出る清浄な水を利用した養蚕業や製糸業が盛んであった。昭和初期には全盛期を迎え、大音集落の７割が和楽器用の生糸を生産していたが、戦後の化学繊維の普及により養蚕業や製糸業は衰退し、現在では明治期から続く１つの工房を残すのみとなっている。本時では、これらの地域の貴重な伝統文化を知り、その文化をどのように継承するか、かつての人々の暮らしと現代の生活に思いを馳せながら、これからの地域と暮らしについて考える機会とする。

（2）実施概要

【スケジュール】

〇7月10日：佃平七糸取り工房、賤ヶ岳登頂

〇7月12日：丸三ハシモト株式会社

【実施体制】

〇授業実施：伊香高校教員２名、コーディネーター 伊藤利恵

〇対象生徒 ： ２年生 地域文化類型７名

〇企画：コーディネーター 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

〇協力：佃氏（佃平七糸取り工房）、奥伊吹グループ、橋本氏（丸三ハシモト株式会社）

（3）活動実績

【活動内容】

〇7月10日は、糸取り工房にて糸取りの様子を見学し、作業工程の説明を受けた。その後、賤ヶ岳山頂までリフトを用いて頂上まで行き、賤ヶ岳の合戦現場や琵琶湖周辺の景色を望んだ。

〇7月 12 日は、大音の糸取り工房で紡いだ生糸を用い、三味線や琴などの弦に加工している会社、丸三ハシモトを見学し、その取組やこだわりについての話を伺った。

（7月10日：糸取り工房見学）

（7月12日：丸三ハシモト見学）

【生徒の感想】
○「糸取りの大変さが伝わった。働く上で、「忍耐」とちょっとでもより良くしたいという「欲」が必要だという話が強く印象に残った。自分が将来働く時に意識したい。」
○「糸取り工房も楽器の弦を作られていた丸三ハシモトさんは作業の一つ一つが丁寧で美しかった。木之本にはこれほど面白い産業があるのかと驚いた。」

【成果と課題】
○一つの産業の上流から下流まで、実習やインタビューを通して学習したことで、産業とものづくりへの理解を深めることができた。
○学期末に実施した授業であったため、生徒の興味関心をもとにした探究活動を行う時間を確保することができなかった。

【次年度への反映】
○学びを最大化させるためにも、実習後には学びを言語化する振り返り・まとめ時間だけでなく、生徒自身が次の活動を自己決定し、深める活動が必要である。実習後に探究活動を実施することを前提とした時間割設定を行う。

３-５-10　園児と登る田上山

（１）活動目標

○本校近辺にある田上山城砦は、賤ケ岳の合戦の際、羽柴軍の陣城の１つとして着工され、守将として配置された羽柴秀吉の異母弟羽柴秀長が羽柴軍の勝利に大いに貢献したとされる場所である。本時は、天下を分ける戦が行われた田上山砦をこども園の園児たちと一緒に登り、木之本の歴史への理解を深めるとともに、山登りを通じて園児たちとの交流をはかる。

（２）実施概要

【スケジュール】
○10 月 30 日：本校（事前授業）、田上山

【実施体制】
○授業実施：伊香高校教員２名、長浜市立きのもと認定こども園 保育士
○対象生徒 ： ２年生 スポーツ健康類型 23 名
○企画：教諭 富山昌彦
○協力：長浜市立きのもと認定こども園

（３）活動実績

【活動内容】
○田上山砦に関する講義を教員より行ったのち、こども園の園児と合流。飛鳥時代の創建と伝わる意富布良神社より園児の年次も意識した形で交流しながら登山を行った。

【生徒の感想】
○「通学路から見えて校舎のすぐ裏にある山が、歴史深い場所だったということを初めて知った。将来自分に子どもが出来た際、また登りたい。」
○「子どもたちの元気に圧倒された。元気な点はみな同じだが、年次によって発達段階が違うことを実感した。」

【成果と課題】
○園児たちに対して、生徒は目線を合わせながら笑顔で丁寧なコミュニケーションを行えていた。
○地域の歴史文化や幼児教育について学習する機会となったが、普段のスポーツ健康類型での学びとの結びつきは弱い企画となった。

【次年度への反映】
○スポーツ健康類型では、身体の動かし方や安全なレクリエーション活動の運営に関するノウハウを学習している。どうすれば、普段類型で学習している内容が生かされた連携授業を実施できるか、類型担当教員とも連携しながら授業内容を検討する必要がある。

3-5-11　山村文化を知る

（1）活動目標
○長浜市余呉町には、かつて福井・越前へと続く琵琶湖・淀川の最源流、高時川沿いに畿内と北陸を結ぶ北陸道として旅人たちが行き交った「奥丹生谷」に位置する７つの村があった。この源流域では、トチノキの巨木やブナの森が残されおり、豊かな自然と共生する山村文化が息づき、数々の文化や技術が根付いていた。しかし、高齢化によって森林の保全・管理は困難となり、加えて高度経済成長期による燃料革命やダム計画の影響で各村々は 1995 年までに廃村、冬仕事として盛んに作られていた木かご 「小原かご」の作り手も旧小原村出身の方１名残すのみとなった。そこで、本時はトチノキの巨木林が残る自然環境やかつて人々が暮らした村を散策した後、栃餅づくりを行うことで自然から得られる恩恵と文化を享受する活動を行う。

（2）実施概要
【スケジュール】
○10 月 30 日：長浜市余呉町小原、本校

【実施体制】
○授業実施：伊香高校教員３名、コーディネーター 副島拓歩
○対象生徒 ： ２年生 地域文化類型７名
○企画：教諭 富山昌彦
○協力：前田氏（高時川源流の森と文化を継承する会）

（3）活動実績
【活動内容】
○当日は、会の皆さまのご案内で小原集落を訪れ、集落跡をご解説いただきつつ、トチノキの巨木群を確認するため奥深くまで山道を登った。
○その後、学校に戻りトチモチ作りの一部を体験させていただき、試食も行った。美味なトチモチの背後には、採集はもちろん、下ごしらえやあく抜きなど多くの工程があり、長い時間

をかけて行われることを学習した。また、雪害に対しても知恵と工夫、そして万物への感謝をもって柔軟に対応してきた歴史があること、貴重な文化の継承に課題を抱えていることなど、様々なことを学んだ。

（小原　トチノキ巨木群探索）

（トチモチづくり体験）

【生徒の感想】

○「自然と共に生きていた小原の人々の知恵をたくさん教えてもらった。買いたいものがすぐ買える、食べたいものがすぐ食べられる便利な現代社会もいいけれども、山の中での暮らしも楽しそうだなと思った。」

○「栃の実の殻をむく作業が意外と楽しかった。綺麗に剥くコツがだんだんわかっていった。今後機会があったらやってみたい。」

【成果と課題】

○実習後、山の恵みの豊かさに感銘を受けた生徒が、木の実や桑を活用した探究学習を行った。五感を活用した実習が生徒の自主的な課題設定に良い影響を与えた。

○今回の授業では時間の都合で、トチモチづくりの一部のみを体験した。山村文化への理解をより深めることを主眼に置くのであれば、今後は採取、下ごしらえ、あくぬきなど全工程を学ぶための授業設計が必要である。

【次年度への反映】

○生徒の自主的な探究活動と地域への深い理解を促すためにも、五感を通して森の恵みを体感する実習は、今後も新学科のみならず他類型も行うべきである。引き続き地域に根付く山村文化への理解を深める授業を検討していく。

３-５-12　地域と協働して行う国道美化活動

（１）活動目標

○かつて本校にあった農業科の活動を継承し、平成 16 年度からは国土交通省のボランティアサポートプログラムのひとつとして活動してきた国道美化活動。地域住民と協力して美化活動を行うことで、地域社会への貢献意識を育むことをはかった。

（２）実施概要

【スケジュール】

○11 月 20 日：国道８号線沿い

【実施体制】
〇授業実施：伊香高校教員３名
〇対象生徒：２年生 地域文化類型７名
〇企画：教諭 富山昌彦、教諭 中川聖良
〇協力：木之本地区地域づくり協議会

（３）活動実績

【活動内容】
〇国道８号・滋賀県長浜市木之本町木之本～木之本南約 750m の間に、パンジー120 本、ビオラ 120 本並べた。42 鉢のプランターに地域の方々と手分けをし、交流しながら植えていった。

【生徒の感想】
〇「地域の方々と一緒に作業するのは初めてだったので、最初は緊張しましたが、話をするうちに緊張がほぐれて楽しくなりました。」
〇「普段何気なく通っている道が、自分たちの手で少しでもきれいになると思うと、とても達成感がありました。これからも地域に貢献できる活動に参加してみたいと思いました。」

【成果と課題】
〇本校の地域連携授業の走りとなった平成 16 年度から始まるプロジェクトを今年度も継続して実施することができた。
〇授業の時間内で、定期的な水やりを高校生が実施することが難しく、天候に頼る形となった。

【次年度への反映】
〇今後も引き続き地域文化類型にて、地域の方との伝統ある交流事業として本活動を実施していきたい。
〇水やりについては、活動を課外活動的に行うなど柔軟な対応が出来る時間を確保する、地域の方々との役割分担を行うなどの方法を検討する必要がある。

３-５-13 「木之本の新しいカフェメニューを考える」

（１）活動目標
〇「つるやパンが運営するカフェ Lib+の新しいカフェメニュー」をテーマとするアイデア創出をし、それをもとにビジネスプラングランプリに出場する。
〇ビジネスプラン作成を通じて、課題を解決するための論理的な思考力・他者と協働しながら課題を解決する力を身につける。

（２）実施概要

【スケジュール】
〇７月３、９、10、11、12 日：本校
〇７月 17、19、23、24、29、31 日、８月１、５、６、７日：つるやカフェ、本校調理室
〇８月 23 日：つるやカフェ

【実施体制】
〇授業実施：伊香高校教員８名、コーディネーター 副島拓歩
〇対象生徒：２年生 特進類型 27 名
〇企画：コーディネーター 副島拓歩、教諭 富山昌彦
〇協力：西村氏（有限会社つるや）、藤本氏（日本政策金融公庫）

（３）活動実績

【活動内容】
〇地域内外に愛されるパンづくりをされている西村氏より、顧客目線での商品づくりについて講義を実施した。それを受け、「どのようなカフェメニューがあると面白いか」を各チームに分かれて話し合いアイデアを出した。続いて、日本政策金融公庫の方から、収支計画の考え方等について講義をいただき、ビジネスプランをブラッシュアップしていった。
〇授業後、有志生徒４名によって活動を継続。西村氏をはじめ地域の方にご協力いただきながら試作を実施。２商品を木之本地蔵大縁日で販売した。

（プランシート作成を行う授業の様子）

（授業後に有志で行った商品開発、販売の様子）

【生徒の感想】
〇「自分たちで商品を検討し、収支計算をすることで、商売を行う難しさを実感しました。」
〇「商品開発は、０から考えることばかりでとても難しかったです。商品を開発・販売するにあたり、たくさんの方に支援していただきました。そして意見や励ましの言葉を頂きました。今回の経験を活かして、さらなる挑戦をしていきたいです」

【成果と課題】
〇販売した商品

左：「青春どろだんご」抹茶ゼリーと白玉団子を使用したスイーツ
右：「桑トニック」アルコール処理した桑酒と桑茶にトニックウォーターをブレンドしたドリンク

〇地域の多様な方々と連携し、アイデア創出することができた。有志４名による２チームはアイデアの実現・販売まで結びつけることができた。
〇実現したチームによるアイデアは、日本政策金融公庫主催「ビジネスプラングランプリ」にて、全国ベスト 100 に選出され、滋賀県教委主催「高校生による【しが】学びの祭典 2024」では優秀賞を受賞した。

【次年度への反映】
〇①アイデアを創出するための知識やノウハウが整っていたこと、②地域に愛され、生徒に親しみのある「つるやパン」さんにご協力いただいたことから生徒のモチベーションが高まり、全チームがプランシート完成させることができた。
〇引き続き生徒が校外で活躍していくためにも、主体的に課題解決に取り組む資質能力を地域連携授業や総合的な探究の時間で育んでいきたい。

３-５-14　「SAKI 寄付教育」

（１）活動目標

〇社会課題を知り、課題に向かうことで社会に自ら参画する姿勢を身につける。

（２）実施概要

【スケジュール】
〇１月 17、20、21 日：本校

【実施体制】
〇授業実施：伊香高校教員２名、コーディネーター 副島拓歩、中山郁英
〇対象生徒：１年生 特進類型 27 名
〇企画：コーディネーター 副島拓歩、教諭 富山昌彦
〇協力：日本総合研究所 渡辺氏、橋爪氏

（３）活動実績

【活動内容】
〇寄付を通してサステナビリティの実現を目指す事業をされている日本総合研究所の方々を講師としてお招きし、社会課題の解決を図る団体に対し、実際に寄付をする体験プログラムを実施した。

【生徒の感想】
〇「授業を通して寄付先の団体が寄付金をどのように使っているのかを学ぶことができた。」
〇「寄付が誰かの助けに確実になっていることがわかった。日本人は海外の人に比べて寄付の習慣が少ないということがわかった。少しの寄付でも多くの人がすることが、社会課題解決に繋がるはずだと思った。」

【成果と課題】
○国際的な社会課題は、課題を取り巻く構造が複雑で、スケールも大きいため、なかなか授業のテーマにすることが難しかった。学校外の機関と連携することで、スケールが大きい社会課題に対して向き合うきっかけを作ることが出来た。
○１年生ということもあり、授業の活動目標はプレゼン資料作成だった。多様な情報の中から必要な取捨選択をし持論を形成することに生徒は戸惑っている様子だった。情報活用能力が不足していた。
【次年度への反映】
○学外の機関と連携することで、学校のリソースに縛られない授業を実施することができる。引き続き多様な主体と連携していきたい。
○今後のプロジェクト学習による学習効果を最大化するためにも情報活用能力を育成する必要がある。グラデュエーションポリシーに照らしあわせながら、「情報Ⅰ」の立ち位置を明確にしたカリキュラム体系を構築する必要がある。

３-５-15　小原かご製作体験

（１）活動目標
○本類型では、以前長浜市余呉町にある旧小原村を散策し、かつての人々の暮らしや文化を辿る活動を行った。本時は、冬仕事として盛んに作られていた木かご 「小原かご」の製作体験を行い、山村の暮らしと文化を体感する。

（２）実施概要
【スケジュール】
○２月７日：本校

【実施体制】
○授業実施：荒井恵理子（荒井木籠製作所）、本校教員２名
○対象生徒：２年生 地域文化類型７名
○企画：教諭 富山昌彦

（３）実施実績
【活動内容】
○小原かご製作の継承者である荒井氏より、小原かごの歴史や素材、師匠である太々野氏から聴いた山村での暮らしについて、解説いただいた。
○解説後は、小原かご製作の基本技術を用いたコースターを１人１個製作した。

【生徒の感想】
○「小原かごの材料について聞いて驚きました。コースターづくりは、固くて難しく、力と技の必要性を感じました。自分が作成したものは、プロの方が作成したものとは比べ物にならず、小原かごの伝統を残していきたいと感じました。」
○「接着剤などのない時代に、頑丈なかごを作っておられたことに驚きました。少しですが、季節に応じた昔の人々の暮らしを想像することができました。」

【成果と課題】
○10 月の「山村文化を知る」実習からつながりのある実習を行うことで、小原かごの材料調達から製作、当時の人々の暮らしのイメージを具体化することができ、山村文化というテーマで実習をシリーズ化させることができた。
○短時間のなか、素材からモノを作る体験を行うことができ、昔の人々の暮らしをモノづくりの観点から見直すことができた。
○本時はハサミを用いて実習を行ったが、ハサミを使うことに慣れていない生徒が一定数いたため、安全面に注意を払いながら行う必要がある。

【次年度への反映】
○安全面に配慮し、小原かごの材料を自分たちで調達する。
○山村文化の学習を持続可能な社会づくりの学習と関連付け、山村での人々の暮らしが現代の生活においてヒントになることを考える。

３－６　伊香高校魅力化シンポジウム

＜日時等＞

令和７年３月 23 日（日）13：30～15：45（木之本スティックホール）
参加者（来場者）数　88 名

＜内容＞

２部構成でシンポジウムを開催。第１部は、「伊香高のイマとミライ」と題して、吹奏楽部のオープニング演奏、続いて長浜市長からの開会挨拶を賜った後、今年度の伊香高校の取組紹介を行った。取組紹介１つめは、２年生特進コースの生徒による、木之本地蔵大縁日で販売したカフェメニュー製作過程をまとめた「地域と連携したカフェメニューの開発・販売」。２つめは２年生自然環境コースの生徒による森と川のつながりをまとめた「滋賀県北部の森・川・湖のつながりに関するフィールド調査」。そして最後は、来年度より開設される新学科の概要をこれまでの先行授業の成果をふまえて魅力化推進室室長の富山教諭より紹介した。第２部は、「地域とともに描くミライ」と題し、本校臨時教諭の大久保より地域課題への挑戦として「高時川の濁水調査の紹介」を行い、その後、昨年度に発足した「地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム」会長の大林様より、地域を主体とした今年度の取組をご紹介いただいた。続いての地域の方々や本校生徒、こども園の園児たちによるリレートークでは、「これからの地域と伊香高に期待すること」をそれぞれに語っていただいた。フィナーレでは、地域の合唱団、地域のヨシ笛サークルの方々とともに、伊香高校の校歌を会場全体で合唱して、シンポジウムを終了した。また、ロビーでは、部活動などの課外活動の展示や伊香高校の地域連携活動のポスター展示、今年度連携を行ったながはま森林マッチングセンターや長浜バイオ大学のパネル紹介、地域情報誌みーな編集室さんによる「森の探究科」特集号の販売も行った。

＜参加者の感想＞

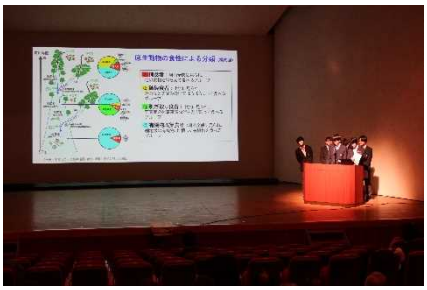
・「生徒のみなさんによる運営や活躍の場があり、大変良いと思った。」
・「素晴らしいプログラムで希望がもてる学校になると思った。ただ子供たちにどのように良さを伝えていくは難しいところである。」
・「特色のある普通科でより多様な進路の選択ができる学びの場や、地域に出て伊香高でしかできない経験を積めるカリキュラムを設定し、たくさんの高校生が活き活きと活躍してくれることを期待しています。」
・「リレートークの形式が新鮮で面白かった」
・「森を守り、育てていくことは地域の未来にも関わってくることだと思う。エネルギーも大切な内容です。広い視野を持って、古くから伝統的に紡いできた生産力を大切にして欲しいと思う。高時川の水質と森（県下全体）を伊香高から発信してもらえれば有難いです。」
・「せっかくのシンポジウム、もっと地域の方の参加が欲しかった。」
・「学校の熱意と地域の熱意がまだ県内に伝わっていないのが残念です。森林について火災
・土砂災害・獣害などのマイナスイメージを払拭して、学科の魅力を伝えてください。」

＜成果と課題＞

・今年度は生徒の発表だけでなく、地域の方々の登壇、発表など、多くの方々にご協力いただけた。
・先行授業紹介の充実や、連携先のパネル紹介など、ロビー展示の内容をより充実させることができた。
・シンポジウム後のアンケート結果から、今回のシンポジウムに対する参加者の満足度は高く、内容や運営に関しても滞りなく準備できた。
・シンポジウムも３回目となり、校内でもその内容や運営について、周知・浸透することができた。
・今年度は学校の取組にご協力くださっている方が増えたおかげで、昨年度より参加者を増やすことができた。一方で学校の取組に携わっておられない方に、どのようにすればご出席いただけるか、広報の仕方や内容を検討する必要がある。

＜次年度への反映＞

・地域住民の方や本校在籍生徒の参加をもっと促して、参加者を増やす。
・生徒の課題探究活動を活発化させ、本校の教育活動をより地域の活性化につなげるよう工夫する。
・本校の取組に限らず、小学校や中学校の成果発表を行うなど、シンポジウムの内容をよりブラッシュアップさせる。
・来年度新学科設置にともない、新学科での生徒の活躍が見えるよう工夫し、再来年度の全国募集に向けた内容を検討する。


生徒発表の様子

リレートークでの園児たち

ロビー展示

４－１　広報チラシ

○伊香高通信　第５号（６月発行）

GO BEYOND プロジェクト活動レポート

滋賀県立伊香高等学校
滋賀県長浜市木之本町木之本２５１
TEL：０７４９－８２－４１４１
ホームページ　インスタグラム

2024.06.01　第５号

伊香高生や高校に関する最新の活動をお届けします！

1　新学科　「森の探究科」のプレ授業が始まっています

■新学科「森の探究科」とは？
伊香高校では令和7年度に、滋賀県北部地域の豊かな自然環境、森林資源などを活用し「森で学ぶ」をコンセプトに、生徒の「生きる力」を地域とともに育む「森の探究科」を開設します。
森の探究科では、4つの学校設定科目を通して、森林の多面的な役割を理解します。匠習現に根ざした暮らしや、人と自然が共存する循環型社会の構築に資する人材育成を行っていきます。

新学科コンセプト：「森で学ぶ」生徒の「生きる力」を育む

4つの学校設定科目：森の探究（森の多面的な役割）／森の生態（森の生態系）／持続可能社会（持続可能な社会）／森の学術総論（森の学術）

■地域の専門家を講師にお迎えしています
来年度の新学科開設に向け、今年度も引き続き地域の専門家の方々にご協力いただきながら、カリキュラム検討を進めています。特色クラス自然環境コース「環境Ⅰ、Ⅱ」の授業にて、今年度も様々な授業を行ってきました。

【今年度に行ったプレ授業】
・野外の森、水の下での樹木調査
・伊香地域の森林文化と伊香高の歴史
・地域の教材（ジビエ・山菜）を使った調理実習
・山門清流の森での樹木・土壌調査
・森の大切さを学ぶ！（森林と人間の関係）
・森の大切さを学ぶ！（森林と水の関係）

今年度の実践を基に、新学科がより良いものになるよう検討を続けていきたいと思います。引き続きご注目頂ければ幸いです。

2　木之本自治会様より桜の苗木を頂き、植樹を実施

木之本自治会様より、桜の苗木を頂き、植樹を行いました。伊香森林組合の方々にご指導頂きながら、自然環境コースの有志のメンバーが本校3号館の土手に植樹しました。この春、伊香高に咲いた桜も数十年前にどなたかが植樹されたもの。過去を思いやり、未来にバトンを渡すことを体現する時間となりました。

3　全国トチノキ学ネットワークに登壇！

株式会社モンベル会長の辰野勇氏をはじめ様々な森林の専門家が登壇した全国トチノキ学ネットワーク第1回長浜大会。「トチノキ」をキーワードに、日本各地から専門家の方々が木之本スティックホールに集まりました。森林生態系の保全に向けた教育分野からの取り組みの一例として、伊香高校が開発中の新学科カリキュラムやプレ授業を紹介しました。
全国から参加された専門家の方々の講演を通じて、湖北の森林の可能性や課題を知ることができ、カリキュラム検討のヒントを得る貴重な機会となりました。

4　今年度から新しいコーディネーターを迎えました

伊香高校では、令和4年度より地域連携コーディネーターを配置し、地域資源を生かしたカリキュラムの検討やコンソーシアムの立ち上げ、探究の授業の実施などを地域と協働しながら進めています。
今年度から「やまのこ」の実習指導員やサポーターのご経験がある伊藤利恵さんが新しくコーディネーターとして就任しました。伊藤さんは、新学科カリキュラムの検討やプレ授業の実施に関わっており、地域と連携した実践的な学びの場づくりが加速しています。

5　地域文化コースの授業で北国街道を散策しました

特色クラス・地域文化コースでは、歴史豊かな地元に密着した講座を設け、地域の文化やまちづくりについて学習しています。5月には、2年生の授業で北国街道を散策しました。北国街道と宿場町の成り立ちについて学習した後、実際に街に繰り出し、街道の魅力とその歴史を地域の方々に解説していただきました。通学路にもなっている北国街道。今回の授業を踏まえて新たな視点で見ることができそうです。ご協力いただいた地域の皆さま、ありがとうございました！

【お世話になった地域の方々】
・木之本地蔵院さま　・日本酒蔵ゆきのさま
・江北図書館さま　・大橋平四郎さま　・高田酒造有限会社さま
・江北図書館さま　・山岸酒造有限会社さま　（敬称略）

新学科「森の探究科」のカリキュラム検討も大詰め。どうすれば、新学科の魅力を中学生に伝えることができるか？様々な方にご協力いただきながらPR活動を行っています。引き続き応援のほど、よろしくお願いいたします！